

奇譚クラブ

珍談 奇聞

南方いざこざ繪卷
梅田の女怪たち



小説 怪奇
小説 記録

洞窟の娼婦
人魚密造窟

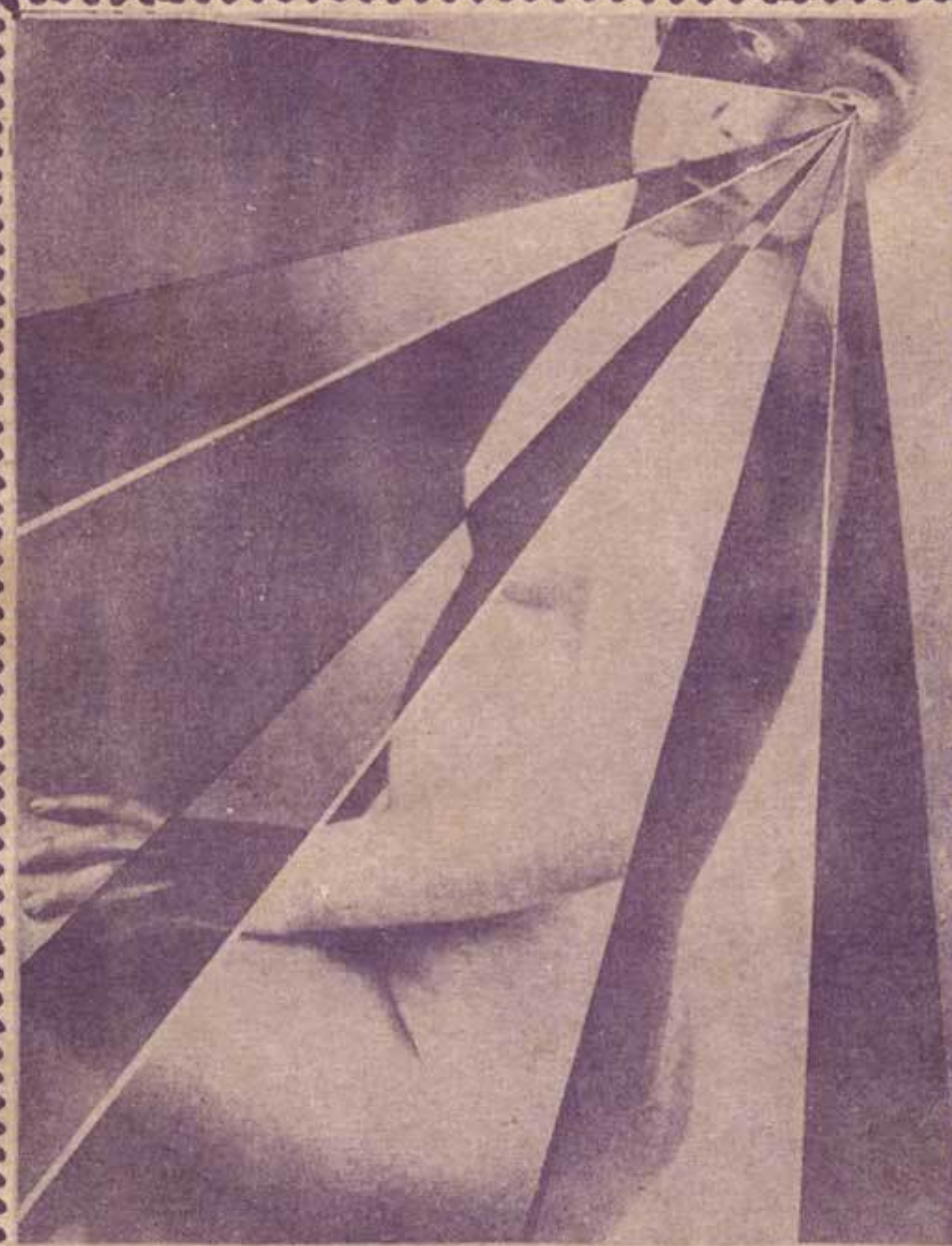
道頓堀河畔の
秘密ナイト
クラブを
挟ぐる

逃 げ 出 し た 戀 び ごと

奇譚クラブ

珍談と奇聞特集號

定價七拾圓



しずかで懐かしい夜
オンナは過去の咽び泣きを
テーブルの影でそつと囁いた
オトコは、やはらかにうちうなづき
オンナの物語りの片端しな
うけいれた
語るピンクセイドの瞳から
すつぱく落ちた一と雫

オトコは世にも心やさしく
オンナの身の上になにくれと
温情を寄せた
すべては、みなひと時の^{きこ}夢さば
知りながら、オトコもオンナも
しばし息をひそめて涙顔になる

初恋を失ったカルビスが
テーブルの上で 冷たいです

石 井 米 藏





七比尋玲子
肉体の街
 をゆく

楽屋裏を馬のこしら
 見せたらきつと
 七比ふでせうネ

狐奈スケツチ行

新世界
 温泉劇場

これ
 子供の
 くせに
 そんな
 看板を
 見るのぢや
 ありませんヨ



こんな
 ホースで

踊つて
 るの
 ヨ

客席より
 声あり

オー
 音
 だ
 い
 じ

ちか
 ぶ
 ぜ
 !!



此の塀のまへは晴しき世界があるんですって

ほんとか知ら?
「天国の門」



三業分立の街
待合と喫茶店が
仲よく並んでゐます



あんな
大きな
看板!!

まあッ
いやヨ



この路を
玲子が歩いたら
塩をまかれますワ



あたしも
接客婦に
ならうかしら?



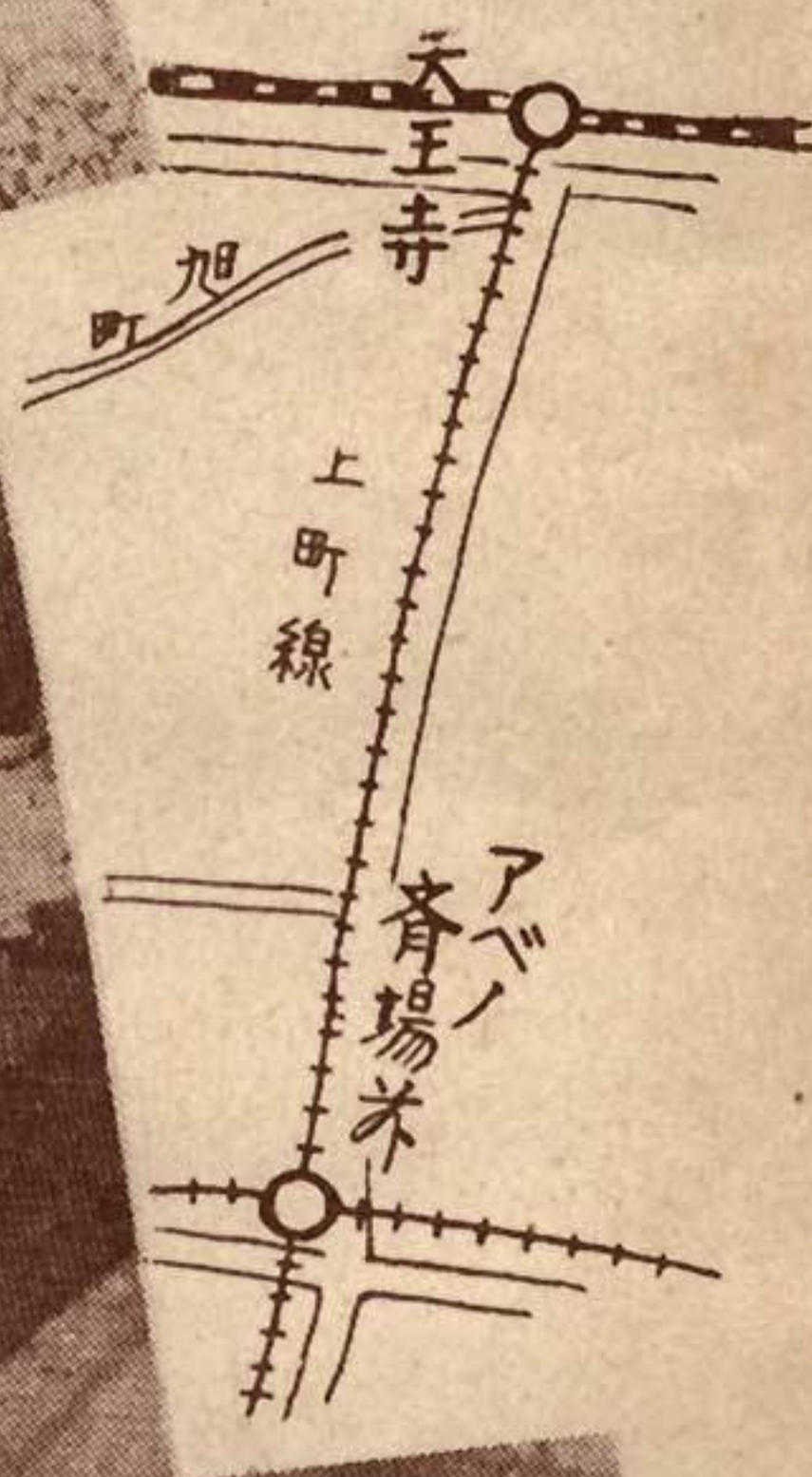
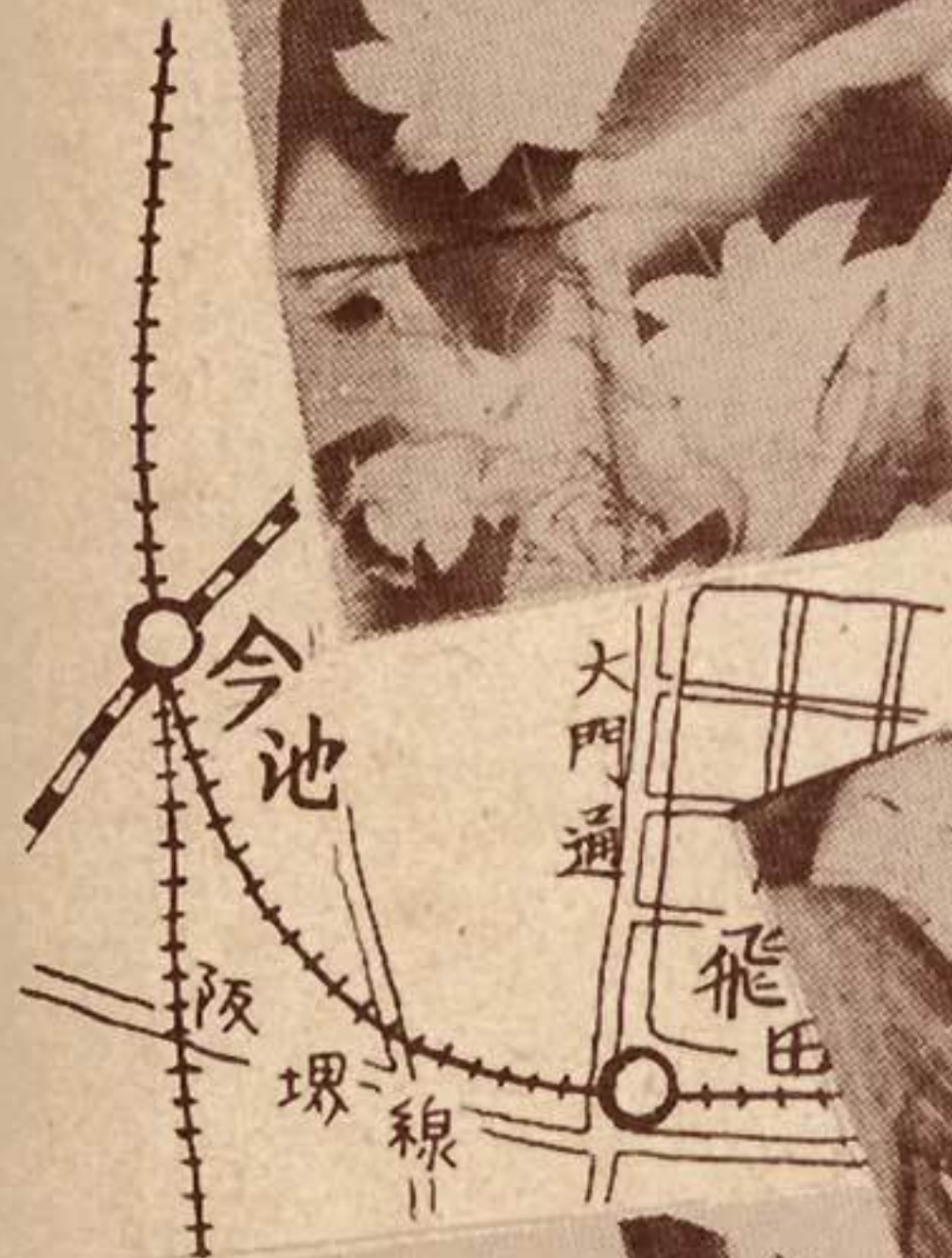
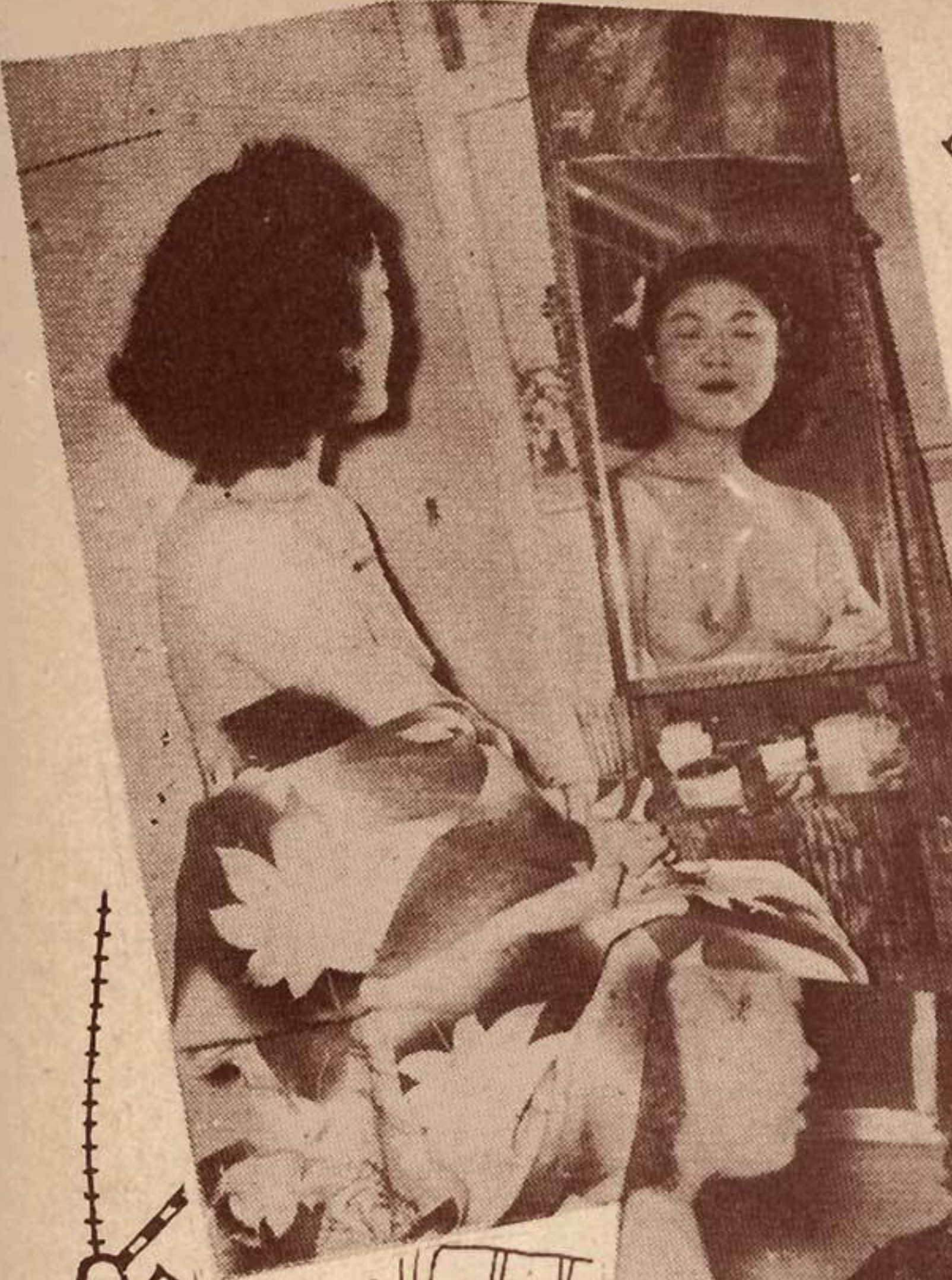
カストリ

ビール
いっねえ!

フラク



男のSF
気もち
わかるワ



あの女の人
病院から出てくるワ
しよんぼりして



人を呼ぶ

このけむりは

歡樂郷えの
一里塚

ソワーツ

とんでもない
玲子は此所へお世話に

なりに来たんぢや
ありませんヨ!



ギョツ!!

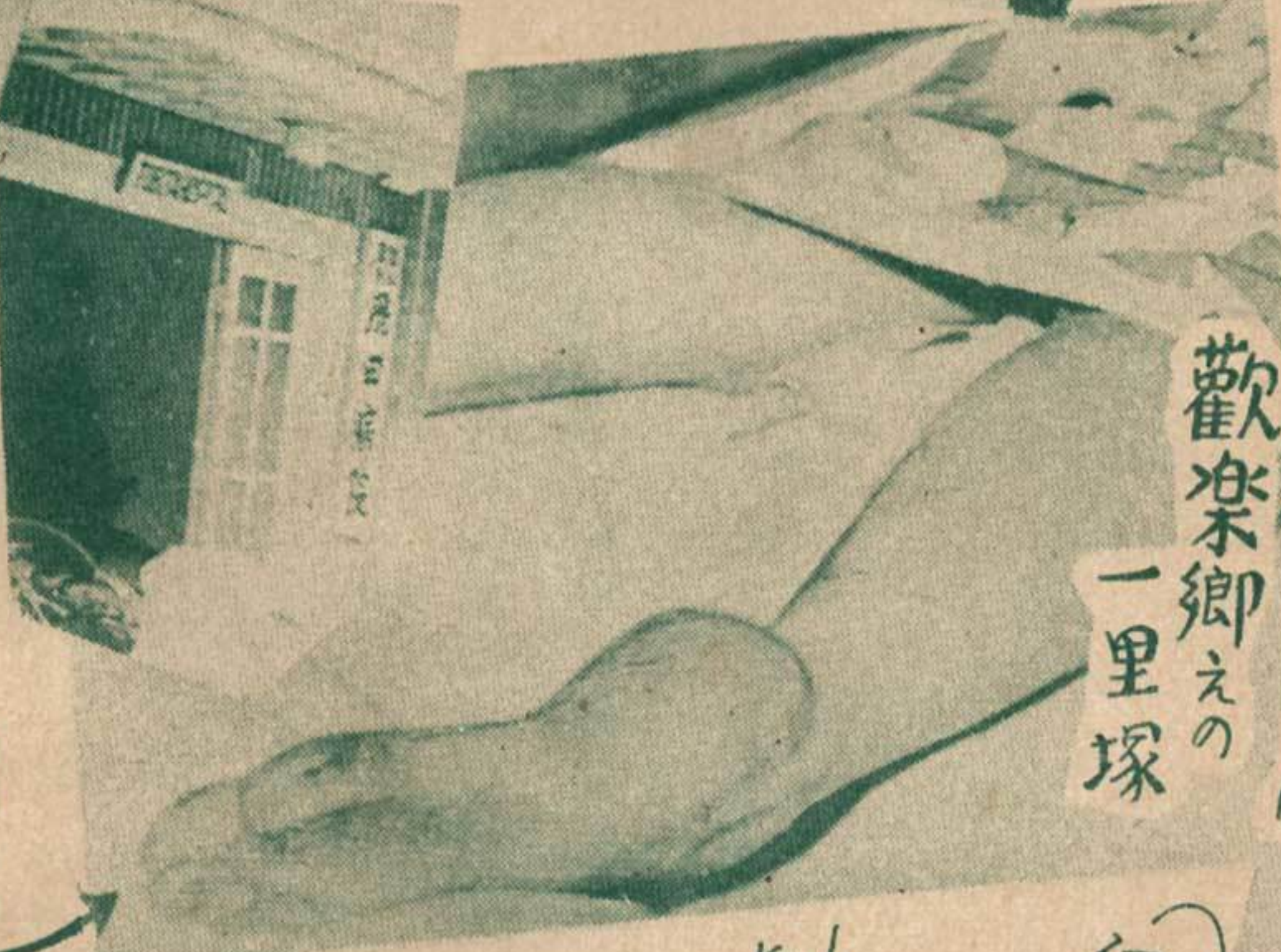
だから始めから

云はないことぢやない

フラク来るいてれば

こんなものにもぶつかり

ものすワヨ



何かを

暗示してる

ようたワ!

性病科



何

見えてるう

人院してる

用事があるの?



「肉体の街」のすぐそばに
こんな所があるなんて



文 兵庫一平
絵 須磨としゆき



古今川標
急自慢



わざといじらしいことを言つて、
人の同情を買おうとする。
頭なんか鞠らはるもんでつかい
な。男の氣をひいてはるねんや……



濃いルージェエの
よふや知つたる
未七



若菜家の

剃りに
なぐと
むご
せから

口紅も濃くしたし、厚化粧に着飾
れば、未亡人なんて、アンタあほら
しゆうて……

紅葉の名所は、吉原に近い下谷の
正燈寺と品川に近い海晏寺、いづれ
も通り抜けられぬ大難所。
このころは手近かなところ、どこに
でもおまつせ。



ネオン
の灯
難所はりの
街の角



紅葉狩
とつちへ行つて
魔ツもウ

チヨット兄さん。
コーヒなと飲んでいきなはれや、
ねえ、チヨイト……

獨身のうちは、格別目にたしず、
人もなんとも言わなかつたが、妻を
もつてからは、からかい半分に、な
んとかかとか言う奴が多くなつてう
るさい。
やつぱり疲れるのやろか、朝寝は
昔からのワシの悪い癖やがなあ……



毎晩
お樂
うらやま
め



せろ
もろ
朝寝に
きずが
つ

なにを言うてはりまんねん。冷や
かさんといっておくれやすや。わしは
入一倍恥かしがりでつせ。……

幸主が矢をすえてくれといっているのであろう。
矢には前三後七の戒がある。矢の三日前とあと七日は、夜の慎しみがあ



七日間
別れ寝る気
なうて
見る



女房に
久々にのめば笑っ
てる

それを慎しまなければ、折角の矢が無駄になつてしまう。あなたにそれが守れますか、これが笑っている妻の顔であろう。
そんな辛棒でけるやろか、心配なもんや、けれど肩が凝るのには勝てんさかい……

密会の露顯、女房が妾の森通らしく感じられる。
もうこうなつたら、逃げも隠れもしまへん、どうなと氣のむくようにしとくれやす……



新憲法
自由ですよと
不貞な露れ



なにせい
帯をばし
長

男女同權。あなたがお妾を持つたら、あたしも浮氣する權利がある道理でつしやろ。……

一度、仲條へかゝつたが、目的を達せず、腹がますますせり出してくる。此れは大變と五ヶ月ぶり、又ぞろ中條の御厄介。
中條。産科専門の女醫者。
こうふくれては、もうておくれだつせ、もつと早よう來たらえいのんに……



入院三日
すじい
顔で
帰る

あの娘はたしか腹ボテやつた筈やが、いつの間にか仕末しよつたんやろ。えい、この間病氣やゆうて二三日休みよつた。あの時か。……



仲條へ
置りて
顔

娘の戀病か。
こんなのん、いまだき珍らし、おまつせ、まるで明治型やがな



恋病
ほうとうと
感心
するばかり



母
親
も
し
も
し
物
思
い

ほうとう、あの娘が戀病？なんと封建的な娘やなあ。

江の島の土産か。
こんなどうや、よう似とるぞ、
そつくりやないか……



茸狩
帰る
やか
喫茶店



辨天の
目とは
しやれ
土まも

なにをがや／＼言うてんのんや、
早よう帰つて松茸のスキ焼で一杯飲
もうやないか……

下女が、やる／＼べつたり女房に
なつてゐるというような場合であろ
う。もう妊娠五ヶ月にもなつて、表
向きにしなければならぬので、俄
かにおはぐるをつけて内儀らしくす
る



おはぐる
俄にけ
とがー
れ



マスターに
あまえた
甲斐の
金指環

そのために、今までのことが人に
知れてしまった。
うまいことやらはつた、お芳どん
はなかなかやりてやな……

病氣の治り際か、産褥の床ばなれ
か、もうよからうと、まだ遠慮して
いなければならぬことを、ついに
つて、ぶり返すのは、女房がある
からのこと。



パン
すまじ
夏夏
見ま
の



女房が
あま
魔をさす
肥ま
ざり

病氣は怖し、金は惜しい。それは
そやけど煩惱の奴は、容赦せえへん
し……
えらいことした。あの時……
後の祭つて、この事だんな。

あの娘にはこんな男があるとい
うことは、もう大分評判になりかけ
てゐるのに、うちの娘に限つてはとい
う信仰をもっている母親は一向気が
つかない。



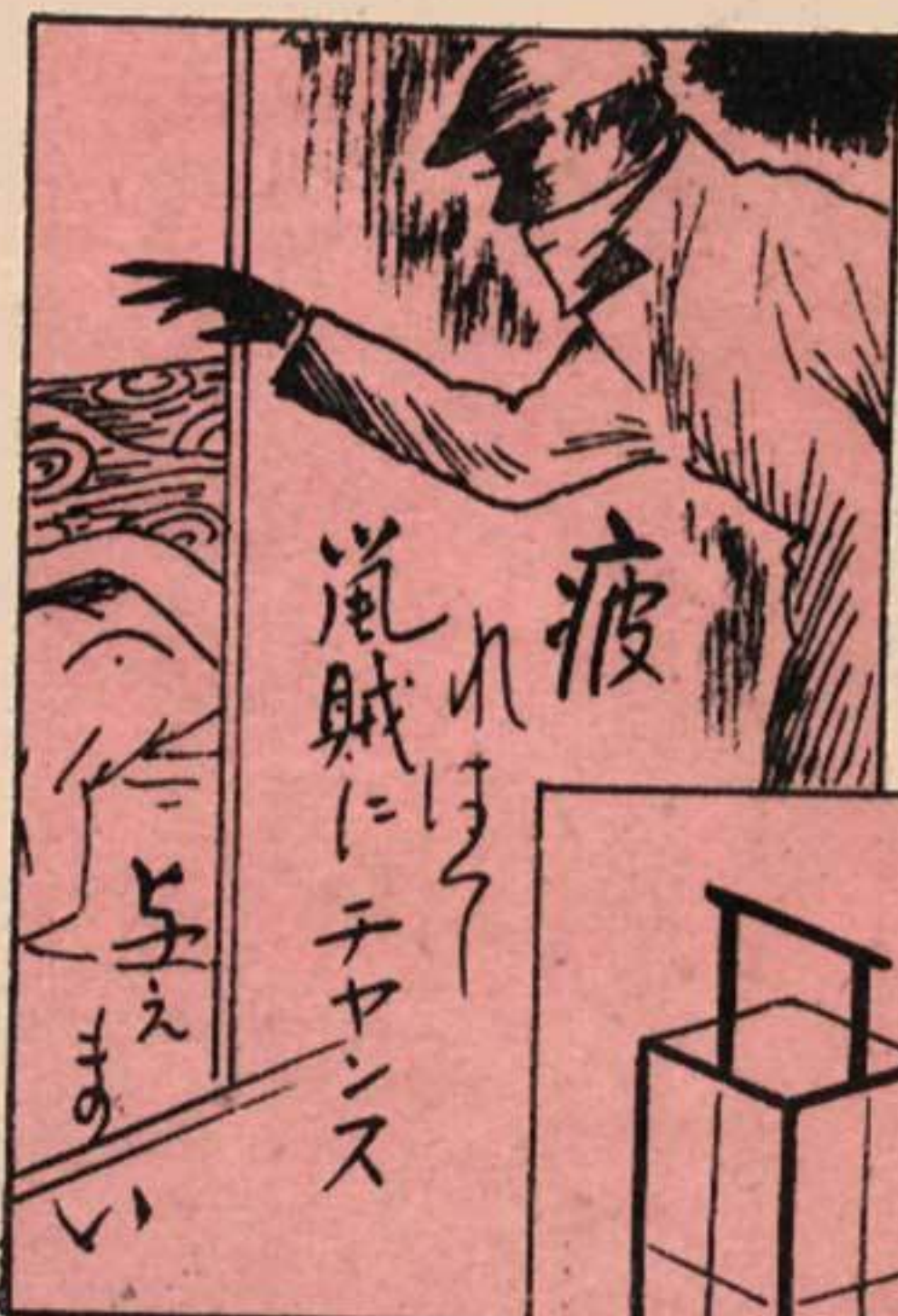
あれ、れや
知つたに親は
と気が付く



横文字
ラフレタ
親知らず

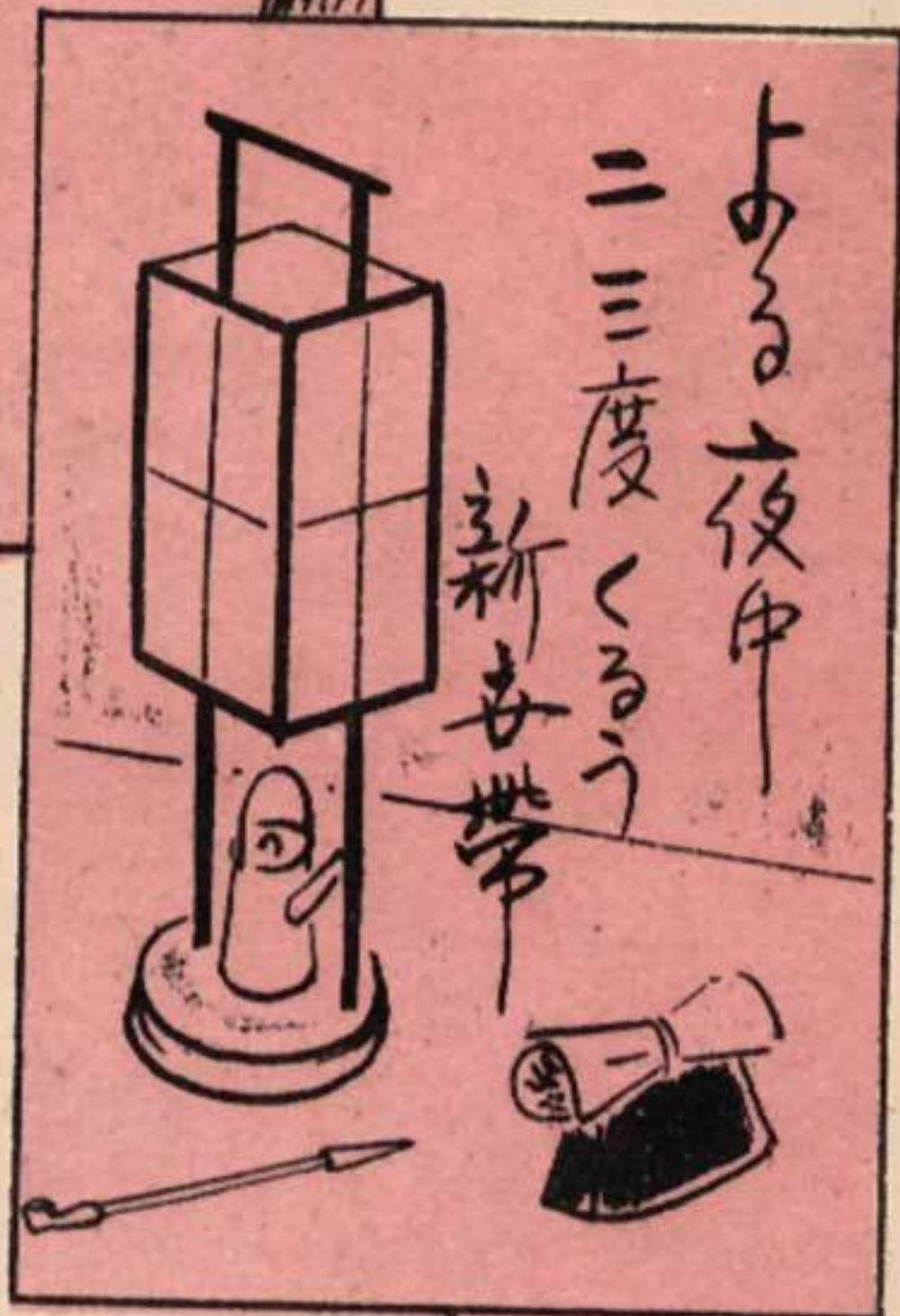
まだ、ねんねやと言うてはるけれ
ど、そりや親の欲目だつせ、氣いつ
けなあきまへんぜ、アブレダールな
んとかやから……

かけかまえない、若夫婦のち
ぐるい。若い時は二度とおまへん、
しかし……
はたの身にもなつてみてくれなは
れ。



疲れ
嵐賊にチャンス

泥君曰く「こんな入りよいところは
おへんで、新世帯を狙つたら絶対に
間違ひおまへん」



よる夜中
二三度くるう

新世帯

嫁入早々懐胎、わるくするとん
だ疑いを受けるところ、はつはつは
辛じて、丁度一杯というところ。
ちと早やすぎしまへんか、指よう
折つて数えてみい。……



処女
非処女
戦後派だけに不安心



きた月を
入れよう
ぐういそり

「妾は正真正銘の處女でつせ」
「何に言うてんね。アブレゲール
はわからへんで」

はきものを突きかける間もなく、
あわてゝ逃げ出した。



アパートで
遊ぶなどは
いたすまへ



消男の
はだ
き
不首尾

主人は旅行中と聞いてたんやが、
さつぱりわやゝ、けど裏口があつて
たすかつたんや……
窓から逃げ出すのは、えゝ恰好や
おまへんで、人には見せられへんが
な。

懐胎をきらつて、避妊薬を毎月の
む。「一筋づゝ」は價一筋だけの薬
をのみの意、一筋は錢四百文。



避妊薬
セツ道具
のなかへ入れ



い
やが
月に
一筋づゝ
飲み



この頃、避妊薬は常識だつせ。子
供産んだら、あかへんし。……
ハンドバッグの中で、コンパクト
と避妊薬が仲よく並んでゐる。

口上



あたしは、毎日街を歩き廻るサンドイツ
チマンの娘でございます。
あたしは、至つてやんちゃな十九の娘でござ
いますので、こんな裸に近い恰好でも、
決して恥しいなどと思つた事は一度だつて
ありませんわ。
なせつて、一人でも多くの方々に見て頂く
のがあたしの商賣なんですもの。
どうかお客の皆さま、あたしに見て面白
くて讀みごたえのある奇譚クラブを御愛讀
下さるようお願い致します

酒落判断

おもしろ結婚したら

面白い話「按摩」

食物と女

一体なんでしょう？

女が喋らずにいるのは？

男が喋らずにいるのは？

或る節約家の小使帖

詰将棋新題

損をしたのは誰だ？

詰 著 新 題

漫画「センダン」は双葉より

妾の名は娼婦

二十万圓の女

恐怖のない女

うそか、ほんとか

死人が自由に

生き返えれる

なぜ？女は？

尻が大きいか

顔がないか

お乳が大きいか

珍 話

街頭録音

腹を割つた話

黄昏異變

氣を廻してはいけません

ワイツ泥蟻奴

「マンガ」捕もの奇譚

現代流行

身の上相談解答欄

女、女、女

月刊雜誌

「インチキ」編集日記

「コント」赤裸々な姿

前號將棋解答

「笑話十二話」

ラブシート、

さては露見、

おや、おや、おや

希望が違、う

そう言えば当る

それも共通

職業安定異變

臨機應變

口説いたです

兩方だそうです

参つた

無料入場





山本慶基

おもしろ結婚したら

- △禿山へ登った夢は——
片思いになりそうですね、
先方に木(氣)がないから……
- △火事にあつた夢は——
戀人に喜ばれますよ、
とても熱くなりますから……
- △お金を拾った夢は——
彼女を夢中にさせますよ、
しつかり離さないから……
- △雨にあつた夢は——
失戀しますね、
とうとう降(振)られたから……
- △大蛇に逢った夢は——
氣の強い女と結婚しますね、
先方に吞まれそうだから——

一体なんでしょう?

問

- 1、最も原始的な言葉は?
- 2、ぬむい時にする事は?
- 3、コーヒーの中に入つてい
- るものは?
- 4、最も多い離婚の材料は?
- 5、遊んで暮せる處は?
- 6、一番さつぱりした挨拶

(回答は十八頁)

女が喋らずに

いるのは?

- 齒の治療をして貰つてい
- るとき——
- 鏡を見てい
- る時——
- 接吻をしてい
- る時——
- 戀仇に偶然出逢つた時——
- 深呼吸をしてい
- る時——
- お菓子をおも
- てばつてい
- る時——
- 眠つてい
- る時——

男が喋らずに

いるのは?

- 女が喋つてい
- る時——
- 勘定書をにら
- んでいる時——
- 接吻をしてい
- る時——
- 勝負に負けてい
- る時——
- 戀人が他の男と話
- てる時——
- 判らない音楽を判
- つた様に
- 聞いている時——
- 死んでい
- る時——



- △靴屋さんと——
キツトおあしに不自由はさせません。
- △製粉屋さんと——
色白のよい子(粉)が出来ます。
- △提灯屋さんと——
ブラ／＼しても家庭は明るいです。
- △餅屋さんと——
時には妬(嫉)いたり、ふくれたり。
- △寫眞屋さんと——
うつり氣が苦勞の種板ですね。
- △魚屋さんと——
ます／＼(鱈々)貴女を愛(鮎)します。
- △藥屋さんと——
苦い顔もですが、腹は良藥ですよ。

食物と女 色即是食

走りの果物は馬鹿に高い
味はとにかくとして
マダロのフライを
安く食べさせるところ
……パンパンの宿
どなたも駄菓子好物
昔一度は知つたその味
……御女郎
一寸嚙んでは吐き出して
チューインガム
……女給さん
薄なさけ
大衆雑誌でも読みながら
お茶でものんでいるん
だよ……妻。

按摩 (あんま)

「お父さんお帰り」
「ウム今帰つた」
「お父さんボクお父さんに
よい事を教えようか」
「何んだ、お母さんが留守
に何かしたか」
「ハイ、然しタダでは教え
ませんよ、拾円下さい」
「ヨシ、やるから早く教え
ろ」
「あのネ、お母さんがお父
さんの留守に、内の前を通
るオジサンを呼んで……」
「ウン、それから……」
「それからはいません
よ」
「二拾円やるから教えろ」
「それからそのオジサンを
上にあげて……」
「ウンウンそれからどうし
た」
「それからはいませんよ
三拾円くれなきや」
「ヨシ／＼あがつてからど
うした？」
「あがつてからオジサンの
手を引いて座敷に行きまし
た。」
「ナニ座敷に行つた？怪し
からん。その次はどうした
？」
「その次は四拾円呉れねば
言いません」
「やるやる」
「座敷に行つて蒲團を敷い
て」
「益々以て怪しからん、ウ
ン蒲團を敷いて、どどどう
した？」
「次は五拾円ですよ」
「ヨイ／＼早く言え、ウン
ウン」
「それからお母さんの肩か
ら腰を撫でました」
「ナインだ、この大馬鹿者
それは按摩でないか」
舌ざわりと齒切れと、
名前が好きだつたので
……落けかゝつた
アイスクリーム
涼しい夜に御馳走様
……奥さん。
酔いさめのブレンソーダ
いやイチゴだつたかし
ら……ダンサー
……妻。

小使帖

街頭錄音

腹を割つた話

黃昏の異變

【詰基新題】

A 4x8 grid with columns labeled 1 to 8. White pieces are at (1,4), (2,4), (3,3), (4,3), (6,4), and (7,2). Black pieces are at (2,3), (3,2), (4,2), (5,2), (6,3), and (7,1).

第二回 黒先手にて活路ありや



二十万圓の女

「世間じや、みんなそう言っているのよ。世間なんて、ずいぶん馬鹿なものね」
 「だつて君が二十万圓の貯金があるつていうことは事実だつて話だぜ」
 「あら、いやだ。二十万圓もあれば、こんな所で、こんなパンパンなんてしてないわよ。けれどね、男つて不思議なものね、あたしか二十万圓あると知つてから、急にお客が増えたのよ」
 「それを巻き上げようと思つてかい」
 「そうじゃないでしようけれど、何だか二十万圓の女と寝るような氣でもするんじゃないかしら？」
 「ボクはそんな氣はしないよ」
 「だから大好きさ」
 「うそを言つてるぜ」
 「ほんとよ、あたしが一文なしでもあなたは来てくれるね」
 「そう言つて女は、ボクを抱えた」
 「ボクは女の身体はどこかに、二十万圓の通い帳が、かくしてあるような氣がして、身体に手が觸れられなかつた」

うそが死人が生き、自由になんて

千年の昔から、否、万年の昔からかも知れないが、人間が一番恐れたものは「死」ということであつたらしい。
 昔から醫學の最も理想とするところは不老長壽にあることは勿論である。このことは古今東西を通じて變らない。しかし、どうしても、これが出来ないもので、もう「神だのみ」の他はない人間は安心して死ぬため、宗教というものを教え、この世の「生」を「長壽」に替へていたのである。ところが遂に人間が死なないという努力を断念して、死んでもよいからもう一回生き返る——という方法に成功したのである。
 このことが事実とすれば、今後の人間は、幾度でも死ぬことの

が可能となつたわけである。「此人は何回目の死ですか」「三回目です」といつたわけである。
 アメリカのハイマンという醫學博士が最近自分が發明した人工心臓刺戟器を用いるならば、死んでも立派に蘇生せしめることが出来ることと發表したのである。
 博士によると醫者が腹をとりながら、御臨終ですと宣告しても、まだ心臓は完全に死んでしまつたのではなくて、それからは十六分と十秒かゝる。その間に最初の九十秒ならば尚更結構であるが、刺戟器の十九金製の針で心臓を突つき一方、四、五インチの金線によつて十分の一ボルトの電流を身体に通ずると、電氣エ

ネルギーの作用によつて、再び心臓は鼓動を初めて来る。施せば立派に生き返らせる事が出来るというのである。博士はこの方法によつて、既に十二人の死人を生き返えらせることに成功した。と語つてゐる。
 この方法によつて、一度死んで再び生き返つた人の話を聞いて見ると、
 「私はそれは、軟かい暗黒の中にフワリ／＼と浮いていました。何と氣持がよい、ではありせんか。そして、そこには偉大なる平和と、完全なる満足があるのみでした。」
 そして、更に言うには、
 「死というものが、あんなに楽しいものであるならば今後何回でも死にたいと思ひます」……だ。

これならば、始めから死なないよりも、一度や二度死んでみて、まだ生き返つて來た方がよさそうである。
 ヒゲというものは、どうも接吻の妨けになつていけないやうです。だから歐米では、朝と晩とに必ずヒゲをつる／＼に剃ることになつておりますが此には接吻の際して相手に不快な感ぜを與えない様にとの體裁からだと聞き及んでおります。しかしヒゲが無いというのも程度の問題で女性にもやつぱりヒゲがあるのです。



「お母さん、おや、おや」
 「お母さんのあんた達の頃はね……」
 「わかつたわ、戀愛なんか知らなかつたつて言うんでしょ」



夫「近頃の若い人ッて、車内の混雑が案外に嬉しいらしいね」
 妻「あら、どうして？」
 夫「相手の膝の上に座れるからさ」
 妻「……」
 さては露見

笑話

恐怖のない女

世の中の男はみんな自分
に惚れていて、思える女は
幸いである。そういう女は強
い。その上に若しもその女が
貞操なんか何でもないと思
つていれば鬼に金棒である
彼女はその女であつた
何んの考えも持つていなか
つた。欲しいものは何んでも
直ぐ買えると思つていた。
「あたしエビワがほしいの
ヨ。あたしの身体を幾日あな
たに貸したらいいかしら」
そういう風に口では言わ
ないが、態度と匂いでそれ
を示した彼女は堂々とそれ
で世の中を押し渡つていた
彼女はやがて病氣にかゝ
つて入院した。手術をした
入院料は誰が拂うだろうと
興味を持つて僕はわきから
眺めていた。彼女は病院か
ら出て来た。
「おい、入院料は誰に拂つ
て貰つたんだい？」
すると女は僕の方を向いて
「お前さんは、馬鹿だね」
という顔で
「入院料は院長に拂つて貰
つたのさ」
「どこの？」
「きまつてゐるじやないか、
あの病院のさ」
「なるほどね」
確かに恐ろしい強い女だ

なぜな

たゞ眼にもつかず、接吻の
邪麗にもならず、従つて安
全剃刀の替り、刃の捨て所を
必配せすに済む程度、ヒゲ
が生えてゐるのです。が、不
思議なことに、女性の腹の中
にある卵巣を取り出してし
まえば、その優にやさしい
ヒゲが忽ち太く、且つ長く硬
くなつて立ち所に接吻の邪
麗になつてしまひます。
卵巣はつまり、毛止の薬
の塊りのようなものです。
(三) お乳が大きいのか？
「男のお乳はベチヤンコで
小さな乳首がイボのように

詰将棋新題

大橋盛士出題

第一題



持駒

飛、角
歩、歩

第二題



持駒

角、金
桂、

(解答次号)

誰がしたの？

A氏がネクタイを八百円で買いまし
翌日、B氏に此れを七百元で譲りまし
た。
三日目、A氏はB氏から六百元で買い
もどしました。
四日目、B氏は五百円で又譲り受けま
した。
五日目、B氏は四百円で此れを再びA
氏の手に返しました。
六日目、A氏は更に三百円で此れをB
氏に手離しました。
七日目、B氏は二百円でA氏の買戻
しの請求に應じました。
八日目、A氏は百円でB氏に改めて譲
りました。
九日目、B氏は、無料で此れをA氏の
手に返しました。
十日目、A氏はネクタイを落してしま
いました。

くつついてゐる丈なのに、
女のお乳は何故あんなに大
きいのでしょうか。
姉さんのお乳はお胸を二
つ伏せた様です。ばあやの
お乳と大きたら、それは、そ
れは大きくつて負うてゐる
赤ちやんを抱く暇のない時
には赤ちやんを肩の所まで
持ち上げておいて乳首を下
から持ち上げて吸わせる曲藝
が出来る位なんですもの。
「あたし不思議で仕方がな
いわ」
さすがのミイちゃんも此
れだけはわからないとみえ
て更に心配そうに首をかし

「あ、この娘つなら、そんな
大きな壁
を出して
もしお父
さんが聞
いてらし
たら嘘ッ
てことが
直ぐ判つ
てしまふ
じやない
の」
希望が違ふ
娘「母さん、亀田さんてほんと
うにいやらしい方ね」
母「まあ、お前そんなにフン
ガイして手でも握られたの？」
娘「ううん、キツスを何遍もし
ておきながら、ちつとも結婚し
たがらないんだもの」
そう言えば當る
「あの娘がパンパンなんかに
なつてしまつたのも、もとをた
せばみんな親達のせいよ」
「あら、どうして？」
「あそ
このお
家の
人
も
と
は
射
的
屋
を
し
て
い
た
ん
だ
も
の」
それも共通
「たい風の名稱を外國では女性



「あそ
このお
家の
人
も
と
は
射
的
屋
を
し
て
い
た
ん
だ
も
の」



ワイルド泥棒奴

オ、おい！君！、大野君ッ。
君は、大變なことを仕出かしたんだぞウ。
嘘！、嘘や冗談であるものかい！、糞ッ、實際
重大な問題なんだ。

そら、昨日、社からの、帰りに横ッちよのオ
デン屋で一杯ひつかけただろう。そして電車に
乗つてからだ。二人で呆皮にブラ下つている目
の前に、若い美しい女とその戀人らしいのが座
つていたじゃないかい！、あれサ、

そして二人が疲れて立つてゐるのに較べてあ
いつ等が仲良さそうに並んで座つてゐるのに腹
を立て！、彼女の品定め初めたじゃないかい！
先づ最初に口を切つたしは君だつたらう。ウ
ンボクは一体におとなしい性格なんだから、苟
しくも淑女の前で悪口を吐くようなことは決し
てしないんだ。

それを君があんな事を言い出すもんだからつ
い……それがいけなかつたんだよ。

ほら、無理にコジつけて、欠点も
ない彼女の顔をクサしたのは君だ。

第一に額が廣すぎるネ、ツて、
君。だからボクも合槌を打つたのだ

眉毛が少し長すぎらあ！とね、
それから散々だつたな。

眼もあんまり細すぎる。
そしてどこかにケンがあるよ。

鼻がデツカイヤ。
ナア、頬が小さいんさ。

それに、口もデツコイよ。
唇だつて厚くせに……

笑顔も御丁寧に二つだア。
愛嬌は片笑顔の方がいいや、
一休、アゴはあるんかい！

異色マンガ



捕もの

奇たん

「ヘエ、旦那、降りやす
だが、チヨツ、チヨツ待つておくんなさい。」

酒井 滋

○妾は今年二十六才に
なる娘ですが、未だ
に縁遠いので悲觀し
ています。良縁の授
かる方法をお教え下
さい。(東京、淋し
き乙女)

○二十六ぐらいで、贅
沢をおつしやつては
いけません。一策が
あります。今度許可
されましたアドバル
ーンですな、あの大
きな風船をビルの屋

上からフワ〜と揚
げて、その下に「嫁
し度し、当方美人持
家あり」とね。

○女性に好意を持つて
もらうには、どうし
たらいいでしょうか
(徳島、入江生)

○病氣をなさい、病氣
を。女は誰でも看護
婦になつてみたいと
いう欲望を持つてい
るものです。

結婚はどうしたらいい
でしょう。小生
目下失職中です(金
澤、萩田生)

○お金のあつた未亡人と
結婚するのが、最も
経済的であると昔か
ら言われております

○小生もそろ〜異性
のおトモダチがほし
い年頃になりました
どうしたら、いとお
トモダチが出来ると
しようか。(大阪、

職業安定異變



求職者「一寸お伺いしますが、
何時も親切に受付けて下さつて
いたお方
が、一
向にこ
の間か
らお顔
が見え
ません
が……」
係員「

あゝ前に居つた人ですが、あの
人はいゝ仕事口が見つかつて、
その方へ轉職してしまひました
よ」
求職者「えゝゝゝ」
口説いたです

彼「僕せめてあなたの結婚式に
は出席させて頂きたいです」
彼女「だつてあたしまだ婚約も



の名前で
呼んでい
るそうだ
ね」
「そう
なんだ
よ、日
本でも
女房の
事を」
山の神「つて言うだろう」
「????」

「ナアニ、首ツ玉は猫より細いや
ほら、お乳だつてありそうもな
いし」

「お尻だけ一人前なんだろう。
いや実によくない癖だ、君は。い
つもあんなことをして平氣なんだか
らいけない。ボクは何も彼女をゲナ
スつもりは決してなかつたんだが、
そして、停留所で電車を降りてか
らも、悪いことに、彼女も同じとこ
ろで降りたもんだから、コッソリ後
をつけて悪口のありつたけをついた
ろう。」

橋を渡つて
いつものボス
トで折れて、
交番の横から
社に抜けて、
……不思議な
ことに、彼女
達はボク達と
同じ道を先に
立つてゆくじ
やないか。又
それをいいこ
とにして飛ん
でもない悪戯
を始めたのも
やつぱり君じ
やあないか！
畜生！誰が
淑やかな貴婦人に向つて
めて投げつけたんだい？、その上に、ボクに迄
投げると言つて渡したのは？！
それから、銀紙が無くなると、揚子や、紙屑



——現代流行身の上

●美少年
幼稚園にお入りにな
ることを、おすゝめ
致します。あそこは
実に容易に異性の
トモダチが澤山出来
るところであります
○大阪路の天國行列車
は何時に出るでしよ
うか。(犬阪・失戀
居士)
●なん時でも、上り下
りの區別はありませ

女 女 女

毎週恋人へ贈り物をするよう
な男は、月に一度くらい彼女を
訪ねるにさどまる。
東洋の一學者曰く、動物のう
ちにて、化粧に最も時間を費す
るものは、猫、蠅、及び花なり。
また他の學者曰く、戀愛に恐
るべき五つの敵あり、衰耗、結
婚、子供、性病、しかして友人
なりと、
友人に金を貸すべからず、永
遠に返却されればなり。
友人に妻を貸すべからず、何

時でも返却できればなり。
美しき女の持たねばならない
四つ一組の七つの道具。
四黒(髪、眉毛、睫毛、瞳)
四白(肌、眼、齒、手)
四紅(舌、唇、齒齦、頬)
四長(身、腕、指、脛)
四圓(頭、頸、腕、手頸)
四大(額、乳、眼、腰)
四細(鼻、唇、眉、指)
女は愛さるべく造られたるも
ものにして、理解さるべく造ら
れたものにあらす、

○僕、近頃一向に面白
くないのです。何か
世の中をあつと言わ
せる様な名案はない
ものでしょうか。
(弘前、たいくつ生)
●クシヤミ藥の發明を
おすゝめ致します。
○かなり髪が濃くて、
剃れば剃るほど濃く
なるようで憂鬱です
○十九才の処女、至極
壯健なのですが、近
頃脛がはつて来まし
た。こゝがはると背
が伸びないそうです
が、どうすればいい
でしようか。(仙臺
惱める乙女)
●あまりお歩きになる
せいでしよう、療法
はなるべく歩かぬ事
強いて歩くならむし
ろ後へ歩くといいそ
うです。



何か方法
を、(岡
山、〇生)
●ゲジゲジ
をおすゝ
めします。

両方だそうです
金持の父親、



「君、わ
しに話
がある
ちゆう
が、一
休をし
の娘を
呉れと
いうの
か、それとも金を借りに来たん
かね、どつちじやね？」
青年 金持の娘に戀している
「どど、どちらが御都合がい
んでしよう、そちらは？」

臨機應變

「坊ちゃん、お利口ですこと、
おいくつで
すの」
台所
の母へ
「お母
ちゃん
電車の
時と同



◇ 奇譚クラブ目次 ◇



今は昔。

本朝いろものがたり集

宣愁院春高

ランデブー・きたん

一夜の戯れ

岸本俊次

千圓札は笑う

襟谷帯一

道頓堀河畔に華ひらく

秘密ナイトクラブを挟ぐる

伊豆敏夫

傑作
読切 轉落の病葉

鈴木ミチ

話 童貞を弄ぶ貴婦人

北川春男

怪 淑女の小便を飲む男

貴田川晴緒

珍談と奇聞

特集號

南方いざこざ繪卷

月屋靜史

色ごとの神様 (アラ・マニス)

怪奇譚 人魚密造窟 里見輝春

肉体リンチ 梅田の女怪たち 黒江潮

と情痴

金ご色の渦まく大阪裏街

津田幹夫

いんちき商賣の列傳

オフィス 忘れたハンド・バツグ

此花大助

戀慕調 ふうで、もう一度

永見隆二

戀人獲得術 (見知らぬ女性と忽ち仲よくなる方法)

津村進三

繪 古今川柳色自慢 兵庫一平 喜多玲子、獵奇スケッチ行

「肉体の街をゆく」

珍談 墨の貞操帶

戀のスバイ

闇夜の辻斬 腰巻と猿又

情嫉硫酸事件の秘密 原紅太郎

怪奇小説 女肉を喰う句樓 海川映二

都会の戦慄

記録小説 洞窟の娼婦 日向路雄

踊るカミソリ 能登一三

奇譚百話 都會の溜息 信士寒郎

色仕掛女スリ談義 村野昭治

ユーモア短篇

花柳界哀話 岡安子

ブローズ強盗出現 亞羅伊彌太

今里新地の女乞食

俺らは靴みがき綾由紀夫

血族結婚の悲哀

あたしやダンサー 福永君子

犯罪美話 色情地獄

京町進哉

青空戀愛技巧

若原晴夫

轉落の病葉

鈴木みち
七三 玲子



安子は千日前にかなりの店を出している化粧品の一人娘である。
十二才の時すでに女性の生理現象を見たという早熟娘で、女学校二年の時若い

女の描いた戦後派娘の無軌道ぶり

男を男臭いとも思わぬ安子にも、女としての、ひそやかな反省が芽生えてきた。

教師に熱を上げすぎて、一事件を起し中途退学して後は、お裁縫にお茶、お花と型通りのけいこ事に追いやられていたが、もと／＼浮気性の彼女にはちんまり座つて行儀よくしている事はたまらなく苦痛で、映画や男友達との遊びにさぼる事が多かった。

彼女の家では内風呂をたてゝいる。或時彼女が入ろうとしたら、遊びに来ていた父の友人で四十過ぎの小父さんが、いゝ氣持で湯につかっていた。あらつと思つたがまご／＼する様な娘ではない。

「御免やすや、」

と前もかくさず、しやあ／＼と入つて來られて年輩の男が顔を赤らめてそろ／＼に退却してしまいいらい氣の毒やつた、と安子はお裁縫を習いにいつていて、退屈まぎれに皆に語つた。

二十の春に二丁先の旅館の一人息子と戀をして、その年の秋に結婚した。

特攻隊員で出発の直前に終戦となり、一足遅いで命拾いをし、帰還後はブローカーの眞似事をしてブラ／＼していた。酒は好き、パチチもやる、喧嘩に強くて負けた事がない。死にそこねた二十男の虚無的でタイハイな、捕え處のない生活をしている浩との結婚は、二十代の盲目さが多分にあつた。

浮氣で酒も吞めば煙草も喫う、やんちや娘の安子が處女であつた事は浩にとつて大きな驚きであつた。

「君は相当遊んでいたから、いかれているとば



かり思つていた。」

と今更乍ら女の蕊の強さに感心した
浩の父は大きい息子があるのに、年甲
斐もなく女好で、殆ど家に居る事がな
く、腹違いの子が七八人はあろうとい
う。母親は若い時からこの父に苦勞を
させられ、更年期の意地悪いヒステリ
ー女であつた爲、二十才の男女の甘さ
にことごとく目を光らした。

「浩、男というものは家にいて女房の
傍にべた／＼しているものやない。」

と追い出し、又

「安ちゃんはいしあわせやな、浩はいつ
も家にいてくれて——」

と皮肉たつぷりにいう。旅館をして
いて女中も使わぬしまりやの母親に、
今まで我儘放題にされてきた安子は完
全に自由を奪われた。

洗濯は毎日せねばならない。客は殆
ど地方から来るヤミ屋にブローカーが
常連でお米持参であつた。姑は適当に
その米の上前をはねて、家の不足米を
それで補つた。鹽氣のないお粥を食べ
させられ、客の接待を一手にやらねば
ならない安子は、浩と一緒に映画を見
に行く暇もなかつた。外では逞しい男
であつた浩が、家では母に氣兼ねして
借りて来た猫のようであるのが、彼女

には全く以外であ
り、心外でもあつた。浩
は父が外の女に産ました子で
彼もうす／＼その事に氣付いて

おり、母にはどうも頭が上らなかつ
た。そのうちに安子は妊娠したが浩の
心の奥には特攻隊にいた時の死の觀念
からのがれる爲に知つた、淫蕩な女の
味が住みきつていた。彼女の友の朝子
が遊びに来ていた時、外出から帰つて
来た安子は室の襖をあけた途端、見て
はならない場面をはつきりと見てしま
つた。女は恥かしがつてうつむいてし
まい、男は顔色を変えて立ち上つた。
はつとした瞬間、安子は男の頬に、激
しい平手打ちをくわしていた。
「うちは帰る。」

と夢中で家を飛び出してしまつたが
後から浩が追つて来た、

「頼むからいなんといて、僕が悪か
つた、謝る。これから絶対こんな事を
しないから、」

と熱心に口説かれて見れば、もと
／＼好きで一緒になつた男でもあり、
氣の強い彼女の心も折れぬわけにはゆ
かなかつた。

妊娠六ヶ月になつた或る朝、安子は
いつになく体の調子が變だつた。

「醫者に行つてみようかしら、」
という、

「醫者なんて金とり主義や、何とか、
かんとか病氣をこじつけて、金をとり
よるんや、」

と姑は露骨に不服そうな顔をしたの
で、仕方なくその日は早寝をしたが、
その夜、激しい出血をした。

「浩さん、大變や」
という叫び聲に、浩はあわてゝ、彼女
を自轉車に乗せて、病院に連れていつ
たが、もう手おくれで、
「どうしてもつと早く來なかつたの
か、」

と醫師に叱られ、流産した子は男兒
だつた。

安子はもう駄目かも知れんといわれ
る處までいつたが、どうやら若い命を
とりとめて、月程して退院したが、そ
れから間もなく、二人揃つて病院通い
をせねばならなかつた。浩から梅毒を
受けてすでに三期に入つていた。小さ
い丸顔にりんごの様なほお、赤い小さ
い唇、無残に色あせて、
「一月も風呂に入らない。」

と病院の近くに住んでいる、友達
の芳子の家によつた彼女は、汚れた足を
出して見せた。

聲はかれ／＼しまつて、出ない聲を無
理にしぼり出している様な言い方をし
た。芳子はあまりの変りように、適當
な言葉が口に出なかつた。あの氣儘
な、男女の友人の中で君臨していた彼
女の、何という衰えようか、

「あんた、無理したらあかんで、お姑
さんがどない言うたか、体第一やか
ら、」

「これでまだようなつた方や、この前
まで歩けなんだんや、お尻の方に腫物
がつぎつぎ出來て、皆切つたんや、芳
ちゃん、痛かつたで、」

「あんた、ようそんな辛棒したな」
浩さんに自轉車に乗せてもらつて、
病院通いしたけれど、今日は歩けそう

やから氣晴らしに、あんたとこによつ
たんや、
「浩さんも殺生やな、そんな病氣うつ
して、」

「あの人言うたら、自分がうつしてお
き乍ら、うちがなんか悪い事して、外
から貰うて來たやうなこと言いやるね
ん、芳ちゃん、女言うたら、結婚した
らこんな弱くなるものかな、」

愚痴をこぼして帰る彼女を見送れ
ば、たどたどしく歩いて行く後姿の、
肩も腰もほつそりとして、赤い縞のセ
ルを着た体が年寄くさくはちきれそう
な若さはどこにも見られなかつた。

「今日は、芳ちゃんいる？」
とあれから二月目に來た安子は、見
違える程、生々した顔をしていた。

「うち帰つて來たんや」
「えつ」

「浩さんと別れたの、あんな薄情な男
てあらへん、片輪にしてやりたい程憎
たらしいわ、」

「よう帰つて來たな、あんたも若いし
見込みない思うたら、さつさと戻つた
方がましや、古くさく考えて愚図々々
してたら一生の損やからな、」

「浩さん言うたら、ちつとも金儲けせ
んしな、うちは結婚していて小遣いは
皆うちのお母さんから貰つて來てたん
やで、うちは女中代りによろ働いてや
つたつもりや、芳ちゃん遊んでばか
りいたうちの事しか知らんから本當に
せんと思うけど——家へ帰つて來てさ
ば／＼したわ、お母さんもそんな家早
う帰つといでと言つて呉れたしな——
戻つてから一貫匁も肥つたわ。」

「病氣の方はよくなつたの」

「もう殆んどいゝねんけどな、用心の爲に、あいさに病院へ行くけども酒呑むとあかんわ、」

「そらお酒呑んでよい病氣なんて何もないわ、くよくよ〜せんと陽氣に暮したる得や、」

久し振りに二人は一緒に町の湯へ行つた。安子の体に切つた創あとがはつきり残つてゐるのではないかと、芳子はそれとなく注意して見たが形がよく肥えた白い体に、それらしいあとはなく、母親になりそこねたとも思えぬ娘とした乳をしてゐた。自分と同じに妊娠した人が、可愛い男の子を生んで、抱いて歩いてゐるのを見ると、流産した自分の子を思い出して、悲しくなるという彼女が、湯の中でよろ／＼歩きの子に肩をさわられて、嫌らしく顔をよせるのが、氣儘娘の氣性丸出しであつた。

湯から帰ると彼女は、小さい丸顔を丹念に化粧した。小さくつんと高い鼻、ちんまりとしまつた小さい唇に、眞赤に口紅をぬつて、一月も 呂に入らない、と言つた頃のあのむさくるしさは、完全にすてきつて、結婚前よりも、艶やかに色つぽくなつてゐた。知らない人なら、彼女があつたまいない氣にかかつた事があるなどは、信じられないであらう。スカートの裾を、サツソウとひるがえし、夕暮れ彼女が帰つていつた。

それから後に芳子は歩いてゐた浩に、ぱたり会つた。丸顔で色の淺黒い、澁い聲を出す、大柄で女にもてそ

うな男である。

「御氣嫌さん、あんた安ちゃんとは別れたそうやが、どうしたの、」

「あいつ女のする事何もようせんしお針なんか全然駄目やから、母親と氣合はんし、俺も中に入つて、お母さんから不足ばかり言われて、たまらなんだ。」

「お針出来んのは、あんた承知やんか今頃そんな事言うてもあかん それにあんな病氣うつして、無茶やんか、」
「あいつは俺がうつしたように言いよるけど、あいつも浮氣やから分るもんか、そこのパン／＼宿に出入りするとこ、こないだ俺の友達がちゃんと見てゐるねん、」

「フウん、ほんととか、出入りしただけで、パンパンと言つてしまうのも早やすぎる、あの子の家も困つてゐるのじやなし、パンパンせんならんわけもないがな、」

そんな話をして、浩とは別れたが、安子に逢つた時この事を言うと、彼女はプリ／＼怒つて、
「アホらしい事言わんといて、何んぼうちがこんな女やからいうたかて、パンパンせんならんほど落ちてないつもりや、難波屋へ行つたのはパンパンから品物を買う爲や、」
と赤い唇から煙草の煙をやけに吹きとばした。喫いさしの煙草に口紅が染んでなまめかしい。彼女が夢中になると、煙草の灰をそこらにこぼす、
「浩の奴、自分の事は言わんと、別れた後のうちの行動まで干渉 やがつて、うちかて好きで結婚して出戻りに

なつた以上、今まで見たいに、お母さんに無心ばかり言われへん。」

二三日してから浩が芳子の家に来て「君安子に何か言うたんか、」

「別に何も——こないだあんたが、難波屋へ出入りしてゐると見たと言ふから、あんまりあんな處へは寄りつかんようにした方がよい、と言つただけや、」

「こないだ、父親と母親と兄貴まで連れて怒鳴りこんで來よつて、うちがいつパンパンした、余計な事言わんといて、と言いやがねん。」

安子はあまりむかつくし、ほつといたら調子に乗りよるから、言いたいことを、言つて來てやつたと、芳子の家に来て語つた。パンパンはとも角として、彼女の行狀はあまりかんばしくない。アペノ、御堂筋あたりに現われて、ボン引きをやる。もぐりは要領よくやらないと、綱張り荒しとやらで、リンチが恐い。良家の子女がやる職業ではない。パンパンは買つた品物をはかす役目もある。無斷で家をあけること位なんてもない。酒を呑んで氣勢をあげる。酔えば梯子で、陽氣に騒ぐ、若い女だてらに、男と一緒に飛田に行き、女郎を買う。男顔負けの達者なやり方である。母親が意見めいた事をいうと、

「愚図々々いふな、金出せ、」
という有様である。眞面目一方の兄とは大變な相違で、造化の神様が、男女を間違えたやうな兄妹である。もとから大人しい女とは思えなかつたが、この頃の安子のやり方に、芳子はついでゆけなく呆然としてゐた。

その年はいゝ正月だつた。酒好きの彼女は病氣もよくなつたし、男女の同じ仲間達と呑んで、いつもの癖の梯子で、上六の裏手の酒場へ入りこんで女給達と遊んだ。小さい店乍ら安定感のある、そのバーが氣に入つて、

「マダム、うちこゝの店へおいでくれへんか、」
酔つた上の冗談かも知れないが、交つた女の子なら何人いてくれてもよい商賣だから、
「えゝいつからでも來て下さいよ、」
と小柄な色の淺黒い口の大きい、無きりやうな割に若く見えるマダムが、世馴れた態度で答えた。それから氣紛れな安子はその女給になつてしまつた。始めは、から通つてゐたが、お酒を呑んで更しをする事が多く、殆ど家に歸らず住込みの形になつてしまつた。

男なんか男臭いとも思はず、どんな客の膝へもたゝらわす抱かれていつて濃厚なきわどい話を平氣でする彼女に、男達は變な好奇心を持つて、呑んだの安さん、安兵衛と呼ばれて人氣者になつてしまつた。この店へ通う客の中で指折りの助平と女給達が陰口をきいてゐるすしやの親爺は、或晩この安さんとしたゝか呑んで、
「安さん送つてえな、」
と言へば

「オーケー」
と酔つばらゝ同志が足許もふら／＼と、十二時近い町へ出た。三月とはいへまだ夜寒の頃であれば、町の家々は

ひとつそりとして人の氣配もない。親爺の家は店から二三丁離れた先である。途中に建築中の大方出来上りかけた家がある。

「安さん、こゝで一休みしよう。」と親爺が言えは、安さんは恐れけもなく、この無人の空家へ

のこゝついで入った。四十過ぎの脂ぎつた親爺が、娘の様な若い女に抱きついて、

「安さんい、やろう。八重ちゃんとも前に旅館へ泊つた事あるから、君かてかめへやろ、」

とやにつこく囁く、酔いが廻つて足のたない安さんは、空家の床に、着物の裾を亂して大あくらをかいて座りこみ、

「親爺、あんまり変な事言わんといてや、人はどうでもこの安さんは、見損なわんといてや、おかしな真似しやがつて見、近所中聞こえる位大きな聲出したるから、——ウワア——」

とジャングルでホウコウするライオンの様な聲を上げられて、もう我が家も近くこの邊には顔見知りも多いか

ら、人に見られたら恥さらしと、親爺は驚いて、
「安さんそんな大きな聲出さんでもええやんか、もう分つた、なあそない怒らんといて、わいが店まで、負うて帰つたるから、」

と安さんをなだめすかして氣嫌をと、彼女を背負つて店へ引き返した。失敗した慾情の吐け口に困り乍ら、せめて背中傳わる女の肌のぬくみを味うだけの楽しみで我慢して、悉なく店へ送り届けてしまつた。



なんとかして女給をものにしようとして下心を持つて通う男達は、ものにしてみえは口も軽く、手柄のように直ぐそれを人に洩すものだが、こんな男達もまだ安さんをどうしたといわぬ處をみれば、案外その一点だけは堅いらしかつた。妙な女であらう。男を最後の處まで引きつけて、つき放すのが道樂である。さもしい男は安さんのよいおもちやにされている。

店のマダムには好い旦那というより、若いつばめという方が適切である。六つ年下で、相当金廻りはよいらしく、いつもちやんとした服装をしているが、マダムの爲に必要以上の金は絶対使わない、大柄で色白の口のうまい男がある。

時によれば毎日のように泊つて行く。マダムにほれているといふより、女のごろ／＼している家のフンイキに鼻の下をのばしているようで、若い女のあけくれのあらゆる肢体を楽しんでいるらしかつた。この男が居る時、マダムの親戚の人が三人遊びに来て泊つていつた。親戚 傍で、大びらに亭主扱いして添寝するのも氣が悪く、客のようにあしらつたが、男は帰ろうとせす、マダムは親戚の人達と寝み、男は狭い家で外に寝る處がないのを幸いに安さんの傍らにもぐりこみ、雜魚寝した。

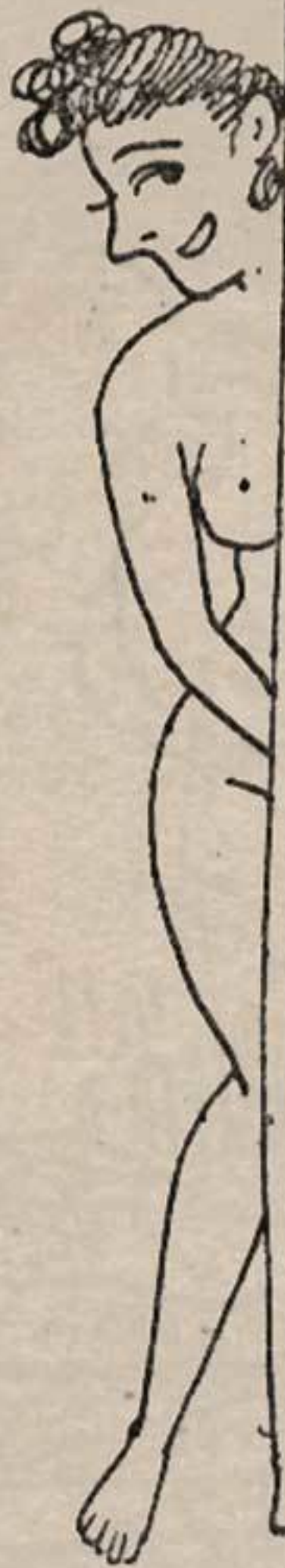
助平男が、安さんの体にふれるのであろう。安さんは大げさにキヤア／＼騒ぐ、襖一つむこうのマダムは氣がい／＼して寝られなかつた。翌日親戚の人を送り出した後で、寝不足のところが

「た目で、男と女を傍において、
「あんた達、昨夜のあれは何事でしたの、かつこの悪い。うちの身内の人が、いつか、あんな事してもらつたら、私の顔にかかわります。」
「うちが何をしたと言いますの、ターさんがごそくしてくすぐつたいから、騒いだだけですのに、雑魚寝している中で、誰がいやらしいことしますかいな。」
「そんな事をしませんでしたという事と違います。あんまりはしたくない事は、こんな稼業をしているから尙更、してもらいたくないのです。それにターさんもターさんじゃありませんか、年甲斐もなくふざけたりして、」
「何もしたわけじやなし、そんなに怒らなくてもいいじやないか、」
ターさんはニヤ／＼笑っているばかりである。
「ターさんも悪いけどあんたも悪い。ともかく皆の手前、安さんはやめてもらいます」
と言葉は丁寧だが、切口上に出られて、フン喰うに困るわけやなし、誰がこんなところにいてやるもんかと、さつさと家に帰つて来てしまつた。
家に戻つてからも、ダンスホールに入りびたりで、酒を呑み歩いていた。夜になると熱ぼくなり、倦怠を感じ

る様になつたので、醫師にみてもらつと、助膜がすゝんでいと言われた。体に關しては割に臆病な彼女は忠実にダンスもやめ、酒もやめ醫師に通つた。無性に世の中が淋しくなつて來た。氣分のよい日、よく來た事のあつた。中之島へ來てみた。
好樂日和の十月の日曜で、皆郊外へ押し出したらしく、公園はとり忘れられた。けさで、貸ボートはつながれた儘、川に漕ぎ出ているのは一つも見えなかつた、橋の上から大阪城が悠然と見える。
見馴れた大阪の風景が今更の様に美しく、いつまでも立ち止まつて眺めて

いた。川岸にあるテニスコートもひっそりとしていて、若く美しい彼女に聲をかける男の影もない。
退屈まぎれに歩いて帰ろうと思つて北濱の街角までくると、パツタリと上六のバーに居た女給の禮子に逢つた。女の子を抱いてい。安子がやめるより先に、店へくる常連の中で眞面目な男と仲よく結婚して一年以上にな。
「安ちゃんどうしてるの、」
「うちはこの通りブラ／＼してるのやあんた小山さんとどないしてるの」
「うちこんな氣儘者やろ、あの人可愛想な位やわ、」

ランデブー！おだん



千圓札は笑う

襟谷 帶一

（人の氣も知らず、月の二十日というのに、呼び出しをかけるなんぞは、あんなに人を生田君は今かゝつてきた電

話で、すつかりイマ／＼しくなつた。
（月の二十日といえはサラリーマンの一番苦しい時だから、どんなゴロツタ張りの借

金取りだつて知つてゐる。まして女とはいえ同じサラリーマンの味を知つてゐるクニコがわしの懐工合に察しがつかない法はないよ。畜生、わし

をなめとる）
とは思つたが、生來やさしい生田君であるから、クニコの呼び出し電話に、
「あゝ、……行くよ。いつものとこだね、あゝあゝウン、わかつた……さよなら」
月に七千と五百円也では、二十五日の月給日までお小遣いが残存する道理がない。今日は二十日である。あゝ、かなしいかな、懐中いくど数えても三十八円
（この懷中で、どうして彼女クニコさんとランデブーが出来るかというんだ？）
折角、向うから呼び出しをかけられて数時間後には、彼女に会えるというのに、彼は

「可愛い子やないの、」
「お父さんにそつくりやろ、妹の俊子もうちより一月あとに結婚してね、いまアベノで喫茶店してるの。わ、女の子二人使つてわりと流行つてゐるから、あつちへ行つたら寄つてやつて頂戴」
「皆おちついて、いゝ風になつてゐるんやな、」
「それから兼ちゃんね、あの人えらいわ田代さんと一緒に田舎へ帰つて百姓してるのよ、」
「へえ、あの兼ちゃんね」
安さんと同じ呑んだくれの兼ちゃんねが――あの派手好きの兼ちゃんねが、眞面目に百姓してるとは驚いた話である。
男でそんなにいいらしいもの

嬉しくも何ともなかつた。懐中三十八円也では、二人でお茶も飲めない。

「顔は見たいし、銭はなし、ほんに浮世はまゝならぬ」などい、生田君は妙な時に妙な文句を思い出すくせがある。

「へなアに、会つちまや何とかなる」

「いゝお天氣ね！」と駅前ひかり喫茶店の前で待つていたクニコさんが言った。

「うん、いゝ天氣だね、だけど、郊外へ行くのは、ちと時間がおそいわよ」

生田君は早速豫防線をはつた。

「誰も郊外へ行こうなんて言やしないわよ。どうして？」

「もないが……とにかく歩こう。黄昏の街はやつぱりいゝブラ／＼しよう。」

など、つまらん所に感心してみせて、生田君は先に立つて歩き出した。

新緑の街筋はほこりぼくツて、人間が無闇にウロ／＼しているばかりで、ちつともよくなんぞなかつた。

「ね、お茶でも飲まなう？」

と來られたら何と返事をしよう、そればかりが苦になるのである。

「僕、胃が悪いから、お茶は歩いた。クニコさんも歩いた。と……」

「シツ、聲が高い、屈けることは……」

「安ちゃん遊びに來て頂戴、誰も氣兼ねする人居てへんからね。」

「うん、そのうちに寄せてもらうわ。」

街路樹の柳が細い葉をひらひらかえしながら二人の間に、二枚三枚散りおちて來た。

「さようなら——」

と、別れて立ち去る禮子の後姿には、守つてくれる男のあるという安らぎがあつて、落着いた足取りだつた。新しい鼠色のウールのスーツを着ていた。

いままでに見覚えのない服だから結婚後に作つたのであろう。

「うちも随分遊んだから、もう大人しくなつて、お母ちゃんを安心させてやろうかな——」

と、安子はしんみりなつてしまつて。難波橋を渡つてくる風は、柳のわくら葉を散らして、病んでいる肋骨のすき間／＼に、容赦なくしみこんでいつた。

——(完)——



落ちてゐるではないか！落ちて、……何が！千円札が……

生田君はあツと思つ間にそれを拾ひ上げていた。吾ながらアサマシイと思つたが、これぞ天の賜とも思つたのである。

「ねちよつと——」

彼は血相を變えてクニコさんの洋服の袖を引張つて

「駄目よ！交番へ届けなくちや、つかまつたらどうするの？ね」

そう言つて、クニコさんは千円札を生田君の手から引つたくつて、ピンと鐵を伸ばした。

「ねちよつと——」

途端に、これはどうした事であらう、眞ッ赤になつて、あわてゝ生田君に押し返えした。

「おやツと思つて、鐵を伸ばされた千円札を、そのウラをヒョイと見た生田君も、クニコさんに劣らず眞ッ赤になつた。

「こ、こ、こ」

表は千円札をつくり、ウラは不思議な絵が描いてあつた。

生田君のその日の日記に曰く「今日は恥を二度かいた」

「ま、ま、ま」

「ま、ま、ま」

「ま、ま、ま」

「ま、ま、ま」

「ま、ま、ま」

「ま、ま、ま」

「ま、ま、ま」

「ま、ま、ま」

「ま、ま、ま」

「ま、ま、ま」

「ま、ま、ま」

「ま、ま、ま」

「ま、ま、ま」

「ま、ま、ま」

「ま、ま、ま」

南方いざなぎの絵巻

色づきの神さま

月屋静史

ニューギニア島の西方にちようど日本
の四國ぐらゐな大ききの島で、セラ
ム島というのがある。その一部落で
男の阿部定事件というのが起つた。
夜中の二時頃であつた。
アブドラという男の家から、突然、
器物を投げる音や、ドタンバタンと激
しく争つてゐる音がした。で、隣家の

アラブ人の、アハマと
いう男が眼を覺ました。
「チエツ、また始めやがつた。」
ねむたい眼を、めんどくさそうに
半眼だけ開けて、そう言いながら、傍
にねそべつてゐる妻の顔をみた。
南方特有の明るい月光が、椰子の葉
の芯で、つた壁の透間から漏れて、妻
の美しい寝顔を蒼白く照らしてゐる。

つい、三月ほどまえ
結婚式を挙げた、まだ
ホヤ／＼の妻は、十八
才の張り切つた身体を
十五も齡の遠つた夫の
ごり／＼した黒い脚の
横で、いかにも安心し
きつたようにすやすや
寢息を立てゝゐる。
アハマが選りに選つ
た女だけに、アラブ人
獨特の、まるでギリシ
ヤの女神のような切れ
長、眼、長いまつ毛、
素晴しく整つた高い鼻
豊かな頬、それらが如
何に、柔らかに、女ら
しい色づきを散散さ
せていた。

アハマは、今更のよ
うに眼を見張り、惚れ
ばと妻の寝顔をみつ
めてゐると、隣りの騒ぎが、急に静か
になつた。アハマはちよつと肩をし
かめて聞き耳を立てた。いつもならも
と長く続いてその後は、きまつてし
び笑いや、キツスの音がするのである
が、どうも今夜は様子が変である。コ
トリとも音がしない。
アハマは半身を持ち上げると壁際に
耳をもつていつた。すると妻が眼を覺
まして
「どうしたのよ」
と、甘つたるい聲で言つて裸身をく
ねらせて夫とおなじように壁際に耳を
当てた。
「なにも聞こえないじやないの」
そう言つて、みだらな回想でもした
らしく熱っぽい瞳で夫をみつめてにつ
こり笑つた。
「なあに、おまえは知、ずに寝ていた
が、今さき騒いでたんだ、それが、急
にピタツと静かになつたんだが——ど
うも様子がおかしい」
「いゝじやありませんか、そんなこ

玲子
絵

と、たまにはあつさり止めて貰わなくちや、こちらがたまりませんわよ」

「——そうだな」

アハマはもう一度聞き耳を立てたが、何も音がしないのであきらめて妻の顔をみた。そして、結婚式の日に新しく買った純白のシーツの上に、んわくくばみを作っている妻の裸身を、つくつく眺めた。

そのときである、突然、夜のしどまを破つて、隣家から、キヤーツと、たゞならぬ女の叫び聲が起つた。アハマも妻もビタリと息を止めて耳をそばだてた。男の荒々しい叫びと絶叫する女の悲鳴に混つて、何か投げつけた大きな音がした。それから、肉体が、壁や床に打つかる音がいつもにない激しさを以て響いてきた。

「どうしたんだらう、行つてみようか」

アハマは呼吸を弾ませて言つた。

「でも——」

そう言つて妻は熱っぽい頬をすり寄せてくる。

「アドー!!アドー」

隣家から女の泣き聲が傳わつてきた。

「おい、あの聲が聞こえんのか、只事じやないぞ、俺や、ちよつと行つてみてきてやる」

「いやッ——あんた、あんな女の顔、そんなにみたいの?」

「馬鹿言え」

「そんなら、凝としてなさいよ」

殺されつて——
二人はいつしか眠りにおちていた。

二

「トアン、トアン(旦那)」

自分を、ぶ壁にアハマはふと眼を覺ました。壁の透間から、太陽がまぶしく差し込んでいる。

「誰だよう」

アハマは、ねむた眼をこすりながら、首をねじ曲げて言つた。

「俺だよう」

その聲は、イマム(僧侶)の聲であつた。

「ちよつと待つてくれ、いま起きるか」

「早くしてくれ、大變なんだ」

言葉かのかんざしにうなづいて、あまは、ハツと昨夜のことが頭をかすめたのでいよく、何かあつたんだなと思

い、

「おい——」

と妻を起した。

「うーん」

妻は、鼻にかゝつた甘つたるい聲を出して、汗ばんだからだを、ぐにやツとねじまげた。

「こりや——もう晝頃だぞ、早く起きろや」

そう言つて妻は、やつと眼を開けてまぶしそくに陽しをみて

「嘘つき、まだ早いわよ」

すると表の方からイマムの聲がして

「トアン——早く起きてくれよ、離れにくいだろうが、もう十時だよ」



「よしッ直ぐ起きるから待つてくれ」

「昨夜なにか大變なことが起つたらしい、だからイマムがこんなに早く起しにきたんだ、お前も起きろ」

アハマは、ひとつ大きなあくびをし

てゆつくり起き上つた。

妻も、仕方なしに半身を起し、肩や、頬にへばりついてゐる亂れ手を兩

手で掻き、げながら

「タオル取つてちようだい」

と言つた。

アハマは、傍の机に置いてある大きなバスタオルをとつて妻に渡し、自分

も、からだを素早く拭いて立上ると、

大きな腰巻のようなサロンを抜けて、

頭からかむり、胸まで露ろすと手際よく輪になつた兩端をつまんでピンと張り、前できつちり合わせて腰の所まで

くるくると巻き下げて落ちぬように纏いつけた。

そして、丸頭のメリヤスシャツを着その上に糊のきいた背廣の上衣をひつかけて仕切りのカーテンから出ると表

戸を開けた。

イマムも同じように、サロンの上に背廣の上衣だけを着た恰好で頭に眞つ赤なビロードの背の高い、ひさしのな

い帽子を横つちよにかむてのんびりと木の葉で巻いた煙を喫つて立つて

いた。三十を越したばかりであるが、四十以上に見える、ふけた長たらしい

顔をしている。

アハマは、ぢぢれた髪を邪魔くさそうにかき上げながら

「どうしたんだ?」

と言つて、透き通るようなコバルトの空に入道雲のような白雲が悠々と漂つ

ている空を、まぶしそくに見上げた、

一知らなかつたのか、昨夜の騒ぎを

——一キロも離れたんちの家まで聞こえたあのかい悲鳴を——

「俺だつて、つんぼじやないぜ、いくら貰いたての女房と暮してたつて氣はたしかだからな、そう變な顔をしな

さんな」

アハマはそう言つて人の良さそうな

アブドラ



顔をにや／＼させた。
「そういう意味で言つたんじやないが、なか／＼大変なことが持ち上がったんだ、いまドクトルが行つとるが——」

「ひえ——？殺されたんか？」
「殺されちや俺だつてこののんびり此処に立つてゐるもんか、実は、アブドラの奴が女房を切りつけたんだ」
「バラシ（山刀）でか？」

「うんにや、小さなナイフだがな、アブドラの奴、俺んちとこへ元氣のない顔をして朝つばらからのつそりやつてきやがつたから、なんだ、また女房とけんかして別れ話でも持つてきたのかと聞くと、言うことがふつてゐるじやねえか、ナイフの奴が、女に打つたつたからなんとかしてくれと言やがる。で、俺が、お前、女房を切りつけたのと違ふか？と聞くと、まあそらだと言ふ、俺や、腹が立つて血が出たらうと／＼言つてやると、たんとは出ない

が少し出たらしい。で、ドクトルを呼んだかと訊くと、呼べねえと言やがるんだ、変なこと言やがると思つて、呼べねえたあどういうわけだと言ふと、呼ぶわけにいかんから呼べないともつともなことを言やがる」
「ワツハツハツハツ」

「それからがかんじんの話だが、いつたいお前、女房の何処を切つたんだと幾度聞いても場所を言わねえ、俺や、また腹を立て、首でも切り離したのかと怒鳴つてやると、うんにや、言うに言えねえからわざ／＼こうやつて出てきたんだ頼むからなんとかしてくれ、そう言つて俺の袖を引つ張つてどうしても場所をあかさない。」

「いつたい何處を切りつけたんだ」
「それがよへへへへ、あ、笑いごとじやないぞ、え——と、俺もちよつと言われないことにする、言えねえこともないが言われない方がよさそうだ、見りやわかるんだから、じや、ボチ／＼行こう」

そう言つてイマムは先に立つて、ひよいと高い床から地面に飛び降りると身輕にスタコラ／＼つい隣りのアブドラの家に向つて歩き出した。アハマもその後に続いた。ふたり共はだしである。
大きな椰子の葉が、そよ風に揺れてゐる。

部落の一番はづれにアハマのと並んでアブドラの家があり、百坪ばかりのバナナ畠を隔て、海岸傳いた家々がボツ／＼と並んでゐる。皆、床の高い

丸太で組んだ、椰子の葉とその芯で造つた家ばかりである。

手をつけたら染まりそうな藍色の静かな海遠くに小さな島々が点々と水平線を背にして浮かび上つてゐる。

頑丈な荒けつりの板戸を開けてイマムとアハマは家の中に進入つた。椰子の葉が芯を並べて造つた仕切りの向うからアブドラが、ひよいと顔を覗かせたが急にかくれてしまつた。

「おーい、アハマを連れてきたぞ」
そう言つてイマムは猫のように指の開いた汚い大きなはだしの足を仕切りまですんで中を覗きこんだ。

それから「ひえ——」
と悲鳴を上げて、骨張つた汚らしい手で口を掩うと、腰をかゞめて笑いをこらえた。

アハマの容氣そんな顔に引きしまつて、眼が生々と輝やいた。彼は、如何なる迫害があろうとも、この大事件の真相を掴まんけりやならんと、颯と腰をかゞめると首つ玉だけを龜の子の様に持ち上げ、イマムをぐいツと肘で押し除けて仕切りからぬいツと首を差し出して中の様子をうかがつた。

アブドラとドクトルが眞妙な顔をしてお腹掛けてゐる（それはどうでもいいのだ）その前、木の寝台があつて、ドクトルの手が邪魔になつて顔は見えぬが、アブドラの女房が寝てゐるらしい（えいッそれもどうでもいいのだ）

アハマは瞳をこらした。変なものがあるんだ、む／＼とすると柔らかなそんな腹の両側に、肉づきのよい太股

アブドラの細君



がによつきりと二本立つてゐる、その付け根の、いつも薄暗い苔の濕地帯のように正体を明らかに現わしてゐる。すると、ドクトルが有難いお札でも張るように、黄色い藥をべつとりと塗りたくつた大きなガーゼを、その怪物に張りつけてしまつた。

アハマは眼の玉が飛び出る程驚いて、大きな吐息をつくと、いまにも卒倒せんばかりにくる／＼と眼玉を動かして、そ／＼と首をひつこめ、イマムがした／＼同じように素早く唇に手を当て、耐えられぬよううめき聲を發しながら地面を踏んだ。

イマムは泣きはらしたように涙を溜めた赤い眼をこすつて片手で顎をゆすつていたが、アハマが地面を踏んだのでつりこまれて、とう／＼七轉八倒の苦しみを味わつた。



三

やがて人民裁判が始まった、吊しあげられたのはアブドラであつた。しかし此處は南方である。吊し上げといつても仲々のんびりしたものでさつぎアハマとイマムが地團駄を踏んだ部屋に汚い机が置かれ、正面にイマム、アハマ、ドクトル、アブドラの四人が、しかつめらしい顔をして座つてゐる。

通らないという代物であるが、廻るとは素晴らしい、相当強い男でも一本やつたら足をとられてしまう。魚は焼いて十匹六錢というたゞみみたいな値で、ついでこの家のうしろで引き網を使えば、群をなしてくるから一度に五六千以上一万匹くらいわけなく獲れる。仕事をしないことゝ酒と女の好きなことゝを自慢にしているアハマが先づ注がれた酒をぐくりと飲み、魚をつまんで、口先の槍を噛み切り、ペツと鮮やかに二間程吹き飛ばしてから食べにかゝつた。イマムが次にコップを唇に持つて行くと、ドクトルは、先づきの

怪物の匂いが残つていやしないかと、ちよつと指先を嗅いでみてからコップをとり上げた。アブドラは凝とかしこまつていた。

「どうだ、トアン・ドクトル、療るにや幾日かゝる」

「さあ、深さが五分ぐらゐで、切り口が約一寸だから、長くて半月でしよ

う。しかし動いちゃいかん」

すると、アハマが、にや／＼してドクトルの顔をみつめ

「じゃあ、その傷の大きさはつてのは、まるで、あれと同じじゃないか——よく見分けがついたもんだな、どつちがほんとの傷やら」

「そんなことが分らんでドクトルがで

きるかよ、しかし、うまく つたもんで、ほんものにとせものが仲良く並んでやがるんだ、たまげたね」

「ほう——」

イマムが、恰も眼前に二つの傷口を示されたように顔をしかめた。

アハマはにやりとしてアブドラの顔を盗み見た。イマムは邪念でも拂うように頭を振つて

「さて、そのいきさつだか、おい、アブドラよ、眞つすぐに申してみい」

アブドラは、おど／＼した眼をしよぼつかせてイマムの顔を見返し、い

ま／＼しそりに言つた。

「あそこさえ切りや、もう浮氣はしねえと思つたからでさあ」

「そりや分つとる、そう思うようになつた動機が聞きたいんだ」

アブドラはゴクリと唾を飲んだ。

「まあ聞いて下さい、あつしは、なに

も、悪いことはしてません」と、先づ自分の身を護つてから、針小棒大に語り出した。

「あつしや御存知の通り、週に二度は必ず市場に出す乾魚を買い出しに、向うの島まで行きます。日歸りが出来な

いから、当然どつかで泊らんけりやありません。

その留守を狙つて嫌が男を喰わえ

んだんでさあ、そりやもうあんなボチヤ／＼した愛くるしい女つてもなあ、

そうさらにありません。

あつしだつて、つまり、その、言い

寄つた仲間のひとりなんですが、あつしが知つてただけでも十人はあつたで

しよう、そいつらを押しつけてとう／＼嫌にしてしまつたんです。

だから鼻高々で、憎らしいなんてこ

たあ、鼻毛のほこりほども思つたことはありません。

しかし結婚前とはにかく、れつきと

した亭主を持つたなら、そういつまで

も男狂いされちや、あつしだつて少し



僧侶イマム



アハマの可愛い妻

や が立ちまゐる

彼は、れつきとした亭主という言葉を特に力を入れたので、イマムは誠にそうじやという風にコツクリをした。

アハマは、キユツと眉をしかめて口をとがらせ、胸を張つて應揚に頷いた。ドクトルひとり如何にも興味なさそうに煙草をスバリ／＼やりながら横つちよを向いていた。が、つと立上つて、黙つて出て行つた。

「で、あつしや、三日三晩いろ／＼と考えあぐねた結果、素晴らしい名案を考え出しやした」

そういつてアブドラは、舌を出してペロリと上唇を舐めた。

「つまり、小ぢやなコツプに、水を八分目入れて、寝台の隅つこに置いて家を出ることにしやした。その八分目というところがむつかしい所で、ちよつと多くても少なくてはいけない、でつあしや、三日程その分量をいろ／＼変えて試みた結果、八分目つていうところにおちついたんでさあ」

「なんだ、そりや？」

イマムが言う

「へへへつまり、嬢がひとりで寝て

りやその水はなんともないが、ふたりで暴れるとこぼれるつて仕掛けなんですあー

「な、な、るほ」

アハマ、舌を巻いて首を振つた。

アブドラは、得意になつて小鼻をふくらませて、アハマとイマムを交互にみつめ

「どうです、巧妙な仕掛けでしょう、で、その仕掛けをするの家を出かけやしたそして翌る日帰つてきてこつそり調べてみるとどうです、見事にこぼれてるんです、で、あつしや、おだやかな聲で妻に言いやした。

おい、俺の留守中に誰かと一緒に、この寝台の で、れやしないか？とね、すると嬢は白つぱくされて、そんなことは絶対にありませんという、しかし、こぼした証拠があるぞとつめ寄ると、そりや、ひとりでもこぼすことがありますよと変なことを言やがる。

で、俺はむか／＼として、この嘘つき奴、ちやんと分つてゐるんだぞ、さあ言えと、嬢の髪の毛を引つ掴んでひきづり廻してやりやしたがどうしても白状しません、であつしや寝台の上にねじ伏せて首根つこを締めつけ、どうだ／＼とつめ寄ると、急に、うーんと唸りやして、口からぶく／＼泡を吹いた

んでさあ、あつしや、おつたまけて嬢をさすつてやつたり、唇を拭いてやつたりしている、つい、変な氣が起つてきやしてね——」

そう言つてアブドラは、変にギラ／＼した眼をして唾を飲んだ。

アハマが、にやりと、好色らしい笑

みを浮かべて言つた。

「ハハ、それでわかつた。だからドタンバタンの後が大変なんだな、」

「へえ？——」 そんな音まで聞こえるんですかい？ たまげたねえ、ふふふじやあ、仕方がねえ、すつか 話しちまおう。で、嬢が正氣にかえるまで、たつぶり二時 ぐらいいります。あつしや、その間、思う存分なことをしてやれるわけで、……」

アハマもイマムも、瞳を輝やかして、舌舐めすりする思で聞いている。「やがて嬢が正氣にかえると、また、それからが格別なんです——それから家を開けるのが楽しみになつてききました。

しかしコツプを置いてくたあ忘れませんでした。つまり、それがないとテンカンを起すまで殴ることができません、で最初の計画が変な具合になつてきやしたが、日が経つと、そろ／＼もとの考えに返えつてきました。ついで他の男のことが思われて、それが頭にこびりついて、いら／＼してききました。現場 押さえたことはありませんが、一日留守をして帰つてくると、必ずコツプの水がこぼれています。

いつたいどんな野郎が水をこぼしやがるんだらう、いちど突きとめてやろう、そう思つて、島へ行つてくると嘘をついて隣り村で遊んでから夜中にこつそり帰つてきて、明け方まで様子を窺つたんですが男の聲もしなきや、居るらしい氣配もねえんです、そして夜が明けてからさもほんとに島から帰つたような様子をして家に這入り、コツプをそつと調べてみると、水はこぼれてやしません。



アハマ

それから四五回その手を使つてみましたが駄目であ、そこで、ハハンの嬢の奴、俺がほんとに島へ行くかどうかと、その男でもつけさせて様子を探つてやがるんだなと思ひ当りやした。そう思うとあつしや、もう居ても立つてもいられぬ程腹が立ちました、よし、そうならそうで、俺にも考えがあるぞと思つて、今度はほんとに舟に乗つて沖まで行き、丁度夕方になれば帰つてこられる 所まで行つて引き返えし、今度はそはひとつ現場を押えてやろうと、性根を据えて家の中の様子を窺つてみたんです、がそれでも同じなんでさあ、あつしやもう頭 變になつたやうで、そのときや一日ぼんやりしてやした。

こりや俺の思い過ぎしやねえだらうか、そう思つて次の日は、島へほんとに出かけて明る日、それが昨夜なんです。帰つてみると、どうです、矢張りコツプの水がこぼれているんでさあ、で、あつしや、いきなり嬢をひつぱたいて髪をねち上げてぶん殴つてやりました。するとまた、うーんと唇から泡を吹



トワン・ドクトル

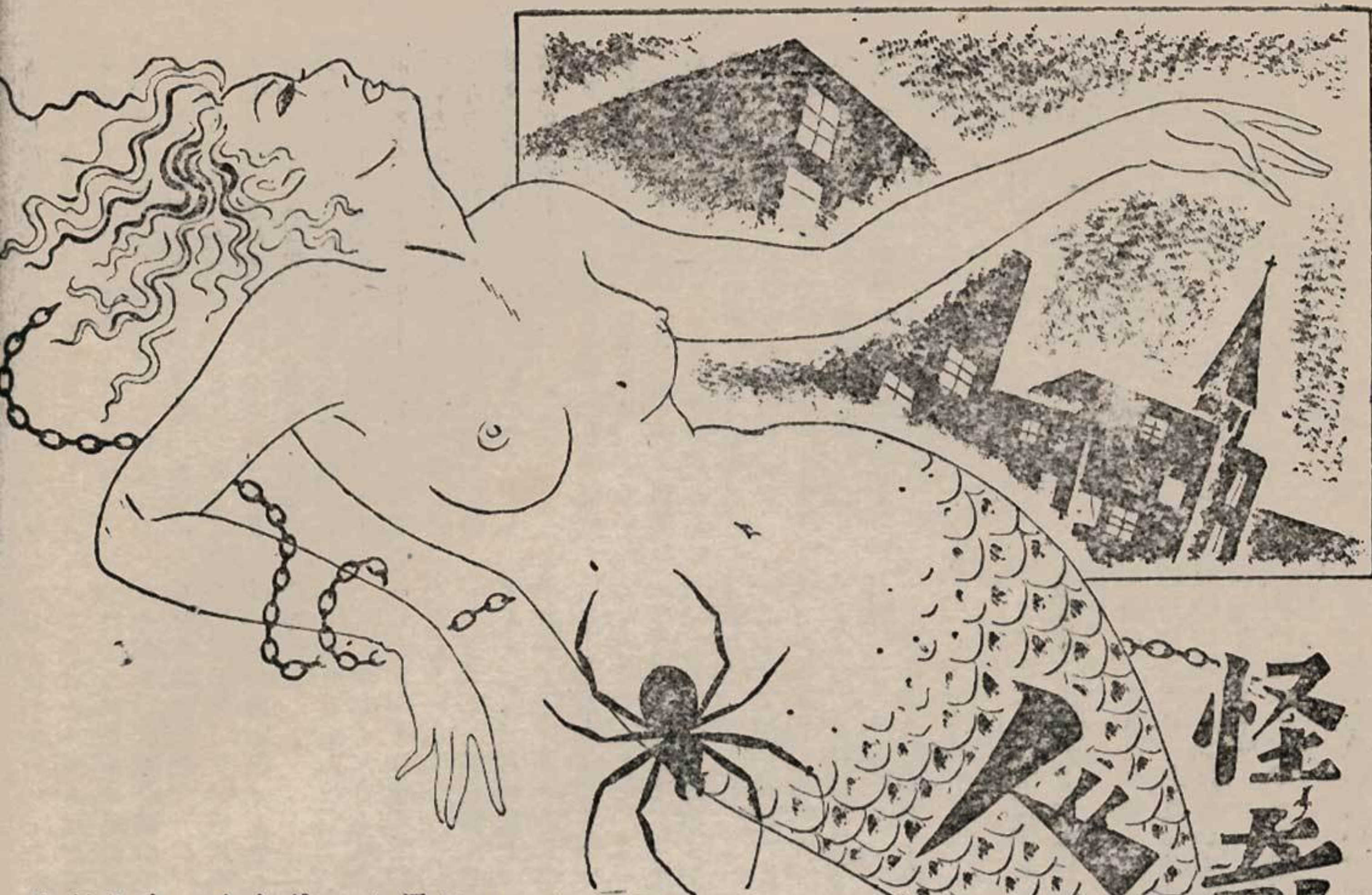
きやした。で、いつものように思う存分なことを思つても、もう、ちつとも楽しくも面白くもありやしません。で、あつしや、ふと思いついたんです、これを切りとつてしまや、もういもくするこたあねえ、これがあるばつかしに、どれだけ苦しんだか、そう思つてつく／＼見ると、髭を生やしてにやりと笑つてやがるような氣がして、もうあつしや、カーツとのぼせあがると、傍にあるナイフをとりあげていたんです。そしてどういふ風に切りとつしやろうと考えたが、どうも切りようがないのでさあ、そこでハタと困つたんです——」

「ふーむ——」
アハマとイマムは、やつと我れに返つたように顔をゆるめた。
やがて、沈黙を破つて、イマムがおもむろに言つた。
「アブドラ、女を切りや、一番困るのは、いつたい誰だと思ふ、お前なんだぞ」
「御尤もで——」
アハマがくすりと笑つて、イマムに「しかし、その男つてのはどんな奴なんだらう」と言つて、腕を組んで考え込んだ。
すると、イマムが立上つて
「おい、アブドラちよつとそのコップ——」
「このコップを見せしてくれ」といつた。
アブドラは直ちに立上つて隣室へ行く、小さな陶器製の古ぼけたコップを持つてきて
「これでございます」
とイマムに差し出した。
「ふーむ、これはお前、どこで手に入れた」
「道端で拾つたんですさあ、もう十年前ですかな？」
「ふーむ」
イマムは、不思議そうに裏をみたり、撫で／＼みたり、匂いをかいだりしていたが
「おい、こりや、俺も見たことがない珍しいものだ、ひよつとすると——神様の仕業かも知れないぞ」
「へえ——」
アハマとアブドラが驚いて眼を割いた。
「きつとそう違ひない、普通の人間な

らそんな器用な眞似は出来やしない、それはな、アブドラ、お前の嫉妬深いのを神様がお試しになつたんだと俺は思ふ、このコップはきつと、昔々の大昔アラ！マニス（色事の神様）に捧げたコップに違ひない」
そう言つてイマムがうや／＼しく掌に汚ならしいコップを載せてムニヤ／＼と祈りを上げた。
アブドラとアハマも祈りの言葉をとなえたやがてイマムが言つた。
「いまこそ謎がとけたぞ、アブドラ、つまり、お前がいない間、このコップがお前の身代りをつとめたんだ、だからお前が留守にすると水がこぼれたんだ女房が「つたろうあなたの留守中だつてこぼしますと」な」
そういつてまたイマムが高らかに祈りを上げた。アブドラとアハマも。あまりの有難さに立上つて、聲を台わせて祈り上げた。
その後、イマムは、そのコップを祭壇にまつり、嫉妬深い男や女に対して祈つてやると、まことにレイケンあらたかで、みな心を柔らげられ、喜んで



歸つていつた。で、この部落は、それから、ずーつと、嫉妬に狂つて斬つたはつたの事件を起こすような者はひとりもなくなくなつた。おかげで、どんな男が夜這いにこようと女房を寝とろうと、文句を言うような男はひとりもなくなり、有難いことには、どれが誰の女房やら亭主やら、さつぱり見当もつかなくなつてしまつた。



怪奇譚

里見輝春

巨大密室造窟

三平公

一、獵奇の街神戸

夜食後、ふらりとホテルを出た僕は、いつの間にか薄闇に蔽れた三宮駅のガード下に出ていました。随分歩いたらしく、腕時計は既に九時を過ぎていました。

街路樹に点綴する街灯は、だゞッ廣い、アスファルト路を斑蛇の背のように照して、空は低く、星一つ瞬いていませんでた。高架を通る電車の轟音で冷たい空気が、こまかく震えました。

僕は、國際都市神戸のどこに、怪奇があり惨虐があり、戦慄、恐怖があり、そして残忍な歡樂境があるのかを探し求めるように、あちこちを眺めながら歩いていました。

氣まぐれだつたかも知れませんが、十一月の白い月が右手の倉庫の屋根の上に縮み上つてゐる夜。獵奇の港神戸の夜を僕のような田舎者が一人歩くなんて、まことに無鐵砲だつたかも知れません。

僕は、鼻紙を切り抜いて空へはりつけたような月を六十度の角度で眺めながら、薄暗い倉庫の通りを真直ぐに、とある明るい六間道路を横切ろうとしました。すると、

「モシ、モシ——」

軽い不安に引かれて、振り返ると、葉っぱのなくなつた柳の下で、

「いかがです。旦那、へへ、へへ、へへ、」と、しやくるような顔で、リンクタのヘンドルを、松の木のような腕で握っている男がにた／＼と笑っています。

僕は、まご／＼しました。そのまご／＼を見てとつた車夫は

「いかがです。面白い所へ御案内しましょうか。いゝところがありますよ」

と僕に、すれ／＼に寄つて

「へへ、へへ、今夜はお一人では寒過ぎる」

「寒いね——」僕もつられて微笑を刻んだ。

「御一緒にいかが……」
全く寒いですよ。温まりませんか？」

「遠いのかね」

僕は引き込まれてしまった。或は引き込まれるのを予め待つていたのかも知れません。

若氣の至りかも知れませんが、何故か、刺戟の強い異常草藥に觸れてみたくてならなかつたのです。

車の人となつた僕は、遊樂費について再び約束を固め、

「おい、でたらめじやアないだろうな？」

「決して嘘は申しません」

「それで遊べるんだね？」

「大丈夫ですよ。奇妙驚異、旦那さんのお好みどころです」

「すると、なんだね、そこは變つてる家なんだね？」

「變つてる」。飛び切り變つた家です」

「それでだね」僕は三度「約束の金で大丈夫なんだね？」と念を押す。

「御心配しなさんな」

車夫は走りながら答えました。

車はアスファルトの路を、柳の木に沿うた白い塀について曲りました。三間

道路には、斑蛇の光りもなく、遠く二三の灯が明滅して移動していました。

車は幾度も曲つて、やがて緑色の灯のはるかな、六間道路を、冷風をきつて走ります。

二、緑色の家

緑の灯が、眼前に近くと、車は速度をゆるめ、其処へべつたりと止つた。

車夫は、スタンドを立てながら、振り返つて僕を見てニタリと笑ひ

「たいへんお待ちせ致しました」

すると緑色の燈の下、紅色の扉が音もなく開いて若い娘が、靨郁とした香氣と共に、流し眼の微笑を送りながら、深夜の客を迎えました。

「こゝだね？」

そう言い乍ら立ち上つた僕は、何故ともなく、興味と不安とを同時に感じて、眼は、その洋装の娘を見詰めた。

「さあ、おたのしみ下さい」

車夫が言うに娘はぐつと手を伸して僕の手を握り今度は肉体的な親しみで

片頬に微笑を浮かべました僕が拂つた約束の遊樂費の中から、幾割かの分け

前を受けとつた車夫はにた／＼笑ひながら緑色の外燈を後にして去つて行きました。その轍の音を、扉外に聞く間

もなく、僕は斷髪の娘に引かれて、片側硝子窓の廊下を歩いていました。

廊下はひどく曲りくねつていました。ガラス窓の外は、庭なのか、それ

とも塀なのか、或は隣接する家屋なのか闇のためにはつきりしなかつたんです。曲り角に、緑花の光をにふく投げ

る釣電燈があり、その中／＼に異様な香りの白煙を吐く釣香炉が下つていました。僕は緑衣の娘について歩いて

行きました。

未知の世界に突然接した僕です。なんだか一種の恐怖と不安が、じく／＼

と迫り、來ない方がよかつたなどという考えが胸底から湧くんです。かと思

うと、キット強烈な刺戟のある變化が來るんだと思う期待が恐怖と不安とを

蹴つて頭をもたげて來るんです。

實際、僕は嘗て遭遇したことのない不思議な零團氣に包れて、まア、やつ

てみる！という心で、美しい娘のあとについて行きました。

七つ目の曲り角を右へ折れると其処から右側の壁や扉や、そして歩いて行く廊下は、突然粗雑なものとなり、一

種の惡臭さえ漂つてゐるかに感じられました。

みると、例の釣香炉はなく、緑色の電燈のみが、益々、ぼんやりと、そこ

を照らしているに過ぎません。右側四ツ目の灰色の扉の前まで來ると、緑衣の娘は、ふと立ち止つて、

「どうぞ」

とその扉を開きました。僕は言われ

るまゝに入りながらその娘の顔を見ると、彼女はつんと澄ました顔で、僕が

部屋の中に入つても依然として、立ち止つたまゝ身動きもしませんでした。

はてな？そう思つた瞬間、扉は、ぱたんと閉つてしまつたんです。娘の姿

は扉の外へ消えてしまひました。

突如、今までの僕の不安と興味とは、猛烈なフンガイに變つて、閉つた

扉を開こうとしました。しかし扉には鍵がかゝつていました——勿論、僕は

その緑衣の娘が一夜の相手だと信じて

いましたので、

「おい開けろッ」

と怒鳴りました。すると、同時です。

「いらつしやい、いらつしやい」

部屋の奥の方からやさしい女の聲が僕を呼んでゐるんですはッと二度驚い

て扉を背に奥を見つめると薄紅色の電

光を浴びた白いペットのの上に洗髪のみゝ女が僕をじつと見つめてゐるんです。

僕の眼は、度重なる驚異に燃えていたことでしょう。僕は見詰め続けまし

た。すると洗髪の女は、軽く微笑して、顎で僕を呼んでゐます。僕は心を落ちつけて

「こんばんは！」

と言つてみました。

「こんばんは」

女は微笑をつゞけて答えます。僕は近づいて行きました。娘は瘦せています。しかし、二つの眼は、哀願する

ような、美しい光に充ちていました。ペットの傍へ行くと、娘は僕の動きの

まゝ視線を移しつゝ、

「あなたどうして私のところへ來たの？」

「……」

「じやア何んにも知らずにいらしたの？」

「何を？」

「あたしんことをです」

「君の？何んのことかね？」

「あたしの体のこと」

「からだ？」

「えゝ」

答えて娘は暗い顔をしました。戸外は雨のようです。粗雑な部屋の屋根がブリキ屋の倉庫のように、僕達に

惡戯を與え初めました。風も出てゐるらしいのです。

「どうしたのかね？」

言つても彼女は俯むいたまゝ答えず

じつと嵐の音へ耳を傾けてゐます。

電燈が明滅し出しました。

「あなた——」

突然、娘は僕を呼んで

「あたし人魚の出来そこないなんですの……」

ヒステリックに泣き出してしまった僕は、この美しい娘が、まさか？と思つたんで、

「何んのこと、ね？」

と問うでもなく言いました。すると娘は寝ていた上半身を立て、白い手で蔽われていた毛布をぐつと取り除いてしまひました。

「ごらんなさい！」

娘は悲しそうに

「ほら人魚です出來そこねの人魚です」

そして、僕の手を操作的に握つて、そこへ洗髪 頭を洗いたんです。泣いているらしいんです。

しばらくして、僕をじつと見上げて「あたし今夜はじめて客室へ出されたんですの」

と、手を合せて、首を振りました。僕が剛眼に、薄紅色の灯りゆえか、ルビーの様に光っていました。

三、奇形動物製造工場

「君ははいくつなんだい？」

「十八よ」

「名前は？」

「ユキコ——細川由紀子っていうのよ」

よ」

それから、娘——由紀子は、莫迦に僕に親しんで、いろんな事を僕に話すんです。

僕が、その次に、

「生地は、処かへ」

と訊ねたことから、彼女は、奇妙不思議な身上、なし、いや、奇々怪々な「奇形動物製造工場」について細々と語り出したんです。

「生れた処なんか何処だつていいでしよう。あたしは、生れてから十三年間、両親や兄弟たちと一緒に幸福に暮して來たんです。それがあの恐ろしい戦争です——」

そして、私達親 五人、生死不明のまゝちりぢりばらばら。一人ぼつちになつたあたしは、どうせ身をほろぼさなけりや、生きてゆけないんですからね。——

私は、賣笑婦になることを覺悟しましたわ。ええ、ゴハンを頂くために、身を落すのは、ちつとも恥しくないと信じましたもの——。

ところが賣られて來た処は、種々様々な奇形動物を作つて 世界の隅々へ迄輸出して莫大な利益を得ている奇形動物製造会社だつてなんです。

こゝでは、生きた人間の外皮を剥いで、そこへ、剥きたての狒々皮を着せて、その上をぐる／＼と布ツ切れで巻いてしまふとか、同年輩の男女の背の皮を、それぞれ剥いて、この二人を背中合せに、くツつけて、ぎりぎり縛りつけて闇黒の蔵の中へ叩き込んで置くとか、或は五ツ六ツの子供の胴体

へ、鋼鐵製の箱を着せて、十年間も、二十年間も、そのまゝにしておいて

「蜘蛛男」又は「蜘蛛女」を作るとか、又同様に、胴体四肢の發育を鐵製の箱で奪つてしまつて、頭部のみ異常に發育させて補助を作つたりしているのです。

あたしは、こんなにされてしまつたんです。

つまり、兩足の内側の皮や肉を適度に削り取つて、兩足先が丁度、魚の尾に見えるように、削りとつた面と面とをくツつけて、ぎり／＼その上を縛られて、しかも塩水をぶツかけられて、闇の蔵の中へ叩き込まれたんです。

その蔵の中には、いろんな動物——ええ人間じやありません。自由自在に変形された動物が猛烈な痛みと、全身を縛られている不自由のために、呻き、のたうち、怒号していました。

蜘蛛——にされる人間。全身へ角質皮を移植された人間。背と背をくツつけられた二匹の動物、そして数匹の人間。——

それが一日に一度、拳骨ほどの握り飯を與えられ、腐りそうな動物のは強度の塩水をぶツかけて——月日が過ぎてゆくんです。

そのうち、呻きも、のたうちも怒号も次第に下火になつて、しかし傷口が治つたからではなく、みんな疼痛に痺れてゆくかごろりごろり死んでゆくんです。

十の動物の内、一つ完成されれば十分な利益が上るそうですもの、死んでゆく者のことなんか、何んとも思やしないんです。

さて、あたしです。五つの人魚の内、三つは死亡して、二つだけ出來上りました。しかし出來上つた二つのうちの私は、出來損ねたつたんです。実を言つと膝の上八寸ほど、兩側がびつたりと密着しなければならぬのにあたしのは、その五寸ほどが離れたまゝ完成されてしまつたんです。

「こいつア、駄目だ、つぶして丁え」私の肉体を調べた男は言いました。

「待て待て出來損ねえも面白いぜ、こいつを上海やパリの窟へ出して見ねえ、情欲を洩い盡した大盡さま方はちよつとするとこんなのを好むかも知れねえぜ——」

どうでえ、実は入つてゐるし、美しい、こいつが相手の体の廻りをのたうさ廻れば、グロサービス百パーセントだぜ」

も一人の男が言つたんです。

「なるほど女郎は出來損つても金になるのうウハハハハ、」

こんなにして、あたしは一週間前に、この家に賣られて來たんです」

と由紀子は語り終えました。で、僕は訊ねたんです。

「しかしだね君どういう譯で君を僕のような文なし客へこの家では出したのかね？僕は車夫に連れ込まれたふりの客なんだよ」

ないんです。

「この家ではどんな腹であなたへ私を出したのか私にもわかりませんわ——」

きつと、この家では、私という道具がどの位の効果を發揮するか試すつもりかも知れませんか」

「すると？」
「え、扉の外か壁の向うでこの部屋の
中の様子を聞いてゐるかも知れせん
わ」

と彼女は、ベットに起きあがつた体
で、右手の壁へ耳を傾けてじつと聞き
入つたが

「おや？」

彼女の顔色が蒼白に交つたんです。
僕ははつとしました。

「君どうかしたの？」

「黙つてらつしやい」

四、隣室の秘密工場

およそ、一二分間の沈然が続きまし
た。

そして壁から耳を離した由紀子は

「ね大変よ」

と、口走つて、僕の身体をぐつと自
分へ引き寄せ、彼女の口を僕の耳へ近
づけて

「秘密工場の設計者たちが隣りにいる
のよ、え、二人らしいわ、そいつらが
今こんな話をしてたのよ——廿五にな
る五尺八寸の太つた大女を買い入れた
んですつて——その女の背中へ二十
八九の、極く背の小さい男をくつつけ
る相談をしてるの」

「えッ？小さい男を？」

「だめよ大きい聲を出しちやあ言うこ
とが憎らしいわ、大きな女の尻ツべた
へ小さい男をくつつけてその奇形動物

を現代人に見せることは利口な興行法
だ現代人は激しい変異と刺戟を求めて
いるんだからこいつア高く賣れる——
こう言つてゐるのよ」

「憎つたらしい」

「君小さい男と言つたね？」

僕は恐ろしい不安を感じ出しました

何故なれば僕は五尺そこそこの小男だ
つたからです。

「まさか僕んところを狙つた譯じやない
だらうな？」

「それがね、あなた——」

彼女の眼が恐怖にふ

るえて

「となりの部屋にいる

小男が丁度いゝつてい

つてゐるの」

「えッ僕を？」

「だめよあなた騒いで

は。——氣づかれたら

もうおしまいよお坐んなさい」

「君逃してくれ、たのむ」

「今逃してあげる、落ち着きなさい」

「あゝ驚いたね、廿世紀の今日都会の

真中に人間を奇形にして儲けようとい

う設計工場があるなんて——君何処か

ら逃げよう」

「だからさ、ね、あなた、もう決してこんな

処へ来ちや駄目よお金持でもない癖に、とん

でもない歡樂や刺戟を求めるなんて間違つて
るわ。さあ——」

と彼女は、部屋の西角の床板を指差
して

「その床板を上げてごらんないそこ
から逃げられます——」

僕は慌て、床板を上げました。濕つ
た妙な悪臭のある冷たい空氣が、吹き
上げて來ました。僕はもう、その穴の
中へ半身を入れました。

「氣をつけていらつしやい眞ッ暗な抜
け道の所々に屍がありますから驚かず
に約二十丁行けば燒跡の草原へ出ます
から——」

僕は床板を頭の上で押えながら、最
後の言葉を彼女に投げかけました。

「ありがとう、すまなかつたね——

ばたん、と元通り床板をしめて、僕

は眞暗なじめ／＼とした石垣の間の細

道を一さんに走りしました。幾度か、や

わらかい氷のような冷たい固い踏みを

越え、水たまりをじやぶ／＼走つて、

しかも、背後の足音の

發生に極度の恐怖にお

びえながら、轉んだ

り、匂つたり、倒れた

(了)



珍話

墨の貞操帶

明治十一年五月、

深川區森下町の人力車夫萩原林藏(三十)は至つて格氣深き男にて、毎日仕事に出る前には女房のおかつ(廿五)の何

処かへ墨にて印をして晝飯に帰る時、とくと調べそれから又印をして出掛ける故、女房も、馬鹿馬鹿しくはあり、うるさくも思えども、是れは又、名代の朴直なる女なれば、享主の爲す如く任せけるが、此のころ、林藏の弟の亀吉と言へるが、同町に引越して、此處へ遊びに来るを、兄

は大不承知にて、それより後には、晝の一度では済まず、日に三、四度も帰り来りて、龜吉が来て居れば大腹立にて、當り散らし、さなくも、臭いが變だ、色が怪しいと、下手な衛生家が土用に牛肉を買う如くやかましく小言を言うにぞ、おかつも、立ち切れずして、四五日後に、本港町の親戚某かたへ、逃げゆき委細を

咄して、とても私には辛抱が出来かねますと言ふ折から、林藏は例の検査に戻り来り、おかつが居らぬに、狂氣の如く諸方を尋ねて、遂に此家へ来り、女房の顔を見るより怒鳴り込んで、手を取つて連れ帰らんとするを、某はとめて、是れ迄の心得違ひをいろ

／＼と説諭しければ林藏は一言もなく詫び入りて帰りたるが、それより、一層右の検査が厳しくなり其の後仕事にも出ずして朝から彼是れと、口喧ましく罵りければ、流石のおかつも愛想がつきて、一昨日其筋へ訴え出でしとぞ、是れは女房の苦情が尤もらしい。(東京日々新聞より)

船田六助が堺刑務所を釋放されたのは、島祭りの三日目だつた。

五年振りに見る街の風景は悉くが目新しく、六助は思わす目をみはつた。五年前には余り見られなかつたと言つてよい島の女達のバーマネント、最近流行のロングスカート、肌も露わな薄物のドレスを着た女。それらは彼の視

覺に妖しく踊つた。長い間、異性から隔絶された世界にいた六助の眼には行き交う女の總てが放外な美しさに見えた。吐け口を固く押えられていた情欲が五年間の抑制に拍車をかけられて泉のように溢れてくるのを何うする事も出来なかつた。

彼の刑務所入りの罪名は、若い人妻に對する強盜殺人未遂罪であつた。六助は島祭りの人込みを縫つて海岸通りの自分の家へ急いだ。家といつても商店街の裏の、馬小屋のような崩れかかつた長屋の一角だつたが、そこには、同棲一ヶ月で別れた、さゆみが只一人で住んでいる筈だつた。

面識のない床屋で無精鬚を剃り落し急いで長屋へ飛び込んだ六助の眼に眞

ツ先に映じたものは、何んであつたろうか。それは風鈴と共に釣された、子供のガラム／＼であつた。とつさに他人の家ではないかと迷つたが、そんな筈はない。

疑惑に満ちた眼をくる／＼させて、敷居をまたいだ。中には汚れたシミーズ一枚の女が赤子と一緒に寝そべつていた。

「誰ツ」？女は顧つた。

「あッ！」

「さゆみ、それは誰の子だッ」

六助は赤兒を見つめながら、ぎしつく座敷へ飛び上つた。さゆみのぼかんと開いた口が、さつとゆがみ、見る影もなくやつれた顔が蒼白になつた。

「あんた、帰つて来たのね」

「帰つたのがいけないか！」

「いゝえ、でも、あんたの刑期は八年じやなかつたの？」

六助は部屋の中をぐる／＼と見廻していたが、そこに男物の衣類や帽子を、発見すると、赤兒に鋭い憎惡の眼を向けた。生後一年そこそこである。

「貴様、俺を裏切つたな」

「裏切るなんて、……そんなわけじやないけど、でも、よく考えてごらんですよ、……」

こんな時代に女一人で生きられると思うの？わたしの顔をつぶしてしまふようないまいしい罪を犯しておきながら、その男が刑務所から出て来るのを八年も待つてゐるのですか」

「何だと、おい、よくも言つたな」

六助は激しくつめ寄つた。

「えゝ、いくらでも言いますとも、もともと、此の長屋だつて、死んだおとツあんが、借りていたんじやないの、それをお前さんつたら、おとツあんが死ぬのを待ち構えていた様に乗り込んで来て、わたしを目茶目茶にしてしまつたんじやないか」

「フン、それが、五年ぶりに帰つてきた享主に言ふ言葉か」

「誰がお前さんなんぞと、……馬鹿馬鹿しい。わたしや、金次つて、ちやんとした夫があるんですよ」

さゆみは冷淡に言つて顔をそ向けた

「馬鹿ッ」

六助は手近かな、七輪にかけてあつ

た藥罐を引つたくつて、投げつけた。湯は冷えていたが、さゆみの肢体にはね返つて、汚れた墨の上に地図を描いた。その物音に見ざめた赤兒は、火のついた様に泣き出した。さゆみは赤兒をかばつて、後ずさりしながら

「こゝは妾の家よ、出て行つて」

と、ヒステリックに叫んだ。六助の狂暴性は、彼の自制心を奪いさゆみを所嫌わすなぐりつけた。さゆみは眞赤な鼻血をたらしてヒイヒイと泣きわめいた。何事かと驚いてとび出して来た近所の人々は、

「六助じやないか」「悪い奴が戻つて来たな」「これは、金さんが帰つて来たら面白いことになるぜ」

と口々に言うが、人ごとは面白いと見えて、決して止めようとしな

「どうしたんだ？」

と飛び込んで来た男があつた。

「あッ、金さんだよ」

それは折悪しくも、仕事場から、饗飯に帰つてきた金次だつた。さゆみがなぐられてゐるのを見た彼は、脱兎の如く走り込んで六助の前に立ちはだかつた。

「てめえは何んだッ」
「貴様がさゆみの情夫か、俺は五年前
ちよつとした用事で、別荘入りをして
いたさゆみの亭主だ」

「えッ」
「長い間、世話になつたな、禮を言う
ぜ」

その言葉の終らぬうちに六助は金次
の顎をつき上げていた。

「出てうせろ」

よろめく金次の股の間を蹴上げて突
きとはした。金次はどさりと土間へひ
つくり返り下腹を押えて苦悶するが
起き上る力がない。さゆみはその間に
子供を抱えて表へ逃げ出した。

「やいッ、逃げるつもりか」

六助は人垣を押しつけて、その後を
追う。引裂けたシミーズ一枚で、顔中
血だらけにして逃げるさゆみ。

その時、走りゆくさゆみの彼方に制
服の警官の姿をちらりと見た六助は、
あわてて横町へ飛び込んだ。

六助はすっかり暮れきつた大瀬海岸
に悄然と突立っていた。有金全部をは
たいて、カストリ屋で引つ掛けた何杯
かの焼酎が、久しく酒に接しなかつた
彼の五体にしみわたり、涼しい夏の夜
風はホテル頬を快く撫でる。だが六助
の胸の中は、凄まじく煮えくり返つて
いた。

「畜生、眞面目になつてやろうと思つ
て出て来たのに、この現実は何んとし
た事だろう。道義も糞もあるもんか、
女という女に復讐してやる」

犯罪実話 色情地獄

京町進哉



心の中でそうつぶやいた。

続いて打ち上げられる花火が、月の
ない夜空に虹を描いた。夕涼みがてら
に島祭りの夜の行事である阿波と淡路
の花火大会を見物に來た老若男女は、
それぞれ喚聲を上げながら、渚から公
園にかけて、右往左往している。

六助はふら／＼と歩いた。人々から
離れた松の木蔭に、二人の女が立つて
いるのを見た彼の血は燃え立つた。

背後から女の側へ近づいて行つた。
二人共若い娘らしかつた。背後からニ
ユツと現れた六助にびつくりして、

「あッ」と叫んで二人は飛びのこうと
したが、六助は小さい方の娘の手をが
つちりと掴んだ。

「あなたは、どなたです、あたしをど

うしようと言うんですの？」

もがく、女の顔をばシツとなぐり倒
しておいて、六助は逃げようとする大
きい方の娘に飛びついた。

「おい、聲を出すと命がないぜ」
六助は女をおとしておいて、す早く
倒れた娘のスカートの裾を引きちぎり
娘の口へ落し込んだ。

全く瞬間の出来事で、女は助けを呼
ぶひまもなかつたし、よしんば叫んだ
所で、わい／＼騒いでいる人々の耳へ
入る筈がなかつた。

六助は松の根元に氣絶している娘に
は目もくれず、大きい方の娘を引きず
るようにして背後の山へ連れ込んだ。

娘は必死に抵抗したが、屈強の男の前
には、どうする事も出来なかつた。

「此処なら大丈夫だ、誰も來やしない
ぜ」

山の中腹迄來ると、六助は安心した
ように、娘の猿ぐつわを外した。

「悪魔、畜生ッ」

「悪魔か、希望を失つた人間は、悪魔
より恐ろしいかも知れんな」

六助は毒々しくそう投げつけると、
つと、女を抱き上げた。

翌日、三つの事件が街を騒かせた一
つは、ブローズ一枚の少女が岬で投身
自殺したこと、一つは次と長女の直
子が自宅で虐殺され、さゆみが顔面三
ヶ所の重傷を負つたこと、今一つは刑
期を終えて假出獄した六助が、行方不
明になつたことである。

所轄洲本警察署では、この淡路島か
ら、本州、四國へ連絡する港々へ、急
手配をしたが、六助は島外へ逃げのび
た氣配はなかつた。

島祭りの最終の夜。市内二ヶ所に於
て美貌の少女が暗闇を通行中、いきな
り躍り出した怪漢のために頬の肉をえ
ぐり取られた。

そしてその翌朝、川口に三十歳前後
の男と二十過ぎの女の抱合心中死体が
発見された。それは六助と、島祭りに
ミス淡路として、第一位を獲得したキ
ヤバレー・パリーの人氣女給岡崎しの
子の二人であつた。

しの子は一年前、淡路へ流れて來た
四國の女で、朋輩の話では六助を知る
筈はなかつたろうとのことであつた。

—おわり—

津田幹夫

真相の渦まき大阪裏街

借金と金の色

大阪心齋橋筋Dデパートの筋向いに、Rと云うミシン会社の出張所がある。なか／＼スマートな店構えで、ピカ／＼光つたミシンが店内一杯に並んで居て、ミシンの欲しい主婦や娘さんの羨望の眼を集めている。

ところが一台の定価は一万二千元。金の喰る新興ブルジョアなら、もつと金を出して、シンガーあたりの一流品を求めるだろうが、一万二千

一、米國式イージー・ペイメントとは？

円と云えば、普通の勤め人の一ヶ月分の全収入で、とても容易に買える値段ではない。私の妻もかねてからは非ミシンが一台欲しいと私に懇願しているのだが、私はいつもこの出張所の前を指をくわえて素通りするのが常であつた。

ところが先日、この店の前を通ると、大きな飾窓一杯にポスターが貼つてあり、黒山のような人だかりである。何だろうと人波を掻きわけて近

「米國式イージー・ペイメント販売！一ヶ月僅か五百円で一万二千元のRミシンが入手できま

の回数がもつと多くなるはずよ」
と云うのである。私もハツと氣ずいて
「それはそうだね、金利なしに、おまけに特賞三十万円出すとしたら、……このミシンの原價はべらぼうに安い粗悪品だね、もう一度その申込書をよく読んでみようか」
と、規定をよく読んでみるとガツカリした。

法」で、つまり月賦販売のことである。月五百円ぐらいなら貧乏世帯の私にもなんとかやりくりはつく。

法」

「なんだ、それなら、他人の金を二ケ年間無利子で自由に使うのが魂膽じゃないか、馬鹿にしてやがる！、このごろの金すまりで経営の運轉資金にこまつたあけく、ミシンを餌さの金集めさ。一人五百円で千人ならころりと一ヶ月五十万円、毎月々々五十万円入つてきて、品物は預かり、……なるほど、こんなボロ儲けはないねえ、」

「こんなインチキにかゝらないようにやつぱり毎月自分で貯金して、二年ほど我慢したら、利子もついて一万五千元ぐらいにはなるわよ、それでいゝミシンを自由に現金に買いましようよ、きつともつと値段も安くなつてますわ」

いんち

二、無盡式インチキ

月賦住宅の正体

月賦と見せかけて実に悪らつなボロ儲けをしている元祖に、「月掛けでわが家」が建つと囃し立てゝいる悪徳業者がある。

一時新聞廣告など利用して派手に宣傳していた大阪市北区小松原町のA土建會社がその好例である。

戦災で家を失つた者が血眼で家を求めている窮境につけこみ、月々二千元乃至五千元ぐらゐの掛金で、好きな土地に望み通りの家を新築してやると云うのだから、誰でもボツとのぼせてしまふ。

実は私も新聞廣告に欺され、A土建を訪問した阿呆の一人であるが、小松原町と云うのは梅田の曾根崎警察から東へ扇町公園に近い一望の焼野原で、かんじんのA土建たるや、焼野原の眞ん中にある吹けば飛ぶようなバラックなんだからおそれ入る。

インチ會社は直接に客が訪ねてくるのを一番嫌がる。必らず返信料封入を條件に通信する仕掛だから、私は逆にその裏を掻いたのである。人相の悪い佛頂面の社員が

二三人、がた椅子にかけて、股火鉢で煙草を吸つていたがブツブツぼやきながらくれた説明書には

「七ヶ年月賦で、二十万円（月掛四千元）、十五万円（同三千元）、十万円（同二千元）」と書いてあつた。「拂いこめばすぐ建つんですか」

「えゝ、立ちどころに建てますよ」

「すでに建つてある家を一度見せてください」

「さあ、何分、希望の土地が離れ／＼ですからね」

と磁るのに、私は第六感がピンと働いた。實際に大資本をもつ本当の土建會社なら、即座に喜んで案内してくれるはずである。

「では契約して何回拂いこめば建つんですか」

「それは定つて居ません早い人もおそい人もできますよ」

「へえ、でも月賦なら妙ですね」

「えへへ、いや、くわしく云いますと、契約者が毎月抽籤しますんでね、入札が最高で落した人から順に一月ずつ建



てるんですよ」

「じゃあ、早く云えば月賦じやなくて無盡じやありませんか」

「まあそうなりますかねえ」

「無盡とすれば一組が何人になつてゐるんですか」

「五百人になつてゐます」

「五百人？うーん、そしたら一番最後にある人は五百ヶ月後、つまり四十一年八ヶ月目

ですか」

「だからですな、そのところを早く落すにはですね、えへへ、ちゃんと方法があります」

にやりと賤しい笑顔の裏に、この落札は金さえ握らせばどうにでもなるインチキがひそんでいることを私は敏感に嗅ぎとつた。

「いすれ又……」

「まあ待つて下さい、加入していたゞけばいろ／＼便利を計らいますよ」

と引きとめる袖をふり拂つて飛び出した私は家に困る人々

「うん、そうだよ、僕も煙草を節約して助けてやろう」
その後いゝろ情勢を探つてみると、ミシン界は生産過剰で、四苦八苦を極めて居り、同じ月百円二年拂いで、金利として毎月五分を拂い戻したり、六ヶ月（三千元）拂いこんだ後、もう三千元即金でかためて拂えばミシンを渡してくれ、残額はほんとうに月賦でいゝと云う條件のところもあることがわかつた。とにかく、ふところの寂しいお客を吊るため、又、につちもさつちも首のまわらぬ苦しきまぎれにこんな狡猾い手を考えているインチキ商賣がどつと増えてきたから、私たちはよほど墓口と心の紐を締めて居たいものだ。

「食いものにこんな悪徳土建に対して、胸がムカ／＼してきたのでべつと唾を吐いた。」（最近亂脈を極めたこのA土建の社長が詐欺横領容疑で検挙されたことを知って、私はすつと溜飲が下つた）

このインチキ無盡の手は住宅だけでなく、自轉車、家具、ラジオ、時計、疊床、佛壇、消防ポンプなど少し金目の物ならなんでも悪徳商人の好餌になる。諸君よ、くれぐれもカモになつてはいけな

い。そんなのはたいていは會員組織と云う名目になつて居り一口一万円、又は五千円で、実例をあげると、一万円なら申込金四百円、残りの九千六百円は月八百円の十二ヶ月掛金となつて居る。一年後には一万円程度の品物がすべての人に行き渡る仕組だと云うがやつと、手に入れてギョ、ギョツとするような粗悪品ですつたもんだの擧句泣き寝入りになるのが落ちである。

但し、この無盡式月賦販賣は昨年十一月無盡業法違反で大目玉を食ひ、いまは全く禁止されて居るが、この手でゴツソリ儲けたアブレゲール型あぶく会社はすいぶん多いらしい。

大体どの月賦販賣も、品物や住宅は欲しいがあんまり高くて手が出ないサラリーマン階級の心理を利用して、無利子で使えるあぶく金をかき集めるが目的なのだから、結局は早かれおそかれ馬脚をあらわしてしまふ。

むかしのうちに、たとえば五千円のラジオを十回拂月五百円、第一回の拂い込みと同時に現品を渡す……と云うような甘い話があつたら、（よほど大資本の信用できる会社なら別だが）まあ眉に唾をつけて欺されぬように用心した方がいゝ。業者の方だつて、品物を渡したけれど、お客がそれきりドロソと消えうせ、あとの月賦が倒されるようでは商賣にならず、そんな危険を百も承知でやるのは、よほど金ずまりのひどいボロ会社の粗悪品にきまつて居るからだ。

やはり何と云つても月賦は

高くつくか、品物が落ちるのが常識だから、なるべくは、少しすつても貯金しておいて

三、月収三万圓の

内職の裏おもて

失業、金ずまり、就職難に脅える哀れな人々は、なにか適当な内職とか仕事はないかと毎日のように新聞の案内廣告を、目を皿にして隅から隅まで探している。肉休労働のできない事務系統の人々にはなおさらこの悩みは深いであらう。

金がたまつてから、現金で良い品を撰んで買うに越したことはない。とあるまい。

それを食い物にするのが、悪らつな内職や副業の廣告である。

「月収二万円男女誰でも出きる」

「内職で生活安定収入多大」

「地方支局長求む、簡便な机上事務」

「たつか千円の資本で即日開業」

などと囃し立てゝあるを見ると、誰でもついフラフラと乗つてしまふ。そして、「説明書要百円」とある通り、正直

A 月収二萬圓の男女外交員とは？

に百円同封して申しこんでみることになる。ところが廣告をよく讀むとその廣告主の居る所は掲載された新聞とはべらぼうに遠く離れた所になつて居る。たとえば、大阪の新聞に乗るのは北海道や九州の廣告主、逆に四國や山陰や北陸の新聞に乗るのは大阪の廣告主である。つまり、こゝにインチキの第一歩がかくれて居るので、廣告主は直接訪問されるのが一番いやなので、正体を絶対に見せないところに秘密があるわけだ。私はわざと手をまわして遠い地方の新聞を集め、大阪市内が住所になつて居る廣告主を書きぬくと、片つぱしから探訪してみたのである。

アベノ橋の南西、大阪市民病院裏のゴミ／＼した横道を探しあぐんでやつと発見したのは吹けば飛ぶようなベラツクの一軒家。〇〇商事大阪支局と標した表札が軒下にぶら下つて居る。私はブツと吹き出した。幽霊の正体見たり、馬鹿々々しい限りである。狸のような狡い顔をした五十前後の支局長とやらに会つ

てみると、土間に積んだ聞いたこともない三文雑誌を一冊くれて「これを一冊二十五円で渡しますから五十円で賣つて下さい。どこへでも賣れまゝよ。一日三十冊で七百五十円の儲け、一ヶ月三十日なら樂に二万円を越えますぜ、なお千部賣れば固定給として二千円その他、奮斗賞として千円差し上



「げます」
と云う話だ。冗談ぬかすな、
一流誌でも残本の山だと云う
のに、こんな三文誌が賣れる
ものか。私は呆れかえつて二
の句がつけなかつた。
「それで、この雑誌は依託制
ですか」

B 求通信員生活安定とは？

今度は城東區今福町。露次
の奥の〇〇社と云う謄寫版
屋。うさん臭そうに私をじろ
じろ見ながら、謄寫版刷りの
ペラペラ葉書をくれ「表にあ
なたのお知り合いの宛名を書
いて出して下さい。注文が來
たら一件について二十円すつ
のお禮を出します」
と云う。裏を返すと
「求通信員生活安定説明書要
百円」と、私の見た新聞廣告
そつくりそのまゝ。結局私が
ハガキの宛名を書き、知り合
いが本部の〇〇社へ百円送つ

C 小資本で月収一萬五千圓？

次は南區の大坂劇場の近く
〇〇更生協会とかの看板が喫
茶店の軒にぶら下つて居た。
私の方は靴下を編んでいた
ごく至極確実な御婦人むきの
内職でしてね」
「技術習得つてのはなんです

とからかうと
「いや、一冊二十五円の現金
卸です」
と蛙のつらに小便、しやあ
とと答えた。いやはや、毛
の生えた超心臓に敬意を表し
て廻れ右をした。

てくれば、私に二十円くれる
と云う話である。次から次へ
たらいまわしに百円ずつ送ら
せるのが目的で、實際は事業
も何にもやつては居ないのだ
「一日二十件返事が來ました
ら四百円、一ヶ月でゆつくり
一万円越します」
なるほど仰せの通り。但しそ
れだけが私が儲けるには、確
実に百円送る私の知り合いが
五百人必要なわけである。
よくこんな世の中を馬鹿に
した内職があるものだ。あき
れかえつてサヨナラをした。

か」
「靴下編器を買つて下され
ば、十日間実地に指導してあ
げます」
「へエ？、器械はいくらなん
ですか」
「一台一万四千円、附屬品

が千六百八十円」
「うーん、指導はむろん無料
でしような」
「いや、十日で千円いただきます」
「……？」
「入所なさるときはとりあえ
ず一万一千円を納めていたゞ
きます」
「それでどれぐらいこちらが
稼げますか」
「材料の糸は供給しますから
加工賃ですが、一ダースで二
百円―三百円、上達すれば一
日三ダースは楽なもんです」
笑わすない、それじゃ器械
を買わさて下請け内職じやな
いか。一万五千円を奉納して

一日三百円がやつとこさなん
てソロバンが合うもんか？
新聞廣告の有利な内職など
は、聞いて極楽、見て地獄。
たいがい以上三つの実例と
似たりよつたりのインチキな
のであることを、正直すぎる
地方の人々に警告しておく。
こんな見えすいたインチキ
でも、高い廣告代を拂えるほ
どのポロ儲けができるのだか
ら世間には馬鹿の種が付きな
いのである。

四、パンスケ紹介

結婚紹介所の裏

「令嬢、未亡人多数、理解あ
る紳士の援助を待つ」
「財百万養子を求む」
「交際を求む」
「初婚、再婚御希望次第」
こんな廣告も「内職」に負け
ず劣らず三流新聞に押すな
の盛況である。内職の方
が金で吊れば、こちらは色で
吊る魂膽だから怖れ入る。
私は「理解ある紳士」らし
く装つて、その廣告の一つ、
大阪市東淀川區十三の〇〇会
を採訪してみた。何とか云う
映画館の裏。汚ない下宿みた
いな家のがたびしのこうし戸
をひらくと、瀬戸火鉢でキセ
ルをボンボンと拂つていた禿
頭の質屋。番頭みたいなおや
じが早速六疊の座敷へ上げて
くれた。
結婚紹介と名乗っている以
上、一應必要かも知れないと
心配していた戸籍抄本や履歴
などには全くふれずに、採
手しながら、
「どんな女の子がよろしおま
す？、エヘヘ」
と万事呑みこんでいるのに
はびつくりした。
「まあ、なるべく若い方がい
いなあ、判つてゐるやろが、パ





享樂の蔭に咲く

劇薬三題話

須山透

一、ヒロボンのヤミ値百七十圓

世紀末的な頹廢氣分の横溢している現代、刺戟の強烈さを求めてやまない病的な人々にとって、落ちゆく先が怖ろしい麻薬であることは申すまでもなからう。

ところが、アヘン、モルヒネ、コカイン、ナルコボンなどは、取しまりが嚴重な上に、値段もべらぼうに高く、普通人にはなかなか入手が困難である。その代りに……さういふわけであるうか、麻薬代りにさかんに使われるのが、ヒロボン、アドルム、それに最近ふたゝび芽を吹き出したヨヒンビンである。

第一のヒロボンの方は、商賣柄文士や藝能人、さてはスリ、チャリンコなどに愛用され、ヒロボン欲しさに強盗や窃盗をやる犯罪者が激増し、さらに濫用する結果、慢性中毒の精神病人が氾濫したため、大きな社會問題となり、たまりかねた厚生省では今年一月、呼法令でヒロボンの製造および販賣を禁止してしまつた。

ところが、醫師の證明書があれば、期間四十日間として、一日三本を限度にして薬局から買うことができる技道もあり、よしんば證明書がなくとも、顔なじみの薬局にたのめば金次第で魚心に水心別に不自由することはないので實情である。



十一圓の約二倍百七十圓ぐらいが相場になつており、それでもわれ先へのうばいあいである。

ヒロボンの効果のすばらしさは知る人ぞ知るだが、一本注射すれば五分もたゝぬうちに心ウキウキと浮きたち、頭は冴え、身体中に元氣が充ちてくる。矢でも鐵砲でも持つてこいと俄然ハリキリ、文

士ならベンがすゝみ、藝能人ならステージに立つて、どつき觀衆の拍手を浴びる。

ところが、これも薬の作用が効いている二三時間の間だけで、さめてしまえば元のモクアミどころか、心身にむりをした疲労がどつと出て来て、晝間でもトロトロとわれ知らず、ぶつたおれて眠りこんでしもう。だから又注射して元氣をとりもどす。これを何べんもくり返すから、しまいには一時間おきに立てつゞけに注射しなければ効かないことになつてしまふものだ。

男だけでなく女にもヒロボン中毒は多い。ストリツアショウの踊り子、キャパの女給、ホールのダンサーなどはパンパン連中は特にヒロボンを愛用する。あるパンパンの告白によると、一夜にヒロボンを五本打てば十人の客を満足させて平氣だといつていたぐらいである。

ヒロボン(同種品)ゼトリン、ホスピタミン、ネオアゴチン、正体はなんであらうか。これは化台名をエチルプロバミンといつて發見されたのはいまから四十年も

娘の方は膝の上でモジモジとハンカチをいじつて居ながらチロチロと流し眼で私の表情を盗み見て居る。

「まあ、えゝやろな」

私は喫いさしの光を火鉢の灰に刺した。

「さよか、そんなら、……あんた先へ行き、あとでおつれするさかいに」

と、おやじはホク／＼しながら娘をうながした。私にニッコリとお辭儀すると外套を腕にかけて娘はすうつと襖をあけて出て行つた。

「えへへ、話がきまりましたんやが、時間で五百円、泊りで千円ちゆうことになつとりますんで」

大へんな結婚紹介もあつたものだ。私から千円受けるとおやじは

「警察がうるそうおまつさかい、別の家へ案内しまつさ」と早速下駄をつゝかけて私をさそい出した。

表口から出す裏口から出て、五六軒目の裏口をトント

ンと叩くと、おやじは「足元に氣をつけとくなはれや」

とまつくろな炊事場をぬけ、奥の間からのかくし段梯子をトントンと先へ上つて行つた。

二階はせま苦しい三疊、う

すぐらい電燈の下にもうちやんと夜具がのべてあり、寢巻に着かえたさつきの娘が待つて居た。

「近所の藥の工場へ行つてまねんけど、給料がすうつと遅配だすも、仕方あらへん」

私が三度目のお客だと云うだけに、パンパン初年兵のその娘さんは 初心い ものだつた。

「おつさんに四百円と、この家のおばはんはんに二百円とられるのやさかい、うちは四百円しかもらわれしまへんわ、あほらしいさかい、今度はどこぞでじかに会うてくれはらへん」

その翌朝、ブラウスを着ながら、その娘は私にこつそりとさゝやいた。

むろん私の目的はパンパンを買うことではなかつたし、その娘に一夜千円を出すぐらゐなら、もつと面白い遊びを知つて居るから

「あゝ、そうだないすれ又」と素氣なく別れて帰つた。

すべての「結婚紹介」の新聞廣告がこうだと云うんじやない。中には本當にまじめなものもあるだろうが、とにかく私の探訪した實際はこうだつたのである。

前の一九一〇年であるが、日本で大量生産されたのは、昭和十六年で當時はほとんど全部が軍關係に使われていた。

というのは、例の航空隊の猛訓練、夜間の行軍作戦の際の睡眠抑制、あるいは軍需工場での徹夜作業の際の作業意欲充進などの目的で、兵隊や工員にじやん／＼と注射しまくつたのである。

ところが終戦後、それが各製藥會社で自由にどん／＼作りはじめ太鼓で宣傳したものだから、アツという間もなく日本中にひろがり今日のような精神病人を氾濫させる原因となつたのだ。

むろん、こんな反社會的な劇藥をたゞ儲けるために作り出した製藥會社にも大きな責任はあるが戦後のジナリ

ズムが、面白半分煽情的な記事を書きまくりヒロポンの効果誇大に民衆に誤信させ、悲しむべき大流行を來したことも大きな罪があることは申しそえておく。

一、アドルム自殺は

未遂が多い

近ごろの新聞でアドルム自殺の記事が出ていない日はほとんどない。アドルムの會社は、廣告費を使わず大きな宣傳ができるんだからこんなボロい話はあるまい。

自殺の原因は、たいがい失戀、三角關係などの肉慾のもつれの清

算で次には生活難、病苦思想的なやみが多い。自殺するなら別にアドルムでなくても、一發必中の青酸加里をはじめ、古くはカルモチン、ペロナール或は亞砒酸、猫いらず、などもあるのと思ふが、これもやつぱり一つの流行なのである。

つまり流行にのつてアドルム自殺を計つて三分の二は浮世へ逆もどりで、これはなぜかと説明すると、主藥となつてゐるバルビタール系劇藥は大體一〇グラム（茶さじに軽く二杯）で天國行きになる



んだが、アドルム一錠中に含まれるのはわずか〇・一グラムするさなとまあ百錠にいつべんにケロリとのまなければならぬ錠劑というやつはあの形に固めるために澱粉のような賦型藥がうんとたくさん入れてあり、百錠もいつべんにのんだら、とても胃腸の中では消化されない。

それだけ効く時間が長くかゝるわけであつて、致死量をのんでいても、早く發見して吐き出させたらなんでもない。

しかし、のんでゐるのを發見するのがうんとおそれれば、完全に腸で消化され吸収されているから

もう手のつけ方がない。この點、青酸加里などは、のんで五分か十分で、激しい全身痙攣を起して即死してしまふし、現在青酸加里の解毒藥は發見されてゐないから、手のつけようもないのである。

アドルムと同種品は外國でもフアドルム、國産品ではデアルプロビタールなどがある。どれも名はちがうが、バルビタール系の劇藥であることにちがいない。

それから、正式にいうと、このアドルム系の催眠藥なのだから、藥事法第三十七條によつて、醫師の證明がなければ藥局では賣つてはいけな。又、買うときは品名年月日、住所、氏名を書き捺印した文書も出さなければいけないというさだめがある。

今までの點がひじょうにルーズになつてゐたのが、今の二月八日付で厚生省から特別に市販制限の命令も出てゐるし、今後は十分讀者諸兄も注意してもらいたい。

三、媚藥ヨヒンビン

ふたたび来る

熱居アフリカに大昔から知られたすばらしい媚藥ヨヒンビンが、色々な名稱で近々市販せられることになつた。

これは土人の仲間では、秘かに愛する戀人に隠れて飲ますと、忽ち猛烈にその相手が好きになるという凄じ媚藥である。

然しそのかわり、極微量でも猛毒を持つてゐるので素人細工が危険であるのが難點である。

ズロース強盗出現

亞羅伊彌太

御婦人方に一大警告



人通りの全く途絶えた寂しい郊外の焼跡を、すつきりした洋装に身を包んだ奥様風の御婦人がたつた一人でハイヒールの音も高らかに歩いていました。

この御婦人、一人歩きの日道が心細くなつたものか、靴音が亂れて、足はだんだん速度を増して行きます。この物騒な世の中に、夜一人で歩くなんて、

緒ならそれ程でもありませんがね。何處からか、生まぬるい夜風が、すうつと吹いて来て、その御婦人の首筋を舐めるように撫でて行きます。

その御婦人、思わす首をすぼめて、「おゝ、氣味が悪い、こんな夜、おひはぎにでも、会出なければよいが」と獨り言をつぶやいた矢先、「もし、そこのおひと、しばらくお待ちなすつて、」

背後で、ど太い男の聲がしました。そら、おいでなすつた。ぎよつとして振り返りますと、黒い影がぬうつと突立つていてはありませんか。

でも、その御婦人、出来るだけ平靜を装おつて、

「あら、あたくしですの。急いでるんですけど、何か御用かしら、」

「用があるから、呼んだんじやねえか用がなけりや、素通りさ。」

「そりや、浪花節の文句ぢやない？」

「そうか。」

この男、仲々しやれています。

「で、あなたは一体どなた」

「申しおくれました。何をかくそう、あつしは強盗でござんす。以後お見知り置きを」

この強盗仲々がつたことを言う。だが、こんな者と、知り合いになつたら後がそれこそ大変だ。

「えゝつゝあなた様は、やつぱり、あの強盗様、ものとり様、」

「その様だけ余分だ」

「きやつゝ誰か来て!!」

「しつゝ!!お静かに。落ち着きなすつて聲が高い。」

「こ、これが聲を立てられずにいられますか、キヤツ、誰か来て頂戴!」

すると、その強盗、御婦人の腕をしつかり掴んで、

「シツゝ聲が高いつたら。落ち着いて落ち着いて、」

どうも変です。

「ジタバタすると、短いが、がつちりしたこの棒をお見舞いするぜ。いゝかい、あつしはねえ、何も、こゝは地獄の一丁目とつと身ぐるみ脱いで行けなんて、そんな野暮なことを言つてるじやねえんだぜ。」

「じや、どうすれば——ねえ強盗さんこのハンドバッグの中に、千円ばかり入つてゐるから、これで勘辨して頂戴なねえ、お願い、」

「分からねえ奴だなあ、おめえは。あつしは何もそんなものが欲しいつて言つてやしねえじやねえか。」

「分らないのはあんたの方よ。じやあ……エツゝじやあ、あたしのこのからだを御所望なの。」

「と、云いたい所だが、それでもない

んだ。へへ。そあのおまえさんの、その、なんだ、へへ」

この強盗、愛嬌たつぷりです。

「一体なにが欲しいの。じらさないでよ。」

「へへやつぱり、あつしに。言わす氣かい。」

「ますます変ねえ。命以外なら、なんでも差し上げてよ。早くしてよ。」

「へへ。実はなあ、その、お前さんがはいているズロースが欲しいのだ。」

「ホホホ……」

その御婦人、思わす吹き出してしまった。

相手が痴漢(?)と分ると、

さすがは、年増女落ち着いたものです。まことに、あつぱれと言いたい。

この点、年増女と云うものは、股方よりもはるかに度胸が坐つてゐる。

「ホホ……。変なもの又御所望なのねホホ……。」

「そのホホ……が氣に喰わねえ、もつと小さく笑え。」

これちや、今までと形勢が違う。

「あんた色氣違いなね。」

「バカ、俺らはなあ、神様に願かけて千枚集めることにしてるんだ。千枚集めたら、どんな願いでも、神様はかなえて下さるんだ。」

「とんだ神様もあつたものね。初耳だ

わ。」

「やかましい。」

「そんなに怒る事なんかないわ。で、今までに一体何枚位集まつたの。さぞ色とりどり、澤山集まつたでしよ。」

「今夜が開業したてだ。」

「そう、道理であんた、いやに恥しうにもじもじしてると思つたわ。新米なのね」

「ぐづく言わずに早くしろ世話のやける女だ。あんまり、この俺を甘く見やがると承知しねえぞ。」

「ハイ、ハイ、でも嫌あねえ、何んだか。——あつ、そうそう困まつたわ。」

「何が困まつたんだ。困まることなかねえじゃないか。」

「それが大ありなのよ。あのねえ、今の汚れているから、ねえ、あたしの家へいらつしやいよ。新らしい洗濯したてのをいくらでも上げるから、ねーそれでいゝでしよ。」

「おつと、その垢つきのでいゝんだ。

それだけでなくちやいけねえんだ。新らしいのでは、神様が喜ばれねえんだ。そんなのでよけりや、俺あ、わざわざこんな所まで出張して来ねえ、デパートか、洋品店に行けばいくらでも買えるわいさあ、早くしろ、俺あこう見えても、氣が短けえんだ」

その御婦人は、はたと当惑そうな顔

をして、強盗の顔をまじまじと見つめました。

「やい、やい、そう人の顔をじろじろ見るな。人が来ない中に早くするんだ。」

強盗が、いらいらとあせり出しているのが手にとるように分かります。

「おめえ、まさか、嫌だつて言うんじやあるめえな。おめえがもし其氣なら腕づくでも取つて見せるがいゝか。」

「あたしまだ、嫌だとは言つてないわ。」

「そんなら。」

「ねえエ、強盗さん」

その御婦人、何思つたかあまえるように、そう言つて強盗に

「おい、一体何するんだ。それに、強盗さん。強盗さんつてあまり心安く言うな。」

その御婦人そんなことに一

向頓着なく、や

がて思い切つたように、

「ねえエ、強盗さん、こうなつたら仕方がないからもう何もかも言つてしまわ。あのねえエ、でも恥しいわ——あのねえエ、あたし今、本当のことを言うとは何もはいていないのよ。嘘だと思つたら、見せて上げてもらいよ。」

だつて、あたし今、山へ松茸狩りに行ってその帰りなんですもの。」

そう言いながら、その御婦人は、いきなり「ほら、嘘じゃないでしよ。」

これには、さすがの強盗君も眼を白黒させて、

「ギョ、ギョッ!!」



義談スリ女

村野昭治



暮れなづむ夏時間の陽も西に沈んで、銀座街も夜の吐息にいきづこうとしている。
瀬川春雄は一杯機嫌の千鳥足を、踏みしめ有楽町駅へ急いだ。彼は社用で京橋の店へ集金に赴いて酒でゴマ化されての帰途だった。
店々の電飾の光が、夜の暗さも知らぬげに舗道を隅なく照し出している。すれ違う自動車の音、銀ブラのアベツクが行き交う。宣傳の拡聲機がひつきりなしにドナつてゐる、この雑踏の中を縫いながら歩いてゐた。
「まあ、瀬川さんではありませんの」
明るい聲の女が彼の前に立ちふさが

つた。スタイルブックから抜け出た様なアデやかな容姿でニコリと笑つて媚る目はどう見ても遊軍のパン助でもなさそうだ。
「貴女はどなたですか、僕には全然記憶がありませんが、お人違いではありませんか」
「まあ、妾をお忘れになつたんですの」
彼女は悲しそうな目で彼を睨んだ。春雄には、全然記憶がなかつたが、しかし彼女が自分の名前を知つてゐるのとが不思議だつた。それとも自分は酔つてゐるのと思ひ出すことが出来ないのかなあ、とも思つた。
彼女の顔は鈴蘭燈の光りにくつきりと照らし出されてゐるのだが。
「まあ、いいわ、忘れても、私についていらつしやいよ、お酒出す家があるのよ。この前のお禮にわたしおごるわ」
「僕は家へ帰らなければならんから、失禮だが御免だ」
「可愛い奥さんが待つていらつしやるの、だけどもいじやないの、今日一日くらい、おつきあいして下つても、ね、いいでしょう」
「よし、そんなに迄言うなら、何處へでもお伴しようか」
春雄は酒の醸し出す勇氣と、未知の女に対する限りない好奇心とで、その得休の知れない女の言葉に従う氣になつた。
「瀬川さん、そう來なくちや、嘘よ。でも少し酔つてゐるのね」
女はニコリと微笑んで彼に寄り添つて歩き出した。
「あゝ、それから聞き忘れたけど、あ

1 大阪市に二千人のスリ

大阪で名高いスリ團と云えば、生野大島を始め、阪神、ナンバ、山本、南アリナ一家などで、大体一家四五十人であるが、その下に准一家として五十人あまりが所屬し、約百人位が一つのグループを作つてゐる。
その他親分なしの子分なしと云う一人稼ぎやチンピラなど合計すると大阪市内には約二千人位のスリがうろろしてゐるらしい。女のスリは比較的少く約百人ぐらゐで、仕事は男スリが稼いで來た盗品をナレイの古物店や泥棒市場にさばくことである。
約二千人のスリを年令別にみると一番多いのはやはり二十才前後が七割を占める。まさにスリもアプレゲール全盛である。大阪市警で檢舉した最年少者は十二才のチンピラ、最高は六十七才のヨボヨボ爺さんだつた。又、國別では朝鮮人が一番多くて約六割、ついで日本人、中國人の順序になつてゐる。

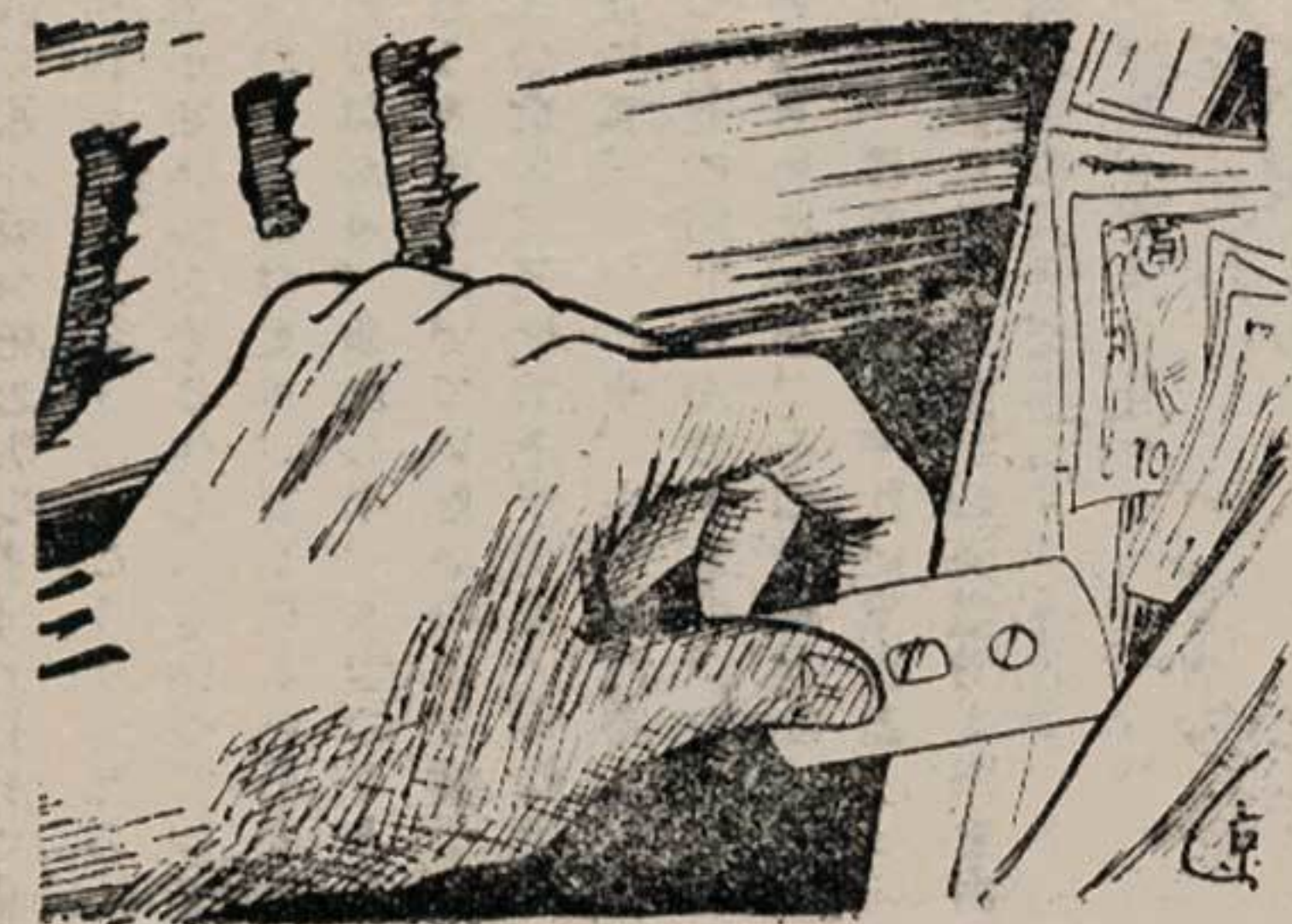
2 一回で三万圓の荒稼ぎ

スリ一家の組織は非常に組織化されてゐて、

親分(一人)―幹部七、八人―
准幹部(二、三十人)―一般(六、七十人)

と分れ、中には新入生?を教育する係、スつた盗品の處分係などもチャンと揃つてゐて、なかなか近代性を物語つてゐる。

大阪で最もよい稼ぎ場所は各デパ



ト、競馬場、心齋橋や戎橋の人混み、電車では南海、阪急、地下鐵、市電では堺筋線となつてゐる。この中でも堺筋線は沿線に銀行、株屋など現金の動きが最も多いので絶好の稼ぎ場となつて居る。アリラン隊(朝鮮人組)などは被害者がグズグズと云うと、よつてたかつてなぐる蹴るの亂暴を働き、半ば強盗化した荒稼ぎぶりである。
各一家の縄張りには嚴格に守られて居り、たとえば、阪神一家は阪急および阪神二大私鐵の箱師(電車専門スリ)、ナンバ一家は心齋橋、戎橋の繁華街に巣くう平場師ぞろゐで縄張りの協定を破つたら、それこそ血の雨がふる大さわぎがもちあがる。
稼ぎ高は一人一日平均二千元が普通



さつきの女が酒と料理を持って来て、用があつたら、このベルを押してくれと言つて直ぐ下りて行つた。

「どん／＼飲んで頂戴」

時子は彼に盃をさした。潤んだような大きな瞳が一入魅力的である。不思議だ、このような行動をとる女。どうしても思い出せない。

春雄が過去に關係のあつた女を考へてもどうしても思い出せない。

空ろな目で彼女の顔を眺めるばかりだつた。

「あら、いやだわ妾の顔ばかり見て」

「つい、貴方があまりにも美し過ぎるから」

「まあ、瀬川さんたら、大変おセイジが上手なのねえ」

「いや、おセイジじやないですよ。實際貴女は美しいですよ」

時子はいつしか彼の膝の上によりかかつていた。

「妾、瀬川さんに逢えて嬉しいわ、瀬川さん妾、きらい？」

「いや、僕は貴女が大好きですよ」

「でも瀬川さんに美しい奥さんが、おありでしょう」

「家内なん、無いですよ。僕はまた獨身です」

春雄は勢いにまかせて、そう言つてしまつて、しまつた、と思つたが、もうその時は

「わたしうれしいわ、瀬川さん、いつ迄もね」

と時子が、大膽にすり寄つてきた。暫くして二人は外へ出た。

月のない夜空に、星がきれいに糸をひいて流れた。行きかう人もない夜更

だが、熟練した幹部級になると一回で軽く三萬円位は上げる。ビイ／＼貧乏サラリーマンの三ヶ月分の月給が、ほんの一時の指先の藝当でせしめられるのだから、すごいものである。

親分は手を出さない。子分が稼いでくる金を全部プールして、分配してやるのが仕事であつて、その割り高は、一ヶ月収入で

親分約百萬円

幹部約十萬円

準幹部約三、四萬円

一般（稼ぎ高に應じて）約一、二萬円と云つたところが相場になつてゐる。

百萬円の月収と云えばいかにもボロいようだが、（税金は要らないから）、やはり内へ入るとそれ相当の費用がかかるもので、親分も子分も始終檢舉されて刑務所へ入つたり出たりするのに忙しいから、保釋金とか差入代の支出がバカにならない。百萬円稼いでもまあ收支差引一ぱいトントンと云うところらしいから、素人の考へるほど氣樂な渡世ではない。

3 熟練者は減る一方

今のスリは、とても昔の仕立屋銀次なんて云うような鮮やかな技術は持つていない。この間、ある親分にあつた

「ダメでげすよ、近頃の若いやつらは。スリチガイ（人に衝きあつた瞬間に懷中からガマ口をする方法）の出るのが大阪中で約十人、残りの二千



人は、時計のナスカン（クサリ）もはすせねえで、ペンチで切るてえようなドヂを踏みやがるんだからね」と、大いにスリ道の墮落をなげいていた位だから思いやられる。その代り暴力團化してきたことも甚だしく、大体四、五人から七、八人が一組になり一人のホシを見つけると、これをとりかこみ、袋叩きにするか、ドスでおどかして、金や物を強奪し、次々にリレ一式に渡して逃げてゆくのが多い。（朝鮮人のアリラン隊にこれが特に多いのは前述の通りである）

以上は平場師の場合だが、今度は箱師の手口を衝いてみると、これもまず混雑する乗場に立つて、仲間の一人

けの道を、彼は時子に支えられて歩いてた。

「大丈夫？ 随分酔っているのね」

「うん、一人で帰れるよ」

「そう、では、氣をつけてね。妾此所で別れるわ」

二

「あなた、あなた」

どこか遠くで呼んでいる様だ。はればつたい嘘を無理に開けたが、意識がはつきりせず頭がづき／＼と痛む。

「あなた、出勤の時間ですよ。お起きにならないの？」

朝の光線がまぶしく目を打つ。

「頭が痛いから、休むよ」

そのまゝ彼は再び深い眠りに陥つた。時計が十時を打つてから、やつと目が覺めた。そして、おぼろげながら昨夜の事を考えた。

そうだ彼女と今日、有樂町駅前の喫茶店で待合わす約束があつたつけ。春雄はそう思い出してダルい身体を起した。

「あら、お起きになるの、昨日の晩はあんなに酔つぱらつてしまつて、お隣りの息子さんが、途中であなたを見つけて送つて下さつたのよ」

妻の良子から昨夜の醜態を聞きながら、朝食とも晝食ともつかぬチグハグな食事をすました。

「良子、用事を思い出したから、出かける。服を出してくれ」

良子は昨夜着ていた服をきちんと畳んだまゝで持つて來た。内ポケットを探つて、あつと顔を蒼くした。

「良子、内ポケットに入つていた金は仕舞つたか？」

彼は昨日の中に集金した約三万円の金をそこへ入れていたのだ。

「いゝえ、知りませんわ」

無い、無い、懷中時計もないのだ。

誰が盗つたのか、落た筈はない。内ポケットはちやんと釦がかけてあつたし、時計には鎖がついていたのだ。

隣りの息子もわざ／＼自分を送つてくれる位だから、まさか、——そんな事はある筈がない。

最も怪しいのは、自分は全然覺えない時子とかいう、あの女だ。若しもあの女が盗んだものなら、約束の處には待つていず、何處かで自分をあざ笑つてゐるだろう。

春雄はいろ／＼そんな事を考えながら、道を急いだ。都電を下りるなり、駅前の喫茶店へとび／＼んだ。いない、彼女に似た影もない。

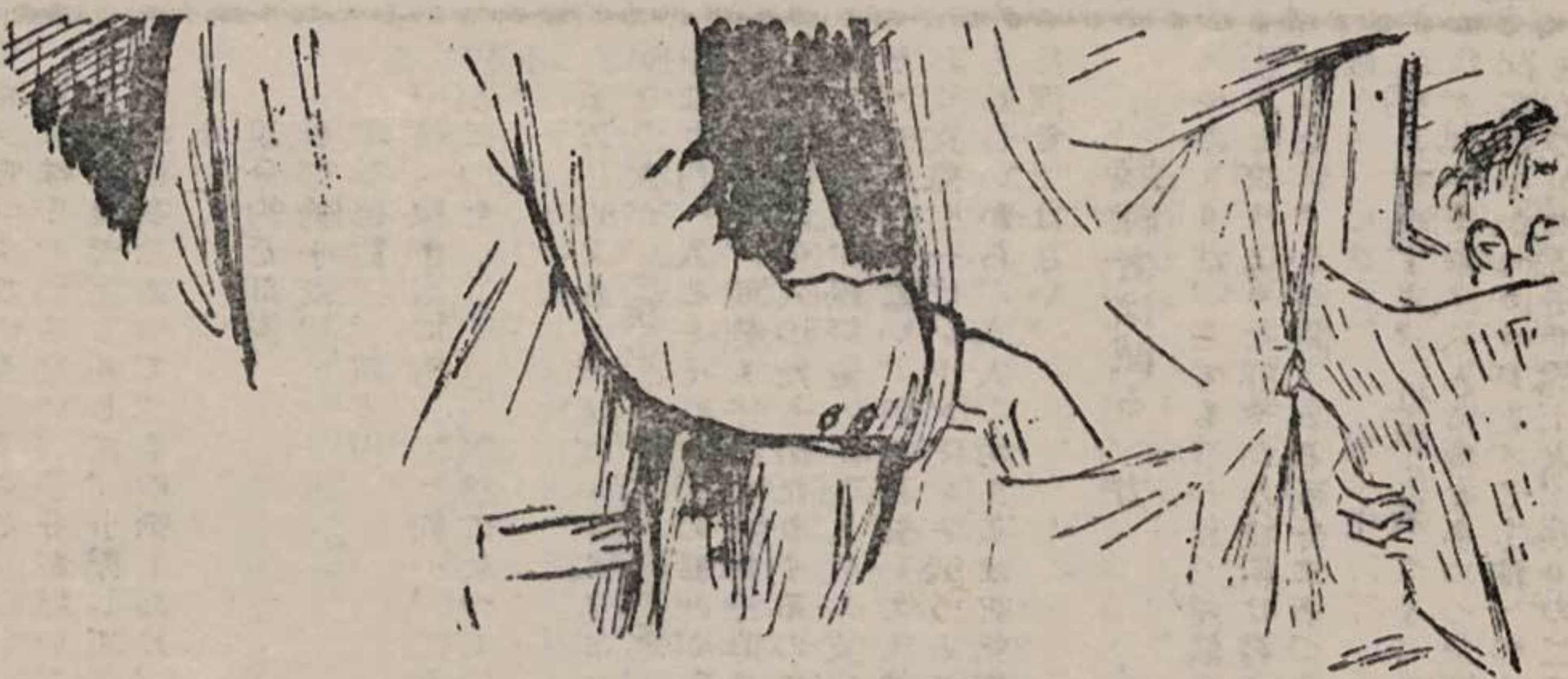
やりやがつたやつぱり彼奴なのだ。然し約束の時間には、まだ少し間がある。ので待つ事にしてコーヒを頼んだ。いら／＼する心を押えて待つていたが、遂に時子は姿を見せなかつた。

春雄は二日酔いに、かてゝ加えて憂鬱な重い氣持で駅へ引き返した。街の賑やかさも今日は腹立たしく、情なかつた。

三

一昨日、集金に赴いて、酒でゴマ化されて貰えなかつた店を訪ねて、残りの金を貰うともう二度と、あのような失敗はしないぞと、眞直ぐに家路へと

が、ぼつてりと現金で膨れたような鞆をもつてゐるホシを見つけると、手で軽く鞆をつゝいてその重味を試す。



（熟練したスリならその重味で、大体何万円位を持つてゐるか？ すぐに見当がつくと云う）たしかに金目の物が入つてゐると知ると、同乗してゐる他の一人は専ら助手役となり、ホシの注意をそらす。（たとえば新聞をホシの目の前にひろげて視界をさえぎつたり、わざと横腹や、背中をぐいぐい押したり、鞆から注意が去つた間一髪、三人目のスリが、安全カミソリの刃で、鞆の底皮（又は背皮）をスツと切る。そして、切れ目から首を出す札束を瞬間抜き取つてしまふ。）

スリ取つた金品は、平場師の場合同様、素早くリレー式に次々と仲間へ渡してしまひ、カミソリの刃は床へこつそり滑りてしまふから、ハツと氣がついて「スリだつ」！とさわいだ時にはもうおそい。たしかにこいつがスリだと思つても、何の証拠もないので、泣き寝入りになるのが落ちであらう。

4. どんな人が狙いやすいか

スリの喜ぶホシは、田舎から出てきた人、家庭のおかみさん、サラリーマンの順で、実に容易にスレるそうである。面白いことには制服の警官が同乗してゐる場合の方が、乗客はスリに対して安心してゐるからかえつてその油断に乗じてスリやすいと云う話である。

スリにやられないためには特種の鞆の持ち方があるから傳授しておく。片手でぶらりと提げるのは一番あぶない。

急いでいた。

盗まれた金は、田舎の親爺に工面してもらつて、ケリがついたのだつた。

銀座一丁目を過ぎ銀座二丁目の大内ラジオ店を右にそれて駅へ向かうとして、ふと三間ばかり前の洋品店のウィンドウを覗いてゐる洋装の女、確かに、一昨日の女の後姿だ。

春雄は、夢中で彼女の肩を叩いた。彼は興奮のために聲が出ない。彼女はびくつとして彼の顔を見た。彼女の顔色が瞬間、青く驚愕の色に交つたのを彼は見逃さなかつた。

「き、君だろ？」

春雄は、何んと言つてよいのか、後の言葉が続かず、唯彼女の顔をにらみ続けるばかりだつた。

「まあ、瀬川さんじゃないの奇遇だつたわねえ。何をそんなに恐い顔をして怒つていらつしやるの、昨日はわたしお約束した小野田時計店の前で二時間から待つたのよ、怒るのは妾の方だわ」

例の媚るような大きな瞳に笑を浮かべた顔には何か割りきれぬ感情をかくしているようであつた。こんな女に騙されてたまるものか。

「君は、驛前の喫茶店で逢う約束だつたじゃないか」



「なに言つてらつしやるの、小野田時計店の前だつて、あんなに言つてらしたのに」

「あの時、酔つていたから聞き違いかも知れないが、もう一つ君が僕を何故知つてゐるか話してくれ、僕はあの晩会社の金を盗まれたのだ、」

それでは、妾が一番近い容疑者だね、妾が貴方を知つた事を話せば貴方

立つて居るときには、赤ん坊を抱くように両手で胸の前にひつつけてしつかりと抱く。この場合尾錠のある方は胸の方に、向ける。座席に座る場合は、腹の前にビツタリつけて、上から両手でしつかり抱えておくことである。こうすれば、どんなスリでもカミソリの刃の立てようがない。無理にやろうとすれば相手の腕を切るからである。ドル入れを尻ポケットや、外套の外ポケットに入れることは絶対禁物である。必ず上着の内ポケットに入れ、上着のポケットをにかけておく方がよい。それから、誰も利用しないが、チヨツキの裏側のポケットにドル入れを入れたら、どんな巧妙なスリでも手を出せない。

筆者は時々社用で上京するが、うっかり網棚に抱抱を置き、二回も見事にスラれたニガイ体験がある。たいてい午後十時半 大阪発の夜汽車に乗るので、一番ぬむい午前三時から四時ごろはちようど静岡の邊になる。スラれたのは二回ともその静岡の邊であつた。旅行される方は、特に夜明け前、トロトロと眠くなる時刻が、箱師の一番稼ぎ時であると注意されるがよい。

戀をつらぬいた女スリ

スリは最小限二人が一緒になつて居り、万一片つ方が足を洗つて堅氣になろうとしても、そ合棒が陰に陽につきまとい、どうしてもスリの泥沼から抜け出られない。

ナンバ一家の姐御と云われるナンバの幸々こと下津幸子(二三) 假名

も、合棒の山本という男と組になり、カミソリの刃一枚を武器として、大阪地下鐵を荒しまわつていた。幸子はもとある女學校を卒業後、北濱のある大会社に勤めていたのであるが、ちようど四年前、地下鐵本町と淀屋橋の間でその日もらつたばかりの給料をスリにやられた。その復讐に燃えて、ある日地下鐵の中で混雑にまぎれて隣りの女學生のドル入れをさつとスつたのである。そして地下鐵の出口へ出ると「おい、どこの姐さんか知らねえが、こゝはナンバ一家の縄張りだぜー、へん、トウシロウの分際で、大それた縄張り荒しをやろうつてえのか？」と、人相のよくない色眼鏡の若い男がビツタリ寄りそつて脅した。これがナンバ一家の小林であつた。幸子は小林に弱味を握られてする／＼とナンバ一家の仲間引きすりこまれたのであつた。

幸子と合棒になつた山本は小林の弟分で、ナンバ一家でも有名な腕利きだつた。山本 色戀抜きで合棒ハ幸子を教えこみ、みつちりと鍛えた。全くズブのチンピラから、押しも押されぬナンバの幸々と云う姐御になつたのも山本のおかげだし、丸四年間、たゞ一回も刑事に捕まらないのも、山本が巧みに危ない瀬戸際を身を捨て、助けてくれるからであつた。だが、女スリと云つても、やはり若い女である。幸子はいつの間にか、稼ぎ場である地下鐵でふと知り合つた駅手の松下清君(二七) 假名が忘れられない人となつた。いつもおとなしい

が妾に対して抱いていらつしやる疑いが晴れるというのなら、話すわ。貴方は一ヶ月程前、京濱線の電車の中で、田舎風のおばあさんに席をお譲りになつ

は母と遠く離れてしまつて。その時、母の前にかけていられた貴方が母に席を譲つて下さつたのですわ、田舎から初めて東京へ出て来た母が貴方の御親切に喜んで、お名前を伺つたでしょう。あの時、妾、離れてたけれど、とても嬉しかつたわ、そして貴方の名前を覚えてちやつたの、お禮を言おうと思つてゐるうちに、貴方は次の駅でお下りになつてしまつて、――



たことがあるでしょう。あの荷物を持つたおばあさんは私の母でした。あの時、田舎から出て来た母を迎えての帰り途でしたが、丁度ラッシュで、妾

「ある。ある。」

四

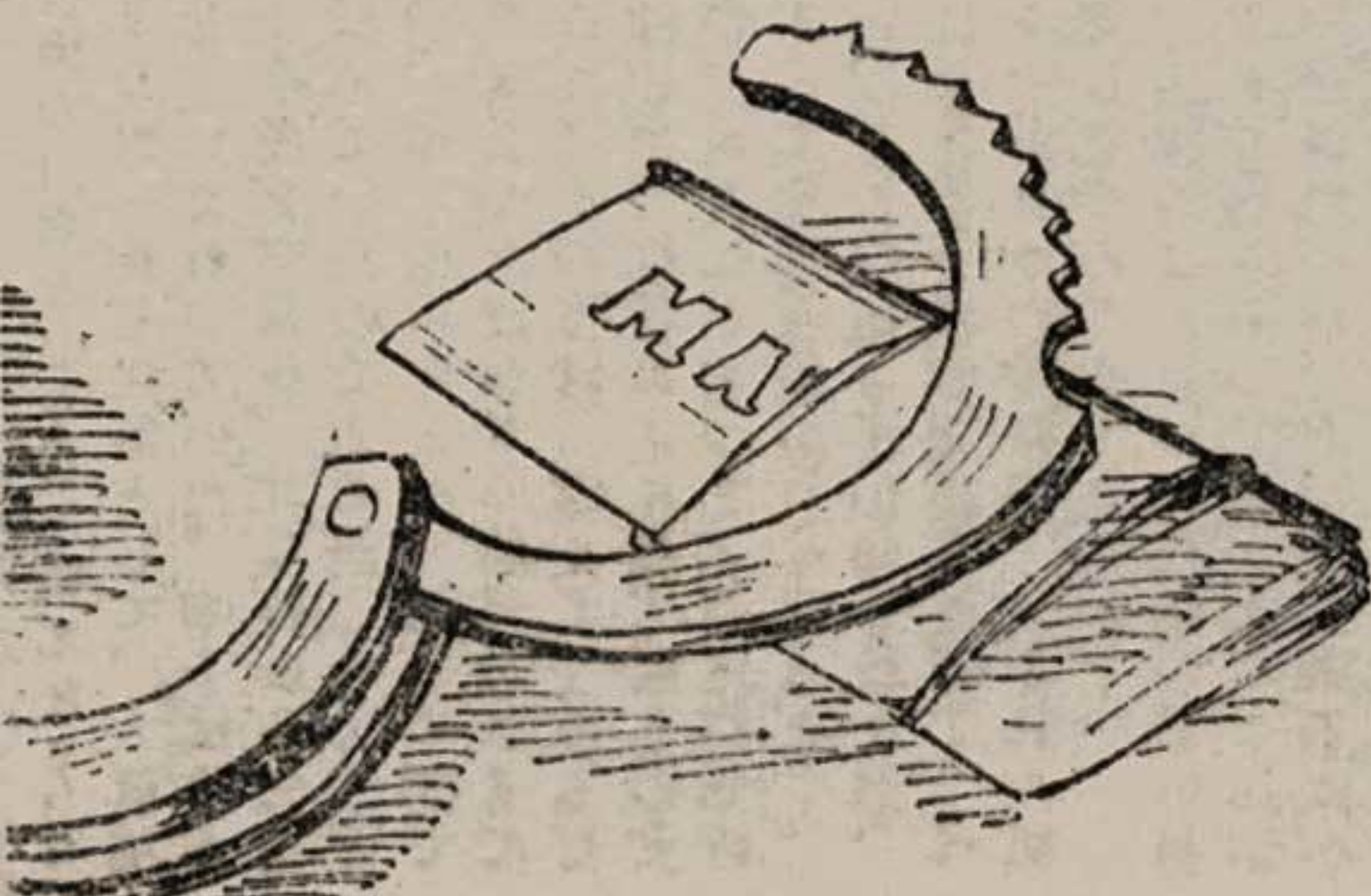
春雄は一時でも彼女を疑つたのが、恥しくなつた。そうか、その感謝のつもりで一昨日は御馳走をしてくれたのか「つい、うっかり貴女を疑がつたりして、済みませんでした。宥して下さい。氣晴しに何處かへ参つて、冷たいものでも飲みましょうか」「えい、お伴しましょう」彼は時子のような美しい女が悪いことをする筈がない、そう思うと、又嬉しさがぞくぞくとこみ上げて来た。唯、一昨日の不可解なことが又一洸の不安となつて心の奥底にわだかまつてゐるのが、彼に伝ひしい思いをさせた。この道筋は、相変らず賑や流行歌のメロデーで満たされて

事務員風の洋装で会う幸子を松下君がどうして女スリだと氣がつくだろう。嬉しい逢瀬が重なり、情熱が火のように燃えてくると、幸子はとうとう思ひあまつて、山本に足を洗いたいから絶交してくれと涙を流して頼みこんだ。だが「ふん、結婚したい？ 笑わせるな、スリの飯を四年も食つたお前が、仲間の義理と手前の色戀とどっちが大事故か判らねえはすはあるめえ、俺を裏切るにはそれだけの覺悟があるんだろうなあ？」冷やかに鬼のようにせうら笑う山本の殺氣に満ちた脅迫、幸子はいまさらながらスリの世界の怖ろしい仁義をしみじみと思ひ知つた。だが松下君への愛情はどうしても絶つことができない。何度何度も山本に脅され、大阪市内を必死に逃げ回つた末、ついに幸子は松本君と正式に結婚し、南區のある露路裏にさうやかな愛の巢を營んだ。だが、山本はこのかくれ家を発見すると、松本君の出勤した後を狙つては訪問して来て、金をゆするものであつた。何も知らない夫、まずしい駄手の夫にどうして女スリであつた過去を打ちあけられよう。幸子は涙をのんで山本の要求に従う他はなかつた。度々のゆすりに金がなくなつた幸子はある日、とうとう山本の脅迫をハネつけた。翌日、山本はフ拉里と地下鐵の職場に松下君を訪れた、「エへへ、あんたの奥さんと俺は昔、これの合棒でしてね」

憎々しげに山本はポケットから、ザラリと二枚のカミソリの刃をとり出し、掌にのせて見せるのだつた。その夜、眞青な顔色で帰宅した松下君に幸子は泣いてすべてを告白した。すでに彼女は妊娠八ヶ月の身重になつてゐた。

山本のゆすりに應じなければ、夫がおびやかされ、度重なれば必らず夫に捨てられると思ひこんだ幸子は、とう／＼意を決して、山本の誘ひに應じて、再び一年ぶりにカミソリの刃を握つた。

アベノ橋発大阪行市電の中で、久しぶりに山本とコンビになつた幸子は、ある婦人の手提袋を狙つた。汗をふくと見せかけたハンカチの中に忍ばせた得意のカミソリの妙技、カーブを利用



春雄は胸に手を当て、見た。今日集
金した金が外からさわつて、お厚く感
じる手ざわりだつた。とん／＼時子が
銚子を持つて上つてきた。

「ねえ、もつとお飲みなさいよ」
「いや、僕はもう澤山だよ」

彼の目元は、ほんのりと紅味を帯び
ただけだつた。今晚は、もう失態を繰
り返ささないぞ、彼は、ともすれば、
過しそうな盃を押えていた。

「わたし飲むわ、ねえ、お酌して」
彼女は春雄にもたれながら飲んだ。

「あら、もう空ね、一寸待つてね」
空の銚子を持つて下りて行つた。五
分、十分、時子は中々上つて来ない。
どうしたのかな。彼は上衣の上から觸
つてみたが、金は有る、そのお厚な感
じでわかるのだ。

幾ら待つても時子が上つて来ないので
彼はしびれを切らして、手を叩いた。
「僕の連れが、さつき下へ下りたが、
知らないか？」

「あら、何にも言わないでですの、お

勘定をすましてお帰になりましたわー
彼は無意識に内ポケットに手を入れ
た。あつ、彼の手に觸れたのは、札束
ではなく、古新聞を紙幣の大きさに畳
んだものであつた。その新聞に挟まつ
て、小さな紙片がばらりと落ちた。

「あなたも随分甘いね、今度こそ
妾の素性を明かしてあげるわ。田舎の
お母さんと言うのは嘘八百。たゞ遠く
から見ただけ。あの時のお金と時
計は私が失敬したわ、今日のお金もつ
いでに貰つてゆくわ、これも、貴方が
女に甘い罰金よ。」

けど、貴方も嘘言つたわねえ、ちや
んとした奥さんがいるくせに、いない
なんて。奥さんがあるかない位は、直
ぐわかるわ。今後共、他の女に手を出
さないで、奥さん一人を可愛がつてあ
げてね。貴方の好意に對して勘定だけ
は拂つておいたわ、ではお元氣で左様
なら——

スリのお時より、

瀬川さま

して、サツと手提袋を切つた
瞬間、飛鳥のように大阪市警
のスリ狩の名手野々村部長刑
事がとびかゝり、カチヤツと
手錠が鳴つた！。四年間たゞ
一度のヘマもやらなかつた彼

女の痛ましい敗北。冷酷きわまる山本
の復讐はみごとに成功したのであつ
た。幸子は市警調室で、野々村部長に
洗いざらいすべてを告白した。

誠実溢れる幸子の態度は、野々村部
長の温かい同情を買い、ついに書類送
廳だけで許してもらつた特別の配らひを
受けた。

「よしよし、山本のことは私に任せな



さい、今後指一本ふれさせはしないか
らね、君は過去を忘れて立派な母親に
なるんだよ、いゝかね、安心して今日
は帰るなさい」

こうして、女スリクナンバの幸は
純愛をつらぬいた。……しかし、この
一事でも、いかにスリの仁義が怖ろし
いかは身に沁みて判るではないか！。

理想の結婚 の悲哀



結婚は人生の一大重大事件で
性的關係の最も密接なものであ
るが、女性に於て特に深く注意
すべきことが多いのである。

結婚すべき男女は、理想とし
て童貞のものと處女であるもの
でありたいと言われている。

しかし、この條件に當てはま
つた結婚は、實際上あまり幸福
であるとは限らないもので、往
々にして意外の破綻を來たした
例を見るのである。

新郎も新婦も、二人共、全然

性交に關する經驗を欠く場合には
新婦は非常な苦痛を覺えるのみで
あつて、少も愉快の感が起らない
新婚の第一夜の明けるのを待ち
かねて、泣いて實家へ逃げ歸つた
ものさえあるが、假に、それがあ
まり極端であるとしても、この如
き状態が続いていけば、新婦は一
生を共にすべき夫に對して、日々
夜々恐怖と厭惡とを反覆するので
ある。

即ち相愛し、相信しなければな
らない夫に對して、少しも敬の

念が起つて来ないのみか、之が基
になつて理想的であるべき結婚が
反つて、破綻の嘆に終つた實例が
ある。

新婚の日に、新婦は必ず多少の
疼痛を覺えると共に、少なからず
恐怖の念を抱くのが普通である。

處女膜というものは、いろ／＼
の事情の爲に欠損はするけれど、
若し存している場合には、出血と
共に、極く輕微な疼痛を覺える筈
である。

この點を顧慮するために、花柳

社會で新に枕席に侍らせる舞妓に
對しては、予め經驗に富んだ老人
をして諸般の施設をさせることに
なつて居る位である。

「不都合な引例」だと言つて怒る
人もあるかも知れぬが、注意を要
する點に於ては少しも關係が違わ
ないのである。

従つて此の點から考えたなら、
夫婦の一方が相當の經驗を持つて
い方が、反つて平和な家庭を作
る上に良好な結果を招來すること
になるのである。(コバルト叢書)

洞窟の娼婦

日向路雄

戦場にバンバンが居た。

砲弾の咆哮と、死臭と硝煙漂う戦場に！

欲情に燃ゆる美しく妖しい瞳、逞ましい

女體を眼の前に投げだされ……

彼は一瞬、困惑を感じた。

盛り上った乳房がはげしく息づいている

しつとりと汗ばんだ女の皮膚が、そつと

觸れて来て、彼はもう思考力を失った。

一

比島北部ルソンの奥地、山間の町キ

アンガン、そこから約四軒奥の山口村

(戦路上軍がつけた地名)そこで彼等

の部隊は米軍に包圍されて仕舞い、四

六時中降りそぐ米軍の鐵の豪雨の下

で、飢餓と、悪疫と戦つていた。米軍

に對してはほとんど無抵抗状態のまゝ、

中田伍長の耳に入つて來た。

「あゝ米一升持つて行けば良いんだ

！」「ほう！そうか。それで女は良えの

か？」

「おゝ凄いい別嬪だぞ、それに何とも云

えん体しとるぞ！お前も一遍抱いて來

いよ、息のあるうちに！」

「晝はな、この下の谷の横穴に居るが

た。その花火に

も似た美しいき

らめきを彼はぼ

んやり、何の感

慨もなく眺めて

いると、左手の

草むらの向う側

から話し聲が聞

えて來た。

会話はボソボ

ソとして低い聲

で続けられてい

たが、何か變に

人の興味をそゝ

る様なひゞきを

持つていた。そ

の会話は聞くと

もなしに自然に

話し手は第一分隊の濱口兵長らし

つたが相手は誰か解らなかつた。

中田の腦裡を何か黒い影のようなも

のが、さつとよこ切つた。そして内心

何かわけのわからぬ憤どおりを感じ

た。

(そうか！本当だつたのか！)

十日ほど前から、そんな噂をちよい

ちよい彼は聞いては居たが、まさか？

と思つていた。しかし考えて見ると、

無理もない事だとも思われた。彼等は

生きて再び故國の土を踏む、という事

に誰もが希望を失つていた。彼自身も

そうであつた。

この暗い陰

鬱な死の谷間

にとじこめら

れ、毎日惡魔

の様な砲弾の

うなりを聞い

ていると、只

い度い、そして出来る事なら一度で良

い、美しい女を抱いて見度い。それは

兵隊であり男である彼等の偽らざる欲

求だつた。

米一升を得る事は、その時の彼等に

とつては決して生優しい仕事ではなかつた。

死の谷を蔽う、瞬時の切れ間もない

彈幕を、死物狂いで走り抜け、元

日本軍の糧集積所に潛入し(そこは現

在敵陣の一隅になつて居た)

脱兎の様に持ち帰り、その糧をコッ

コツと搗いて精米にするのである。

その血のにじむような貴重な米を、

平氣で搾取る女が居ると云う。



彼は思った。捨て、置けない気がしたそれは憎んでも余りある汚い行爲だと彼は思考力の衰えた頭で、いろいろと考へ悩んだが、結局、何か得体の知れぬもやもやしたもののが粕のように胸に残つた。

二

夜は氣温がぐつとくだり、毛布一枚ではうすら寒く、幾度も目が覺め、充分な睡眠がとれなかつた。

浅い眠りから覺めた中田伍長の眼に木の間を洩る陽光が眩しかつた。水筒の水で口をすすぐと、飯盒を引寄せ、冷えきつた粥をすすり初めた。温める



事は出来ないものである。晝間火を焚くと煙が目標になり、砲彈の雨を浴びなければならぬ。火はすべて夜間、入口を密着した横穴の中で、ひそかに焚かれていた。晝間火を焚く事は嚴重なタブーとなつていて、それを犯かす事は絶体許されなかつた。粥には南方春菊(俗稱)の葉が米より多く入つて居て、それに極く少量の塩が入れてあつた。しかし今は、その貴重な塩も残り少ない。

こゝ二三日を搗くのが彼等の日課になつていた。彼は靱の束を携帯天幕に包んで立上り「米搗きに行つて来るからな」

とマリアの衰弱で寝た切りの佐野一等兵に聲を残して小屋を出た。初め十五人居た第二分隊も今は中田伍長と佐野一等兵の二人切りになつて仕舞つていた。

約二百米後方に、なかば倒壊した土人の家屋が七戸あり、その家の中に木製の臼が数個あつて、兵隊達はそこを米搗き場と云つていた。

杵は何と云う木なのか馬鹿に重く、一升搗くと額に汗がにじみ出た。單調な動作を繰返していると、次から次へといろんな想ひが浮び、そして消えた結局昨夜のもやもやとした不燃焼物のようなものが、再び彼の頭の中一杯にひろがり、彼をいらいらさせた。

(よし！行つてやろう！そしてこの變な胸につかえてゐるものを叩きつけ、さつぱりしよう！)

彼は谷へ降りて、女が居るといふ横穴の前に立つた。女は三尺程の入口を背にして髪を解いていた。

「今日は！」

彼は冷靜にと勉めて言葉をかけた心算だつたが、内心の怒りを押え切れず聲がふるえた。女は振り返ると、

(今頃何の御用？)

と云つた表情で首をかしげ彼の眼をのぞき込んだ。

(ホウ)

彼が思わす感嘆の吐息を洩らして仕舞つた程の美貌だつた。

(華麗なダリアだ！)

瞬間彼はそう思つた。その美しさに二十四才の彼の若さは忽ち圧倒されてしまつた。

(此れは人違いかも知れない、だが現地邦、達はもつと後方にいる筈だが……)

彼はいさゝか周章で氣味で、用意して來た数々の言葉が仲々思ひ出せなかつた。

「……君が……米で……」

充分意味のとれぬ言葉に、女は一寸首をかしげて居たが、すぐ、朝の若い訪問者の來意を覺つたと云つた表情で「え、そうですわ！どうぞお入りになつて」

ガーン！横穴の位置から十米位の地点に砲彈が落下して、二人は土煙に包まれた。

「危いわ！早く……」

彼が中に入ると、そこは一坪半位の廣さで、細い丸太を並べた床の上に毛布が敷いてあり、その上に雪のように白いバス・タオルがかけてあつた。

女は空罐製のラムプに燈を点じ、入口の戸を締め、つゝかいをした。ラムプの燈が妖しい迄に美しく彼女を照らし出してゐた。

二十二三だと彼は思つた。深緑色の薄いワンピースに包まれた、なだらかな肉体の曲線、胸元からのぞいてゐるむつちりした白い肉、彼の若い官能は烈しい炎となつて燃え上り、今にもぐらぐらと自制心が崩れてゆきそうに心細かつた。彼は身を固くし乍ら持つて來た米袋を床の上に置き、危やふやな心にびしりと鞭打ち、思い切つて口をきつた。

「自分は！自分は神聖な戰場を汚してもらいたくないんだ！」

「確かに倫理だ！彼女の言葉のどこが間違っていると云うのか……俺たちは

から放子さんはその空
日、和平洋行を訪ねてみ
面談したのは堂々た
が出来て居た。

放子さんは大阪のある
私立探偵社に勤める友人
初枝

が、初校はどうしても母
親に會わないさ云うの
んの新らしい情
と云う美青年が
だ、何とかいゝ知恵はな

—54—

思わす息をのみ、茫然としてつゝ立つている彼へ、女はいたすらつぽく、婉然と微笑みかけた。それは洗練された肉感的な微笑だった。も早や彼は思考力を失つて仕舞つた。

三

淡い虚脱感を悔いの色が彼の頬に佻しく浮んでいた。彼は米搗場へ引返すと、再び杵を握りしめた。彼は残っている力の限り、突き下しては、振り上げた。

美しい裸身が、白い映像となつて彼の脳裏に甦がえり、それが大きく迫つて来ては、小さく離れ、ぐるぐると廻つては消えた。

別れ際に彼女が唇を寄せ、熱い息で囁いた甘いひびきの言葉の数々が、しきりに彼を悩ました。

バツと黄色い閃光がきらめき、米搗き場の周囲の荒れ果てた畑で、数発の砲弾が炸裂した。強い硝煙の匂いがしばらく漂っていた。

白の靄の中に、女のなめらかで逞ましい肉體が浮び、慾情に酔いしれた黒い瞳がけだる氣に微笑んでいる。

彼はがむしやらの杵をふるつた。汗が龍のように流れては落ちていつた。

黄昏近い戦場の片隅で、彼は、機械のように、同じ動作をいつまでも繰返していた。

(終)



「いかにね」

と相談された。それが、自分を裏切つた女への復讐をたくらむ坂上氏の計画で、何とか初枝さんを自邸におびきよせようとする下心だと氣づかないまゝ、放子さんは、

「ええ、初枝さんが誰にも内緒で、二人で、住む家を探してほしいと、この間私に頼んでいましたわよ……」

と告げた。坂上氏は急に顔を晴れ／＼させた。数日後、氏はとつぜん放子さんに電話で

「適當な家が見つかったよ、阪神の御影驛で待っているから、ぜひうまく初枝をつれて来てくれたまえ」

と命令した。放子さんはすぐに

「初枝さんいゝ家があるわ、案内するから見に行きましようよ」

と誘つた。十一月十七日夜、放子さんは一足先に御影驛へ行くと、暗い物影に、ルームランプを消した一台の自動車を用意されていた。

やがて初枝さんが姿を現わすと、待つていた坂上氏は

恋のスパイ

情痴硫酸事件の秘密

原 紅太郎



上氏は暗闇の中からぬつと出て来て裏切つた愛人の腕をぐつとつかんだ。

「おい初枝！」

「あつ、あなたは、？坂上さん、堪忍して」

もがいて逃げようとする初枝さんを無言で自動車に押しこめると、坂上氏は

「君も同乗するんだ」

と放子さんを引っぱり込んだ。

どこへ行くのか、闇夜を衝いて疾驅する自動車の中で、激しく云い争う男女の言葉から、放子さんは、暗影に充ちた二人の複雑な情痴關係や、宮本と偽名していた坂上氏

の秘密を始めて悟り、流石に若い處女である放子さんは恐しさのあまりがた／＼と慄え出した。

途中で下車させてくれと頼んでも、

「一緒に行くんだ！」と一喝した坂上氏は、自宅に着くまで放子さんを許さなかつた。やつと自

動車から降ろされた放子さんは、初枝さんの身の上を怖ろしい不安を感じながら歸宅した。

その翌日、西宮市警から呼び出されて出頭した放子さんは、氣を失なわんばかりに驚いた。

坂上氏は昨日無理に自宅へ引っぱりこんだ初枝さんに、嫉妬のあまりに、さんざん暴行を加えた末、硫酸をぶつかけ、この爛れた三角關係の悲劇の幕を閉じようとしたのであつた。

頭から全身硫酸を浴びた初枝さんが、瀕死の姿で脱出、力つきて路傍に仆れていたのを巡査の警官が発見したのであつた。

たつた二十日足らずの短い間であつたが、自分の果した「戀人のスパイ」が、人間のみにくい情痴生活の裏面をえぐりしか、その戀の三角關係の劇的な破綻に對して大きな役割を持つていた事を知つて慄然とするのであつた。

二十才の處女として、まだ人間男女の本然の姿を知らなかつた彼女としては、氣を顛倒する程の驚愕であつた。

怪奇小説 淑女の小便を飲む男

一、
あの異常な事実を、今から思い出すだけでも、ぞつと身震いするのであるが、さて筆をとつてみると何から書き出したらいゝものか全く迷つてしまふのである。

そう、あれは確か三月も半ば過ぎで、あちこちの隅に残つた雪がとけ始め、木々の芽がふつくらとふくらみかけた頃だつた。

私は仕事の関係でしばらく会わなかつた友人の刈田から一通の速達便を受取つたのである。私と刈田とは、學校以來の大の仲好しで然かも彼とは同じ市内に住んでいたのであるから、速達を出す程急な用事があれば、出向いて来てくれればいゝのにと思ひながら封を切つた途端、私の顔はさつと曇らずにはおれなかつた。

それには、走り書きでごく簡単に、「親愛なる貴田川君

突然君を驚かして申譯ない全く急だつた俺は今、明日をも知れぬ重病の床に喘いでいる。ついては、君にお頼みしたいことがあるのだ。この手紙が着き次第至急来て欲しい」と、それだけ書いてあつた。

君にお頼みしたいことがあるつて、金のことかな。だが、あんなに丈夫な奴だつたのに人間つて分らないもんだと思ひながら、私は、取るものも取り敢えずあわたとしく、家を飛び出したのである。

市電で約十五分、それから歩いて八分ばかり、殆んど郊外に近い焼け残つた住宅地の一角に、私と同様まだ獨身の刈田が二階を借りて下宿している家がある。

私は、下宿のおばさんに断つて、勝手知つたうす暗い階段をとんとんと昇り、刈田の部屋の障子に手をかけて開けようとした時だつた。

部屋の中から、妙にしわがれた陰気な、それにどこか嚴かな女の聲が響いて来た。

誰か來ているな。私は、障子に手をかけたまゝ、何氣なくその聲に耳を傾けて立ちすくんだ。

「いゝですかこれがこの間お話しした支那から傳來の高貴藥ですよ。これはその草の根を粉にしたものです。何遍も言うようですが、これをこのまゝ飲んでいただければ駄目ですよ、いゝですか。必ず二十二才の、まだ男を知らない女からとつた尿に溶かして、それを四十

分位煮てから飲むのですよ。分かりましたね。そうすればあなたは絶対大丈夫です。だが、はつきり言つておきますけど、ね、その女が二十二才でなかつたり、処女でなかつたりしたら大変なことになるですよ。そこをよく注意してやるんですよ。では、わらはは、帰ります。お大事に」

中から、さつと障子が開いて、その拍子に私はその女とはつたり顔を合せてしまつた。その女は、すれちがひざまに、私の顔をギョロリと睨んで行つた。

私は、思わずアツと聲をたてる所だつた。それもその筈、その女の顔は丁度猿が人間に權化してこの世の中に現われて來たような異様などす黒いしわだらけの老婆だつたからだ。それにその眼が又凄惨い程氣味悪く光つていた。その老婆は、兩手で大事そうに御幣を抱え、身にまとつた白衣をひきずるやうにしづしづと階段を下りて行つた。

——一体何者だ、あいつは。

私は、ぽかんと後を見送つていたがその疑問はすぐ私自身で解決することが出来た。

と云うのは、言い忘れていたが刈田

は若いのにも似合はず大の宗教信仰家なのだ。所が、宗教と云つてもピンからキリまである。

刈田が信仰——いや盲信と云つた方があてはまるかも知れない——しているのは、その中でも、私に言わせれば所謂邪教——インチキ宗教——アブレゲール宗教——と云う奴だから仕末に負えない。

無神論者である私は、このことで彼に何度忠告し攻撃したか分らない。だが彼はこればかりは私の言う事に耳をかさなかつたのが不思議だつた。それ程信仰しているのならば。と私も敢えてその事に、觸れなかつた。それにこの下宿のおばさん一家がその宗教の信仰家なのである。

だから、さつきの老婆は、祈禱女だと、すぐ判斷することが出来たわけだ。

二、

「オイ刈田、君は醫者にみてもらつたのかあんな婆アの言う事なんぞ聞いてたら大事の命を落してしまふぜ仕様のない奴だなあ君は下り殺されても知らないぜほんとに」

私は、刈田の枕許に坐ると眞先に、こう言わずにはおれなかつた。

「そう言わないでくれ俺の病氣はなああるんだほんとによく來てくれたなあ有難う」

刈田は、熱にうなされたうわすつた聲で、苦しうに言つて私をぢつと見

つめた。

私は、つと目をそらして、疊の上に大事そうに置かれた小さく薬包みを取り上げるる。

「フンこれがさつきの婆アが置いて行つた支那から傳來の高貴藥とか云う化物だ。この粉末を二十才の処女の尿に溶かして、それを四十分煮てから飲むのか。馬鹿な。喜劇だ。君が僕に頼みたいつてのは、その二十才の処女の尿を僕にとつて来いつて云うんだろ、どうだ。図星だろフッフ、」

「うん、そうなんだ。」

「眞平御免だよそんな馬鹿なことそれより僕は今から醫者を呼んでくる医者

を」

私は、そう言つて立ち上りかけた。「ま、まつてくれ。な、お、お願いだこの俺の頼みを聞いてくれ。な、頼む」

刈田は、蒲團から、からだをのり出して私の手を弱々しく握んだ。

私は、これ以上病人に逆らつては、却つてからだを悪くしてしまふばかりだと思つたので、又坐りなおした。

「ねえ、刈田、宗教では病氣は治らないんだ。この文明が發達した世の中に君は科学を醫學を否定するのか。まさか否定は、していないだらう。君は神がそれ以上のものと信じているだけなんだね。君は間違つてゐる。君の病氣は、醫者だけが治すことが出来るんだ」

刈田は、聞いているのかいないのかじつと目を閉じたまゝ動こうとしなかつた。

私は、もう醫者を呼びに行く事を諦めた。こんなに強く信じ切つた彼を見ていると、ひよつとしたらその精神力で病魔を克服する事が出来るかも知れないと云う錯覺に陥入つた。

刈田は、靜かに目を開けると、「お願いだ、頼む」

と、もう一度言つた。

私は、彼の熱心さには負けて、その奇妙な願いを引き受けることになつた。

それには、いくら私の好奇心も働いていたのであるが……

三、

さて、私は、この前代未聞の世にも

珍奇な彼の願いを引き受けてしまつたものの、どうしたらいいのか迷わずにはおれなかつた。

それには、まず二十才で処女であると云うその條件になつた女性を探さなければならぬ。

二十才の女性は、いくらでもはき捨てる程いるが、さてその女性が処女であるかどうか、こんなに若い娘の貞操觀念の稀薄になつた時代であるから分かつたものではない。

私は、歸りの市電の中で、心あたりの女性を順々に思い浮かべたが、どれもこれもその條件になつた女性はいなかつた。

私が全く思案にくれてゐた時、私の

頭にさつと電光のように閃めいたものがあつた。

「利根須磨子！」

そうだ、彼女は確か二十才で嫁入り前の箱入りだ。だが、彼女と私とは決し、親しい間柄で、ないのだ。

たゞ、彼女が私の家の近所に住んでゐると云う關係で、道で会つた時などに軽く挨拶する程度なのだ。

でも、彼女を差し置いてこの適任者は他に居そうにもない。

そこで私は、勝手に適任者を彼女と決めてしまつた。さて、そこまでは決まつたとしても、これから後が大変だ。

まさか彼女に、あなたのオシッコを下さいなんて言えたものではない。そ



貴田川

晴緒作

三郎画

んなことを言えば、淑女に対して失禮なばかりでなく、侮辱することになるそれに、私が氣狂いか馬鹿扱いにされんとも限らない。私だつて、彼女以上に恥しい。

それかと云つて、夜彼女の便所の裏口に忍び込み、彼女が排泄しに来る時を待つて、汲取口から手を差し出して容器にそれを受けると云う手があるが、そんなこと紳士のやるべき行爲ではなさそうだ。

私は、こゝで又全く途方にくれてしまつた。だが、然し事態は急を告げているのだ。

一刻の猶餘も與えられない。

——いつそのこと、彼女に会つてすべての事情をおちまけてしまおうか。そうすれば、彼女だつて嫌とは言わないだろう。それに、彼女も、こんな話恥しいから、両親や他の人にも口外しないだろう。えゝい、一か八かあたつて碎ける——

私は、遂に決心したのである。恥も何もかも捨てて。

人間いざとなると何でも出来るものらしい。フダンあまり心臓の強い方ではない私も、こう決心するともう矢もたてもたまらなかつた。

そうなると、のろのろ走る市電が齒痒ゆくてならすばたばたと足踏みしていた。

刈田の喜ぶ顔が、眼の前に散らつて仲々はなれなかつた。

「こう云う事情ですからお願いです。」

四、

友人の命を助けると思つて。僕だつて、恥を知つた人間です。あなたにこんなことをと思つて、何度ためらつたか知りません。でも、今の僕にはその友人の事で一ぱいなんです。お願いですこの通りです」

平身低頭して拜み倒さんばかりの私の態度を他の人が見たら滑稽さのあまり吹き出してしまふかも知れない。だが私にとつて見れば悲痛そのものであつた。

私の額から、腋の下から、冷汗がたらたら流れた。そして、ぐつとにぎりしめた私のにぎりこぶしにも汗がびつしよりたまつていた。彼女は。私が話している間中、その美しい眉一つ動かさずじつと耳を傾けていたが、やがてその可愛らしい櫻貝のような唇がおもむろに開いて、

「で、あのオ、何かいれものをお持ちなんでございますか」

と、さすが、須磨子嬢は恥しそうに頬をぼろろと染めて小聲でそう言つた。

私は内心はびくびくと彼女の反應を見守つていたのであるが、ここまでくればもうしたためものである。成功疑いなしである。

「はあ、こゝに持参しています」

私は、喜びに聲を震わしながら、ふところから紙に包んだ容器を取出してそつと彼女の前に差し出した。

彼女は、それを受取ると、

「ではしばらくお待ちになつて」

と言つて立ち上ると靜かに部屋を出て行つた。

私は、ほつとして煙草を喰え

るとマツチをすつた。

しばらくすると、彼女はさき程の紙に包んだ容器をもつて入つて來た。

私は、恐る恐る受取ると、まだほんのりと温かさが容器と包み紙を通して感じられた。

歸りがけた須磨子嬢は、

「この事は誰にも口外しないで下さいね」

と、言つた。

「それはもう」

私は、幾遍も幾遍も禮を言つて、彼女の家を辭したのである。

家に歸ると、私はしばらくその須磨子嬢の美しいからだから出た透明の液体に見入つていたが、それを容器ごと

電熱器にかけて刈田の所から持つて來た高貴藥(?)をその中にほり込んでかき混ぜた。

やがて、液体は温氣をたててぐつぐつと煮え立ち始めた。そして、三十分もたつたと思われる頃、その液体は眞赤に変色したのである。これには、私もいささか驚いてしまつたのであるが科學的に考えれば、その液体は酸性であるからその藥の成分の何かと化學的な變化を起したのではないかと思う。

これを何も知らない人が見たら、神様の御利益があらたかなのだと、余計にもつたいながるかも知れない。



かくして薬がすっかり出来ると、それを壇につめて、病床で首を長くして待つてゐる刈田の許へ駆けつけたのである。

五、

刈田の喜
かつた。

び方は一通りではな

私は、彼に頼まれ
て嫌な思いをした
甲斐があつたと
つくづく思つ
た。

私は、早速、壇に入つたその赤い薬を、茶碗に移しかえて、刈田の口許までもつて行つてやつた。
刈田は、それを一気にぐつと飲み干した。

私は、その薬の効目如何にと、じつと息を殺して彼の顔を見つめた。

しばらくすると、彼の額から、鼻の頭から、汗が流れ始めたではないか——すごい効目だ！

私は、思わず目をみはつた。熱病は汗を出せば熱がとれて治ると云う事を今まで経験して知つていたから

だとすると、今度は彼はむくむくとくらだを起して、きよきよとまわりを見廻わし始めたのであるその眼の凄

いこと、フダンの刈田と違つた何か別人のような感じを私させたのだ。

——こりや一体どうしたことか私は、眼をこすつた。その中に、彼の

視線が私のとカチリとぶつかつた。すると、彼はにたりと笑つたのだ。何と云ういやらしい氣味の悪い笑。それが、にぶ電燈の光をあびて、一段と凄みと不氣味さを増していたのだ。

私は思わず後ずさりした。

「ヒヒヒヒヒ、」

彼は、齒をむき出したかと思うと、次の瞬間、物凄しい勢で私につかみかかつて來た。

身をかわしたがおそかつた。彼は、私のからだにむしやぶりとくつくと、からだをくねらし始めたのである。まさに色氣狂いである。

「ヒヤアツ助けて！」

私は、悲鳴を上げて、必死になつて彼のからだをふりほどいた。

すると彼は、がばつとはね起き、障子を蹴倒すようにして部屋の外へ出ると、荒々しく階段を下りて行つたのである。

私は、何が何だかさつぱり分からず、まるで狐にでもつままれたようにに疊の上にへたばつていたが、はつと思ひあたることがあつた。

それは、あの老婆が、もし処女でなつたなら大変な事になりますぞと、刈田に言つた言葉を思い出したからである。

——まさか、あの須磨子嬢に限つて、處女でないなんて。

と、一度は否定したが、この薬のすごい効き方を目のあたりに見せつけられた今、どうしても須磨子嬢が處女でないと思うより外に仕方がなかつた。

その時であつた。「キヤーツ！」

表の方から、絹を裂くような女の悲鳴が聞えて來た。

——さては刈田の奴が、

私は、すぐさま階段をかけ下りて、家の外へ出た。

するとこれは又どうしたことだろう家の前の道路で、刈田が一人の婦人をとらまえ、無理矢理につかみかかつてゐるのだ。

私は飛鳥のように二人の間に飛び込んでひきはなした。

六、

刈田は、完全に発狂したのである。

それも、色情性発狂とか云う、厄介な病名を頂戴したのである。

彼は、直ちに脳病院に送られた。

私が今から思うに、あの時使用した尿が、處女であらうがなからうがそんなことは少しも問題ではなく、要はあの高貴薬とか稱する粉末の中に、人間の脳細胞を破壊し、性慾を昂進させるような成分がまじつていたのでないかと思うのである。

だから、利根須磨子嬢は、私が始めに思つた通り立派に處女であつたに違いない。

いづれにせよ、私があの時刈田の反對を押切つて醫者を呼んでいたらこんなことには、ならなかつたであらうから、私はその責任を大いに感じてゐるのである。

幸いにも、刈田はその後着々と快方に向いつゝあると云う事だ。(完)

今はむかし

本朝いろものづなり集

宜愁院 春高



〔第一話〕 若夫婦桃色のゆめ

今は昔。京の宮家に仕える男が、年貢米を徴集するため上野の國へ下つた。永らく旅をした舉句帰途、美濃の不破の関に宿をとつた。
彼には京に、まだ新婚間のない若い妻があつたが、旅に出る前頃より、どうも、その素振りに不思議なことがあつたので、彼はふとその事を思い出した。
すると急に新妻のことが、堪らなくなつてかしくなつてきた。
「今頃はどうしているだろうか？」
彼は胸が切なく疼くまでに彼女の事を思つた。そして

夜が明けたなら、何物をおいて大急ぎで歸らうと心にきめた。そして宿の一部屋にそのまゝ寝入つてしまつた。

暫らく、まどろむと、向うから灯を携えた一人の青年が女をつれてやつてきた。やがて、彼の寝ている部屋の傍へ來たのを見ると、その女というのは、彼が京へ置いてきた氣のもめる新妻ではないか。
彼はあつと驚いた。どうした事だろう。不思議なことがだ惱ましい想像が彼を捕えた。
二人は彼の隣の部屋に泊つた。壁一重である。彼は壁の穴から隣の部屋を覗いた見ると青年と新妻とは、寄り添つて並んで、鍋をとり寄せると、直ぐ飯の用意をして一緒に食べ始めた。
彼の心は波のように騒いだ

そうだ、俺が旅に出ている間に、この若僧奴と夫婦の語らいをしたに相違ない。——彼はこう考へて尙も覗いて

ると、やがて食事の終つた二人は一つ床に臥せたが、間もなく夫の彼にとつては、見るに堪えないことが、壁一重へだてた彼方に始められた。
激怒した彼は、物も言わずに躍り込んでみると、火もななく男女二人の姿も見えない。
「これは一場の夢であつた。」
「あゝ夢であつてよかつたなア」
と彼はホツとしたが、次の瞬間、烈しい不安が彼をさいなんだ。彼は夜の明けけるのを待ちかねて、先を急いだ、夜になつても宿もとらずに、歩きに歩いて、その足で家へ飛

び込んでみると、新妻は何のかわりもなく、にこやかに彼を迎えた。

「妾は、昨夜變な夢を見ました。妾の所へ見たこともない男が一人やつてきて、何処とも知らぬ所へ妾をつれて行つたのです。夜でした。灯をともしてある空屋へ入つて、飯を炊いて男と二人で食べた後二人で寝た所へ突然あなたが現れなされたので、男も妾も騒ぎ出したと思うと眼がさめました。不思議なこともあるものだ、思つていましたらこうして、あなたが戻りになりました」
「ほうお」
彼は思わず頭をひねつた。
「実は俺も、そのような夢を見て、夜を日に繼いで歸つて來たのだ」
二人は、不思議なことがあつたものだなアと感心した。

〔第二話〕

好色破戒僧の死

今は昔。多くの犬を飼つておき、それを連れて山野に、鹿や猪などを噛みとらせて家業としてゐる者があつた。世の人には、こうした者を犬山と呼んでいた。
或る日、いつものように犬をつれて山へ分け入つた。食

物を携えて暫く山で暮すときもあつたが、その時も、やはり二三日は戻らなかつた。
家には、まだ年若い妻が一人留守番をしていた。
その時、一人の坊さんが軒に立つて、おごそかに食物を乞うた。見ると、水もしたたるばかりの端麗な美僧である。

妻は安心して、坊さんを家の中へ招いて、物を與えた、すると坊さんは、嚴然として「私は決して乞食ではありません、佛の道を修業しながら諸國をさまよい歩いてゐる者です、丁度食がなくなつたので、御無心したままでのこと。」

ときびしく言つた。これを聞いて若い妻は愈々その坊さんを信じて尊敬した。やがて坊さんは又言つた。
「私はその外に、陰陽の方も知つていますし、靈驗あらたかな祭事をも行つています」
「祭事と申しますと、それをすれば、どんな事になるのぞございますか」
「そうです、僧侶が精進し、且ツ賢なる者であれば、身に病なく、自ら財産が出来、神の崇りを受けるような事なく夫婦の仲むつまじく、萬事がよい方に向くようになるものです。」

「その祭事には何にがいりましようか」
 「いや別に物いりとは、無い。幣の料に紙少し、米少し菓子、油などが入用なだけです」
 「ただそれだけで済むものなら、一度していただけないでしようか」
 「お易いことです」
 坊さんは早速、女を裸にして沐浴させて精進を始めた。そして言つた。
 「この祭りは、淨らかな深山へ行つて只一人行かねばなりません」
 間もなく祭の道具をとり揃え、二人連れ立つて深山へ入つて、幡を立て並べ、御洗米菓子など、仰々しく飾り立て、祭文を誦した。祭事は終つた。すつかり満足した女は、
 「まあ妾は、夫の留守のうちに、何んというよい事をしたのだらう」
 と喜んで歸りかけた。彼女は若くて、相当に美しかった。それに色白の小肥りで肉感的な女であつた。坊さんは彼の後姿を見ているうちに、心の中に淫慾の生ずるのをどうすることも出来なかつた。彼は黙つて女の手を握つた。「奥さん」女は驚いて彼を見た。

「私にとつては未だ習つたことのない事ですけれども、あなたを見て、佛の思召し給わぬものを知つたのです、私の本意を遂げさせて下さい。」
 女は恐れおののいて逃げようとする、坊さんは刀を抜いて言つた。
 「もし私の心に従わぬのなら、これであなたを殺すだけだ。」
 と脅迫した。人氣もない山の奥だつた。女はどうする事も出来ず、藪の中へ引きすり込まれてしまつた。

こちらは女の亭主である。彼は仕事ですんで、犬どもを連れて家へ戻りつゝあつた。そして丁度その藪の前を通つた。と藪の中で、ごそこそと物音がして、何物かが動いている氣配がしたので、さしては鹿奴かと、大きな雁矢をつがえて、動く所へ、さつと射かけた。
 「あッ」という悲鳴があがつた。それは正しく人間の聲であつた。
 驚愕して彼が藪の中へかけ込んで、草をかきわけてみると、一人の法師が背中を射られて死んでいるのを発見した。彼は法師を引きづり下した

そして見ると何んたる事ぞ、そこには自分の妻を発見した。夢のような氣がした。どうしても眞実とは思えなかつた。
 幸に、彼女は無事であつた。そして問われるまゝに、事の仔細を詳しく物語つた。
 男は傍を見た。
 なる程、そこには、仰々しく幣や御供え物等があつた。法師の屍は谷底へ投げ込み、新妻をつれて家へ歸つた。

【第二話】

死屍と契つた侍

今は昔。一人の貧弱な侍があつた。永い間貧乏の仕通しで仕官するすべもなく、不遇で過してきた。ところが、彼の友人が、某國の守になつたという事を聞き込んだので、早速出かけてみた。
 その友人は快く会つてくれた。そして、
 「仕官もせずに、そうして毎日、京でぶら／＼して居るよりは、俺の任國に行つてみたらどうか。大した世話が出来なくとも、出来るだけのことにしてあげよう、どうだ、一緒に京を離れてみては」
 と親切に誘つてくれたので、彼にとつて渡りに舟である。彼は「是非お願いしま

す」と頼んで歸つた。

彼には數年來、通い馴染んだ妻があつた。彼女はまた年も若く、相當な美貌の所有者であつた。心持ちもよく可愛らしかつたので、自分の貧乏をも顧みず、通い住んでいたのであつたが、遠國へ下るといふことになる、その女を弊履のように棄てしまつた。
 愈々旅に立つと言ふことになつて旅行するの都合のよい他の女を妻にして、その女と共に京を出発してしまつた。

そうして安穩な月日を過している、彼の心の奥底に思ひ出されて来るのは、京に只一人黙つて放任してきた、もと妻のことであつた。
 もとより嫌いで捨て、來た女ではなかつた。思ひ出せば切ないまでに、なつかしい女であつた。思えば思うほど、戀しさは激しくなつてくるばかりだつた。
 「逢いたい。あの女に逢いたい」
 こうした前の妻に対する狂おしいばかりの戀慕はいやまさるばかりであつた。それは次第に苦痛なばかりに、彼の心を悶えしめるのだつた。
 月日はどし／＼と過ぎた。友人の任期も終りに近づいた。





ので、一緒に京へ上ることに
なつた、彼の心は、京へ京へ
とはやつた。
「俺という男は、何んという
男だ。あの氣立のよい女を、
何の理由もなしに棄てしま
つた。俺は京へ着いたら直ぐ
捨てゝ來た妻を訪ねて、又も
との妻にしよう」
彼は自分の心に固く誓つ
た。京へ着くやいなや、その
足でもとの妻の家を訪ねた。
それは、前見た頃とはまる
で違つて、すっかり荒れ朽ち
てしまつていた。草はぼう
／＼と足の踏み場もない位に
生い茂つて、人の住んでい
る氣配さえもないほどの荒れ様
だつた。
彼はこの有様を見て、いよ

／＼物悲しく自責の念にから
れて心が痛かつた。
九月十日頃の事であつたの
で、月は明るかつた。草の葉
に置いた露も冷々と彼の着物
の裾を濡らした。扉を開いて
つか／＼と入つて見ると、何
時彼女がいた所に、今は只
一人でしよんぼりと坐つてい
た。
入つて來た彼を見ると、少
しも怨むような色も見せず、
さも嬉しそうにして言つた。
「まあ、あなた、今日此方へ
お戻りになりましたの、あた
し淋しかつたわ」
男は、遠國へ行つていた
間、自分の抱いていた心持を
語つた。
「任地から持つて歸つた物も

今日明日の中に此処へ取り寄
せよう、従者も呼ぼう、今夜
は只此の事を話そうと思つ
て、眞ッ先にやつて來たの
だ」
彼女は、彼の言葉に喜んで
今迄別れていた永い間の悲し
かつた生活等を語り合つてい
る中に夜も更けてしまつたの
で、ではもう寝ることによ
うと、二人は堅く手を携えて
南向きの部屋へ移つた。
「こゝには、外に誰もいない
のか」
「はい、人らしい暮しも出來
ませんでしたので、召使など
は一人もごさいません」
二人は終夜語り明かして、
しら／＼と夜の明け初める頃
になつてようやく寝入つた。

訊ねた。
「このお隣りの人は今何処に
おりますか」
「おゝ、お隣りの人ですか、
何んでも、女が一人居りまし
たが、四五年通つていた夫奴
が薄情にも棄てゝ何処かへ行
つてしまつたので、歎き悲し
み、とう／＼病氣になつてし
まいましたが、誰一人介抱す
る人もないので、此の夏死ん
でしまひました。葬式を出す
人もないので、そのまゝ屍体
は残つてゐるでしよう」
何も知らぬ人は、こう話し
てくれた。

「おや？」と彼は不審に思ひ
ながらも、知らず知らず、夜
通しその讀經の聲を聞きすま
した。
やがて夜が明けかけた。
彼は聲のする方へと辿つて
近づいて行つた。そしてそ
直ぐ近くまで着いた時、地面
より少し高いものが、ぼんや
りと黒く見えた。
「何んだらうか？」
と、尙もよく見えているうち
に、夜はすっかりと明けはな
れた。それは苔むして蔓草が
一杯まといつてゐる一個の岩で
あつた。
「一体、お經を誦してゐるの
は何方だらう、若しかすると
この岩に仙人がいて讀經して
ゐるのかも知れない」
こう思うと、岩そのもの
が、何とはなしに崇巖に見え
て來たので、彼は足をとめ
て、じつとその岩を見守つて
いた。
やゝ暫くそゝ岩を見つめて
いると、急に自らグラ／＼と
動き出して、だん／＼高くな
り見る間に人の形となつて走
り出した。
見ればそれは齡六十ばかり
の老尼であつた。
蔓草はみなブツ／＼に切れ
て終つていた。年若い坊さん
は愕然としながらも
「どうした事です？」

と訊ねると老尼は悲痛な顔をして言った。

「妾は、永年此處にこうしていた者ですが、恐らく愛慾の念の起つたことは、只の一度もありませんでした。それに、さつき、あなたが来られたのを見て、美しい男だなとふと考えたのです。すると忽ちのうちに、元の姿に戻つてしまいました。

人の身はなんと、はかないものでしょう。これから、今迄よりはもつと、永い修業をしなければ、もとの岩になれますまい」

と泣きながら言い終ると、そのまゝ山の奥さして入つて行つてしまつた。

〔第五話〕

人妻に化けた狐

今は昔、京に一人の卑賤な男があつた。晝頃用事が出来て大路へ出かけた妻は中々戻つて来なかつた。

日が暮れてもう暗くなりかけたので亭主はそろ／＼心配になつてきた。

「一体どうしたのだらう、大分遅い何か変つた事があつたのじやないかしら？」

と考えている所へ妻が戻つて来た。

「余り晩いのでどうしたのかと心配していた」

と聲をかけていると、今度は、姿と言ひ、聲と言ひ。顔形といい、少しも違わぬもう一人の女が入つて来たではないか。一時に二人の妻が出来たのだから、彼はすつかりびつくりしてしまつた。

併し、これは勿論考ふるまでもなくどちらか一人が魔性のものに相違ないのである。だがさて、どちらが本物の妻であるかといふことになる。と、迷わざるを得なかつた、横から見ても縦から見ても寸分違わないのである。彼は心を静めて二人の女を仔細に観察した。

「そうだ」と彼は言つた。

「後から入つた奴こそ狐に違いない」

彼は直ちに刀を抜いて、後から入つてきた妻に走り寄つて斬ろうとすると、

「あなたは、何をなさいますのです。現在の妻を殺そうとなさるのですか」

と泣き聲をあげて責め立てるので、次には前に入つてきた妻に走りかゝると、この方の女は又、手を合せて泣きわめくので、亭主はほと／＼困り果ててしまつた。

あちらかこちらかと迷ひぬ

いた擧句、どうしても前に入つて来た女の方が怪しい氣が強かったので、その女を引ッ捕えていると、不意に怪しいまでに、臭い尻をひりかけた。

鼻もまがるようなその臭さ

「これは堪まらぬ」

と思わず捕えていた手を離れた隙に、忽ち狐の正体を現して、開けたまゝになつていた戸口から表通りへ飛び出して、こん／＼と鳴きながら逃げて行つてしまつた。

男は地団駄ふんで口惜しがつたが、もうどうする事も出来なかつた。

考えてみると、これは正しくこの男の失敗であつた。何

故、彼は最初から二人を縛つておかなかつたか。縛つておきさえすれば、むざ／＼逃げられはしなかつたらうに、さても運のよい狐であつた。

第六話

蛇と婚した女

今は昔。河内國讃良の郡、馬の甘郷に住む者があつた。

別に身分の尊い者でもなく下賤の姓ではあつたが、金をどつさり持つていた。

その家に一人の女の子があつた。四月の頃、養蠶の桑葉を採るために、大きな桑の木にのぼつていて、大きな蛇が出て来て、その女の登つて

いる桑の木のもとに巻きついてしまつた。

その木は丁度道傍にあつたので、通りの人がそれを見付けて、その女に知らせた。驚いて見下すと、成程大きな蛇である。すつかり仰天して、あわてゝ木から飛び下りると蛇は忽ちからまりついて、これと嫁いでしまつたので、女は失神して木の下に臥してしまつた。

父母はこれを見て悲しみ直ちに醫師を招いた。それは名手の譽高い人であつたが、先づ女を家につれ帰つて庭におくように命じ、更に稻藁三束を焼かせた。

次には湯に合せて汁三斗をとり、これを二斗に煎じつめ猪の毛十把を汁に合せ、女の頭を下に足を釣つてさげ、その汁を入れた。やがて一斗ばかり入れると、蛇はようやく離れて這つて逃げようとするのを、人々に打ち殺して棄ててしまつた。

其の時、蛇の子がこつて蝦蟇の子の如く、猪の毛がそれに突きさゝつて、五升ばかり出たが、出終ると女は物心ついて物を言つたので父母が、「どうだつた？」と訊ねると「まるで夢を見ているようでした」と女は答えた。

(おわり)



童貞を弄ぶ貴婦人

北川春男

明石三平 絵

「夕刊一部頂戴な」

黒つぽいコートに狐の襟巻、アツプヘアーのその女はどう見ても上流家庭の奥様だ。

女は、小脇に抱えた黒革のハンドバックの留金をパチンと開けると、手の切れるような百円札を一枚取出して、「今こまかいのがないんだけど、これとつて頂戴な」と言つて差し出した。白魚のようにすんなりと伸びた女の指に、ダイヤがきらりと光つた。

「お釣りがないんですけど」

芳太郎は当惑した。

その横で、妹の美津子が錢箱の小錢をかき集めていたが、まだそれだけでも集つていなかった。

「いゝのよ。いゝのよ。心配しなくつたつて、お酌りはあんた達の御小使いになさいな」

「いえ、それはいけません」

だが、その時にはもう女は、人ごみの中へまじつて階段をのぼつていた。

此処は、地下鐵梅田構内。電車が、プラットフォームに滑り込んで来る度に、どつと出札口からあふれ出てくる通勤帰りの人達で雑踏を極めていく。芳太郎は、見もしないお客様

から、夕刊一部の代金に渡された百円札を手に持ったまま、狐にでもつままされたように、ぼんやり突つ立つていたが何思つたか、

「美津子、このお金返してくるよ」

「ウン、それがいいわ」

芳太郎は、ばたばたと駆け出した。

これが、そもそも芳太郎の運命を左右する発端であつたとは誰が知ろう。

階段を駆け昇つて、外へ出た

あたりには、すでに夕闇が垂れ込めていた。女は、阪急百貨店の横を曲がる所だつた。

芳太郎は、人の波をかき分けて走つた。

二

「おばさん！」

芳太郎は、ふうふう息を切らしながら、女を呼びとめた。

「あら？」

女は、つと立ちどまると、くるつと振り返つた。

「おばさん、このお金返すよ。夕刊一部のお金位、今度ついでの時何時でもいゝんだよ」

「いゝのよ、これはあんたに上げたのよ。」

「そんなことしてもらつたら、僕困るよ。折角こうして持つて来たんだから」

「そう、じゃ仕方ないわ。戴いとくわ。」

女は、そう言つて芳太郎から百円札を受取つてハンドバックにしまふと、

「あんた、あたしが思つてた通り感心な子ね。フフ、。そのかわり今から、何か御馳走してあげましょうか」

「いゝよ、いそがしいから。」

「そんなこと言うもんじやないわ。さあ行きましょう」

女は、芳太郎の腕をとつて歩き出した。

芳太郎は、譯のわからないままに、女に引つ張られるようにして従つた。大通りをそれて、裏通りに入つた。

軒を競うようにぎつしり並んだ家々のあちこちから、耳をつんざくような男女のざわめきが聞え、すり切れたレコードが、がなり立てるジャズや流行歌が流れていた。

道路は、ネオンに反射して、青や赤とりどりの色彩に染まり、行き交う人々の影がゆらゆらとゆれている。

「さあ來ましたよ」

女は、芳太郎の手をとつて、青白いネオンの光で、ホテル・レインボと形造られた家の玄関へ導き入れた。

「おかえりなさい」

いそいそと出て來た女中

が、うす汚い

芳太郎の方を

ちらつと見て

から、女に丁寧

に挨拶した

階段をのぼつて、突きあたりの右側の部屋へ入るとむつとするような暖かさだつた。

「おばさん、この部屋ですつと泊つて

るの？、随分立派な部屋だなあ」

「そうよ。こゝに泊まつてるのよ。でも、おばさんなんて言つちや駄目よ。あたしだつてまだ若いんだから。これからは、豊子おねえさんつて言うのよ。よくつて？」

「うん」

「所で坊やおいくつ？」

豊子は、じりじりと芳太郎にからだをすり寄せ、芳太郎のぶうつとふくれ上つた頬を可愛いくてならないと云つて風に、いたづらつぽく人差指の先で突つき、くすりと笑いながら言つた。

「十八だよ。坊やじやないよ。もう青年さ。芳太郎つて呼んでくれよ。」

「あら、悪るかつたわねえ、じや芳太

郎さん、でもやつぱり変ねえ。坊やの方がいいわ、おねえさんから見ると、あんたは坊やだわ、ホホ、ハハ、ハハ、」

豊子は、そう言つたかと思つと、ふくよかな兩腕を芳太郎の頸にまきつけ、ぎゅつと抱きしめて、頬づりした。

むせかえるような女の体臭、やわらかい肌、

芳太郎はわけもわからない興奮と、不安と恐怖を覺えて、ガタガタとからだを震わした。

「あら、坊や、髪の毛を分けた坊や、ふるえてゐるのね。寒いのか？それともうれしいのか？」

坊やだつて、家へ帰れば一人でいたづらしてゐるでしょ。おねえさん、ちゃんと知つてゐるわよ」

豊子は、抱きしめた手をゆるめて、

芳太郎の顔をじつとのぞき込みながら言つた。

芳太郎は、唇をわなわな震わし、物を言うことも出来なかつた。

「坊やはほんとにウブなのね。おねえさん坊やみたいなのよ。ひと大好きなのよ。」

と前よりも一層強くぎゅつと、力一ぱい抱きしめた。

「どう、暖かでしょ」

芳太郎には、豊子がそう言つた

言葉も聞えなかつた。そして、妹のことも誰のことも、彼の脳裡から消え去つてしまつてゐた。

やがて、豊子は抱きかゝえていた腕をゆつくりと解き放した。

芳太郎は、はつとして我に帰るとばかり眼を開いてはづかしそうに、そつ豊子の方を見た。

豊子は、にんまりと笑つた。

はだけた豊子の胸から、つんと顔を出してゐる乳房が、容赦なく芳太郎の眼を射つた。

まだ女に接したことのない芳太郎の肌は、白く清潔で美しかつた。

豊子の眼が、妖しく燃えて、喰い入るようにじつと芳太郎を見下ろした。

豊子の喉を、ゴクンと音を立てて、生唾が通つて行つた。

好色そうならうすら笑いが、かすかに女の唇にのぼつた。

不気味な沈黙が続いた。

然し、それは嵐の前の静けさであつた。

花瓶の花が一輪、ぽとりと落ちて床に轉つて、花瓣を散らした。

三

「あーら、坊や意氣地がないのね。駄目じゃないの。しつかりなさいよ」

豊子は、煙草を咬え、と、器用なき手付でライターを点した。

紫色の煙がぼうつと昇つた。

「坊や、今から御馳走してあげましょうね」

豊子は、手をのばして卓上の受話器を掴んだ。

「いゝよ。僕もう帰るよ。」

芳太郎は、急にむくむくと起き上つた。

「いゝじゃないの。ゆつくりしてつたら。泊つてつてもいいのよ。ねえ、何がおいしい物を食べましょうよ」

「妹が待つてゐるから帰るよ」

「そう、本当に帰るの、じゃあ仕方ないわ。それじゃあねえ、あしたの晩に又いらつしやいな。おねえさん、ここで待つてゐるから」

芳太郎は、返事もせず立ち上つて、ふらふらとドアの方へ歩み寄つた。

「ちよつと待つて」

豊子は、ハンドバックの中から五、六枚の百円札をつかみ出すと、無理矢理に芳太郎の手に、にぎらせた。

「明日きつといらつしやいよ。御馳走を並べて待つてゐるから」

芳太郎は、逃げるようにして外へ出た。

冷めたい夜風がさつと吹きつけた。とぼとぼと歩いた。どこをどう行つたのか彼にも分からなかつた。あまりにも早く知らされた大人の世界——それは、若い芳太郎にとつてはあまりにも大きな衝激であつた。歩いてゐる中に、豊子のあでやかな笑顔が、びんと突張つた乳房が、むつちりした腰のあたりが、幻のようになつて彼の目前に現われては消えて行つた。

——明日の晩又いらつしやいね。すぐ耳のそばで聲がする。

何時の間にか、地下鐵梅田の階段を降りていた。

「兄ちゃん！」

妹の美津子が、ばたばたと駆け寄つて來た。

「おそかつたわねえ、あたい随分心配してたのよ。どこへ行つてたの。もう新聞、みんな賣つてしまつたし、さつきからずつと待つてたのよ。どうしてたのよ。ねえ、ねえどうしたの、顔色が眞青よ」

「どうもこうもないさ」

芳太郎は、ぼそりとそれだけ言つた。

「ねえ、何かあつたのね。言つて！」

「うるさい！」

彼は、はき出すように言い放た。彼が妹に亂暴な口を聞いた事は今までになかつた。

美津子は、兄のあまりの烈しさに、しくしくと泣き出した。

ち兼ねて、いそいそと昨夜のホテル・レインボー"に行つた。「やつぱり來てくれたのね」豊子の喜び方は、一通りではなかつた。

それから毎夜、芳太郎は、胸をおどらせながら豊子のもとへ行くようになった。

豊子の狂態は、夜毎に強烈になつて行つた。そんなことが、一週間ばかりたつた或る晩、芳太郎が、いつものようにあたりがうす暗くなるや、ホテル・レインボー"に掛けると、豊子の部屋に錠が下りていた。

不審に思つて女中に尋ねると、「奥さんなら、もうこゝにはおいでになりませんよ。お発ちになつたのよ」女中は面倒臭そうに言つた。

「えゝつ？、居ない

つて！どこ

へ行つたの？」

「そんなこと知らないわ」

女中は、そう言ふとさつさと奥へ入つてしまつた

全然豫期しないことだつた昨夜、豊子はそんなこと少しも口に出さなかつた。そればかりか明日又いらつしやいねと確かに言つた筈だつた。

芳太郎は、あまのことに、氣が遠くなつてしまひそうだつた。

芳太郎は、夜の裏街を、闇市を豊子の白い肉体を求めて、野良犬のようろうつき廻つた。

氣が狂いそうだつた。妹の所へも、家にも歸らなかつた。彼の足は、自然と紅燈の巷へ向くのであつた。

陰氣臭い、じめじめした家々には赤い灯がともり青い灯がともつていた。たゞれるような脂粉の香りが、芳太郎に肉体の郷愁をそる。

彼は、とある店の前で、一人の女に腕をつかまれた。白い小柄な顔だつた。

四

その翌日、芳太郎は夜になるのを待



「ねえ、色男、遊んでよ……」

芳太郎は、女に引き入れられるまゝ

やみよ つじぎり
闇夜の辻斬

浅香耕策

本郷はお茶の水の濠川端。日はもうトツブリと暮れてしまつて、折柄の闇夜に、あたりは物凄いはどシンとして、天狗に鼻をつままれそうな夜であつた。

この時、橋の袂にこんもり茂つた柳の蔭から、ヌツと姿を現した一人の男がある。闇をすかして、よく見ると、黒装束に身を固め、袴の股立ちをキリ、と取つた大兵肥満の有村治左衛門である。有村は、薩摩の藩中に勇名かくれも無き猛者。その有村が、何のための忍び姿であろう、

「今夜に限つて、人ツ子一人通らぬとは、どうしたわけか」

と、獨り言、すると、物悲しげな按摩の笛が、ピーピツと闇を繞つて聴えて來た。

「来るぞ、ハ、ア此方へ来るな、待てば甘露の雨が降るとはよく言うたものだ。が待てよ。いくら相手が按摩でも、こう自分の姿をむき出しては悪かろう。どれ暫くの辛棒じや」

咳きながら、柳のかげへそつとかくれた。此方は按摩、もとより此んな事があるうとは夢にも知らない、元町の方から濠端づたいにお茶の水橋にさしかゝつた。

すると、柳のかげにかくれていた有村は按摩を一間ばかり先へ、やりすごしておいてその背後から忍び足、有村の右手は大刀の柄を握っている。いうまでもなく、この按摩を試し斬りにするつもり。

「オ、寒むツ。あゝ今夜も又、くたびれ損かなア、宵から流して歩いてゐるのに、まだ一度も呼ばれない。何んさいう情ないことだらう。家には子供が、空いた腹をかゝえて待つていよう。あゝ浮世がしみ／＼いやになつた。ピーピツ」

按摩の泣言、有村もそぞろに憐れを催して

「可愛相じや、こんな按摩を斬らんでも、まだ他に斬るべき者があろう。まゝよ助けてやれ」

有村が身を引くと、按摩の笛は次第次第に遠くなつて、闇の彼方へ消えて行く。

「折角出逢つたと思えば、不憫な按摩、こりや、どうも今夜は間が悪いぞ。もう夜も大分更けてしまつた。これではとても、見込がない。残念ながら又明晩……おッ誰か來た」

と、柳のかげに身をかくし、息を殺して待ち受け、見ると、湯島の方から、小田原提灯がブラリ／＼、

「ハ、ア、いよ／＼來たな。今度こそ逃がすまいぞ」

かくとは知らず、小田原提灯あつちへブラリ、こつちへブラリ／＼。

「はアてな、提灯がひどく揺れるぞ。この夜更けに……全体何者であらう？」

不思議に思つて、窺えば、年の頃は五十に近く、人品卑しからぬ武士である。が、大分酩酊してい

血族結婚の悲哀

不倫行爲から白子三人まで生んだ実話



私の生れ故郷四國の片田舎に、通稱鶴さんという鍛冶屋さんがありました。此の人の兩親も私は幼少の頃よく知つた仲でしたが、何一つ常の人と異つた事のない人達で、二人共、余程高齡迄生きていました。

此の夫婦の中に四人の子供がありました。一番の總領が女で、至極健康な、どつちかという人並以上の美貌の娘で、二十才頃に隣村へ縁付きました。

次は長男の鶴さん。その次は次女のお徳さんという娘。末子も女で、二人共少しも常人と異らぬ娘で、体格も大きく、学校の成績もよく出来たようでしたが、末子の方は十才の頃、病氣に罹つて若死にしました。

鶴さんの家系は大体右に書いた通りですが、さて、此の家族の中で問題の中心となる者は長兄の鶴さんと、其の次の娘、つまり鶴

さんの直ぐ次のお徳さんの此の二人なんです。

鶴さんは若い時、鍛冶の火花が眼に飛び込んで眼球を傷け、

そのため失明して一方の眼球が醜く隆起していましたが、其の外には何一つ常人と異つたことはなく、毛髪も眞黒で、顔色もどちらかというとき黒い方でした。頭は上等とは言えませんが、勿論白痴とか言うのではなく、鍛冶の職業も熱心に勤んでいました。

次の妹のお徳さんも、何一つ当り前の人、異つた事はなく、ちよつと目立つ位の美人でした。何でも十八才頃には町内の若い衆との間に浮いた話もあつたようでした。

さて、何んという神様の物好きでしよう。此の兄と妹が人眼を避けて不倫の行

爲を繰り返す仲となりました。その發覺の端緒は、隣家の者の眼に、兄が妹を無闇に可愛がり、ちよつとでも妹が外出すると、兄が馬鹿に氣にして捜し歩くといつた事に注意したのが初めてでしたが、追々に兄妹ともに面の皮が厚くなつて人眼にも余るようになって参りました。

程なく妹は妊娠しました。申し忘れましたが、その時、兄は三十才、妹は二十四才だつたと覚えています、月満ちて産み落した子はどうでしよう。世にも珍しい白子でした。

白子というのは、西洋語



るものと見えて、ヒョロ／＼ヒョロ／＼千鳥足、左手は提灯、右手は扇子で調子をとっている。聲期々「船辨慶」を謡っている。そのあとを、そつとつけて行くのが、有村治左衛門、腰なる大刀ギラリと抜いて大上段にふりかぶり、呼吸をはかつて斬込もうとする、所が以外に、酔った武士には寸分の隙もない。で有村は、大刀をふりかぶつたまま、弾む息をば無理に押えて後をつけた。

やがて、十五六間ばかりも行つたかと思ふ頃、どこに隙を見つけたか、

「えいッ」

紫電一閃、酔った武士は眞ッ二つ、思いの外、勢い込んで斬込んだ有村が、クル／＼ツともんどり打って、五六間先へツシーン。

「おのれッ」

と叫びざま、起ち上ろうとする所を、扇子の先でビタリと押えて動かさない。押えられた有村が、跳ね起きようともがいている中に酔った武士は少しも騒ぐ色とてなく、悠々と「船辨慶」を謡いおさめて、さて、

「此の夜中、通行の妨げ致すは何者か、慮外者め」

「ウ、ム」

苦しそくに唸っている。

「ハ、ア、人並勝れて大きな身体を持ちながら、何てまア意氣地の無い奴じやろ。そのザマは何の事じや今夜に懲りて、以來きつと不心得を致すまいぞ、武士の情じや其方の顔だけは見ずに放してやるぞ、有難く思え」

さ言いながら、押えた扇子をヒョイとひいた。さすがの有村治左衛門も、この時ばかりは全く恐れ入つて、其の晩かぎりぶツつりと辻斬を止めてしまつた。

酔った武士とは誰あろう。當時、神田はお玉が池に北辰一刀流の道場を開いて、數多の門弟に劍の指南をしていた千葉周作である。

その夜は、小石川の水戸公に招かれて、十分に酒の馳走を受けての歸り道であつた。

で ALBINO と申し、むつかしく言うると先天性色素欠乏症と申しまして、皮膚の色素が生れつき欠乏した者でして、皮膚の色は氣味が悪いように白つぽく、髪の毛も、睫毛も無色で、眼球の中の虹彩も無色透明ですから、光りを遮るものがなく、羞明がひどい爲に、眼を開く事が出来ず絲のような細い眼をしているものですが兄妹の間の第一子はこの白子の女兒でした。

両親は初めの間こそ世間を憚つて余り外へは出さなかつたが、監視もいつか緩んで後には、可憐な白子の娘が、街路をうろ／＼していた姿をよく見受けたものでした。

この哀れな娘は十才迄生きていて死んでしまいましたが、その死因はよくわかりませんが、別に両親が殺したという様な噂もなかつたようでした。

第一の白子を生んだ翌々年、又もお徳は妊娠しましたが、分娩直後産殺したのを、間もなく検査されて死体検案をやつてみると、同じく純然たる先天性の白子の男兒でした。

いくら不具の兒だからと

て手を下して殺しては國法は有しません。醜き二人の兄妹は刑務所の臭い飯を喰う身となりましたが、割合に早く二三年で出獄して郷里へ歸つて参りました。

そして又もや第三回の妊娠をして産み落したのが純然たる白子でしたが、今度ははいよ／＼世間を憚つて二階から決しておろさぬようにしていたため隣家の者も滅多に姿を見かけなかつたが、たまに見た人の話に第一子と全く同じ白子の男の兒だつたという事です。

此の兒は四五才迄生きていて死んでしまいましたが村の噂では両親が食物を與えず餓死させたと言つていました。

それから後お徳は更に第四、と第五の男兒を産みましたが、終りの二人は、人と並と少しも異わぬ身体を持



主で頭も相当によく現に生存しています。もう二十才前後になつていまいしょう。部落の吉原雀は、末の二人の健康兒は、兄の兒ではなく、或る部落の青年と關係した産物だと喋り合つたという事です。勿論その眞偽は判然としませんが、女の捨て鉢からそんなことも有り得るようにも考えられぬこともありません。



「遊びにいらつしやいませ、お連れさまとアベックで。綺麗な敷布がしれました。花の刺繍が出来ました。青い青い海のような天井。そこが貴方さまと、お連れさまをお待ちしているのをごさいますのよ。どうぞお遊びにいらつしやいませ。」

これは手紙ではありません。野原がこう私達を誘っているのです、新緑は薫風にのつて来るといふ。電車でも、バスでも、タクシーでもかまいません。部外に出かけるには、お手々をつないでお出でなさいませ。と初夏のそよ風が言うのです。

「ねえ、行こうよ。野原は花が咲いていて風が涼しくていいよ。」

「いいでしようね。青い空が貴方の眼に映るだろうし、かなしい貴方の眼がもつともつと、やさしく妾を見るでしょう。いきましようよ。野原の花が妾の眼を赤く燃やすでしょうねえ。」

そこで若い恋人たちは郊外へ出るのです。

「行きましようよ。ねえ、みんな行くそうでございますわ。お互に年とりましたのねえ。行つて昔の結婚当時の様な氣持を拾つて来ましよう。」

こう奥様が旦那様を誘います。

こうして都会の近郊は、ランデブウで百花綻びるのです。

満々とした池の緑の丘陵の美しさ。葉櫻の樹蔭をさまよつて、萎んでいた心臓を風船玉のようにふくらませて大空をとばしてやろう。昔の楽しい数々をもう一度拾



空恋愛技巧

若原晴夫

つて甦ろう。こう言つた人々が郊外の野を彩るのです。さてさて、獨身者は憂鬱ですが———そう心配はいりませぬ。

「このわたしの御化粧を御覧なさいませ。このビチ／＼と生長した身体を御覧なさいませ。この服装の美しさを御覧なさいませ。そしてわたしが何を求めているか眼を御覧なさりませ。これは皆相手が欲しい示威なのでございますのよ。聲をかけて下さいまし、優しい言葉をねえ。」

こうした若い娘さんが逞しく發育した体を振つて歩くのです、だから獨身者も心配はいりませぬ。

そこで、これらの各種の場面の戀愛技巧を描いてみることにしましよう。

第一景

奇麗な月夜でした。お月さんが池を泳いでいました。二人の男女が池を眺めていました。ホテルから出て来たのでしよう。きつと男は釣りがうまかつたのです。

「あゝ釣竿があると、あのお月さんを池から釣りあげて、食べるんだがねえ。」

それは少しも不自然でありませんでした。女はうつとそれを見ました。だからついこんな唄を歌い出しました。

主は釣竿、わしあ池の鮎釣られながら面白い。女が綿々と唄う後から男はそつとよりそいました。チャボンと誰が池に石を投げたものがありました。

第二景

「目と言うものは妙なものですねえ」

と女が突然言いました。それは丘の櫻の木の下でのことでした。二人は手を握つていました。

「こうやつてたゞ見つめているだけで、どうしてこんなに心がわく／＼して来るのです。よう。まつたく不思議ですわね。」

「眼は心の鏡と言いますからね。」

「全くそうですわねえ」と女は言いました。だが突然びつくりした聲で叫びました。

「おやおや貴方の眼に大空やが映つていますわ。そして人影も。いけませんわ。いけませんわ。わたしの顔だけ映していたいのに。外のものは何一つ映しても不純ですわ」

「目をつぶりましようか」

「いゝえ。いゝわ、わたし笑えばいいわ。すると貴方の眼の中でわたしが笑いますの

よ。ほらほら笑い出しましたわ。いゝわねえ。きつと貴方の顔もわたしの眼に映つてゐるわ」

「貴女が僕の眼の中に住んで僕が貴女の眼の中に住んでゐるんですよ」

「そうですとも、そこですとも」と、女は昂奮して叫びました。

「わたしは夜になつて眼をつぶる時にはいつでもこう考えますのよ。この奇麗なまぶたで、貴方を保護しているのだと、そう思つて静かに伏せるの。貴方は私の眼の中に眠つてゐるのよ。眼だけがこうして、いつまでも一緒にゐるのですわ。外の何んだつて一緒にゐることは出来ませんわ。手だつて握つてゐるときだけ一緒にゐるし、觸れても直ぐ放れ放れなれになるし、どんなに強く結んだところだつても一時的で、すぐ二つになりますわ。だが眼はちやんと一緒にゐますものねえ。ほんとうに不思議ですわ。」

こう言つて女は又微笑みかけました。男も微笑みかけた女のロマンチックな話が大變氣に入つたのでした。

「ほうほう、わたしが笑つていますわ。ほうほう」と女は面白そうに指さしました。

「ほうほう僕も笑つてゐる」と男も指さしました。

「幸福なものですわねえ、戀というものは」

と女は言いました。

「どうしてこんなに可愛いんでしよう」

眼は絶えず微笑み交わしてゐました。

「わたし、ねえ」

と女はしんみり言いました

「一度、貴方を疑つたことがありましたのよ。そうでしたわ。貴方の眼の中にほんとうに寝てゐるときでも、わたしが住んでゐるかと、それでこの前温泉に行つた夜、こつそりあたし、貴方の眼を開けて見たのよ。そしたらねえ、矢張りわたしは居ましたわ。あんなうれいしたことなかつたわ。」

勿論二人はまだ若いのでした。男は事務員、女はタイピスト、若いから二人はロマンチックなのです。

第三景

これは風景ではありませんせん。話です。

「枕元で相手の女が帯からはじめて、しゅつ／＼と次第に肩から着物を落していくのを寢床の中で、見てゐるのは何とも言えないぞくぞくする氣持ですわ、實際あれは美しい

ものですよ。——花簾が落ちてくる様に、美しい着物が羽織、着物、それから下着と落ちて来て、その度に肌の匂いが、深くなつてこぼれて來ますね、女房となると、あの感じが味もそつてもなくて義務の感じですが、變つた女となるとたまらなくいゝ氣持のものです。あ、瞬間の氣持が忘れられませんよ」

と、或る会社の課長さんが話しました。

× × ×

「女というものは知らない間が一番奇麗なものです。知つてしまふとぶくぶくして醜いものに見えます。だから優れた女達は、巧みにこのコツを使いますよ。すると男といふものは、だらしなくなるものですよ」

これはホテルの人の話。

第四景

「若い人達は羨ましいでわねえ」

奥さんが突然言いました、隣にいた若い人達の戀愛散歩を見てゐるのは、頭の禿げかゝつた夫婦です、二人は若さを拾ひにこの郊外の野原くんだり迄來て、芝生の上に並んで盃を汲んでいました。

「みんな楽しそうだねえ」

「わたし達もあんな時代がありましたのね。でも、あんなにはこんなになつてゐるし、つるりと禿げましたし。」

そう言つて奥さんは旦那さんの禿頭を撫でました。

「これでも氣持は若いよ。」

「昔の様な氣持になつて見ましようか。あの頃はほんとうに幸福でしたわね。あゝあの新婚旅行の温泉宿のこと思い出してもぞくぞくしますわ。」

奥さんは昔のことを考えてうつとりしました。

「何かお前はうれしそうだねえ」

「えゝ、とて、たのしいんですの」

「いゝ年をしていて、人が笑うよ」

「誰も同じ事ですわ老いら

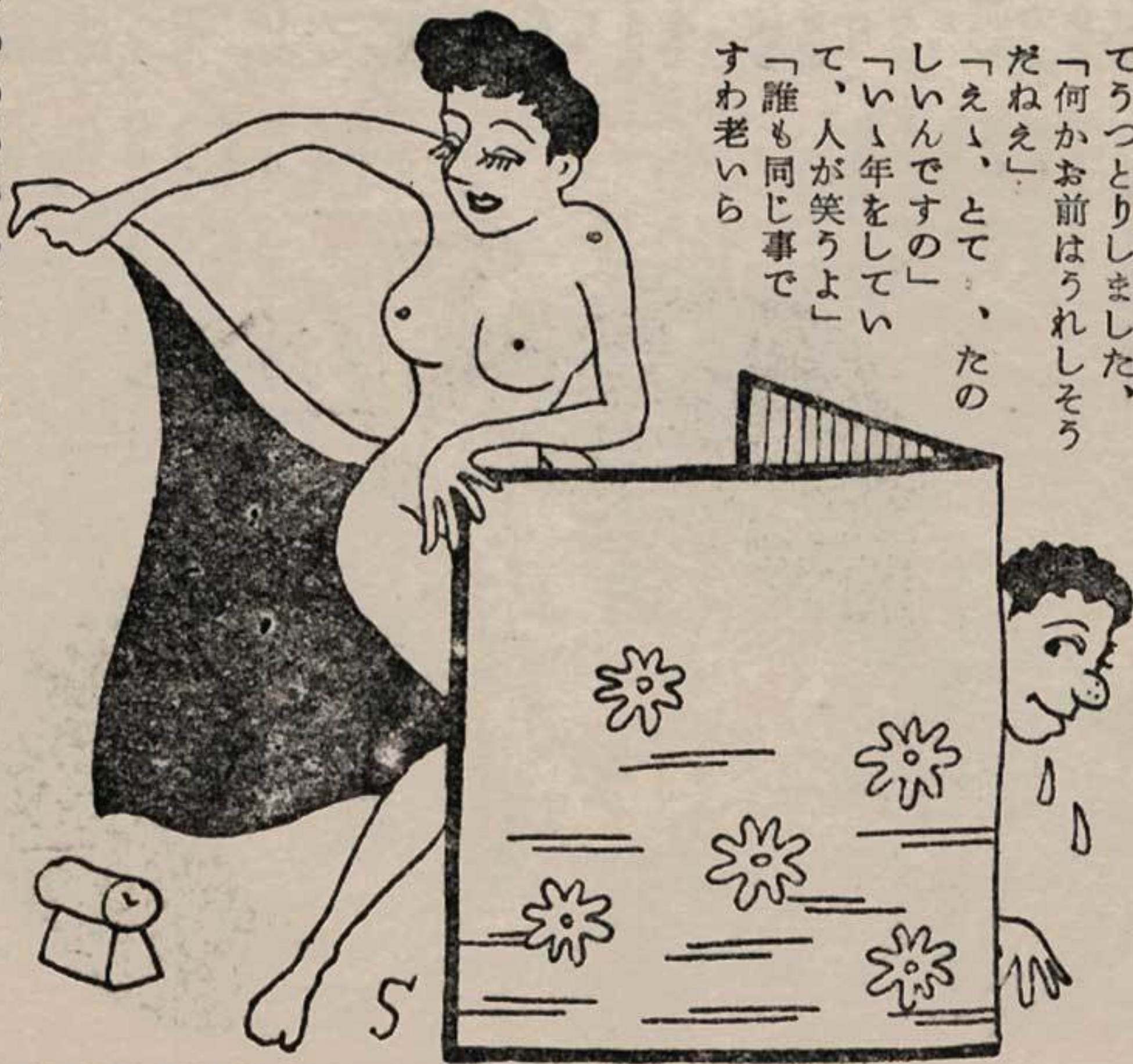
くの戀つて言いますものね」

奥さんは、あたりを見廻して言いました。そこで旦那は若々しく情熱的になつた奥さんに、若い戀人を見ました。

「でも何だか氣まりが悪うございますのね」

今度は奥さんが言いました

こうした話が永い間続けられてゐました。花が散つて蝶がとんでゐました。だが二人はとう／＼顔を赤めてあたりを見廻すのでした。



桃色カンクンボン

オフィス戀慕調

どうぞもう一度

永見隆二

若い専務の加川氏は少し早口だった。

藤代さんも、相當に器用なタイピストだったが、彼女の指の動きよりも、加川氏の舌の動きの方が時々早くなることがあった。

と、機關銃のようなタイプライターの音が、びたつと止つて富惑した藤代さんの顔が加川氏を振り向く。

「あの……どうぞもう一度、今の處を……」

すると加川氏は、黙つてもう一度口述を繰返す。今度は前の様にあまり早口ではないが、それもほんの一寸の間で、いつの間にか再び藤代さんの指を追い抜いてしまふ。

藤代さんは、ひどく恐縮して又加川氏を振り向く。

「あの……どうぞもう一度……」

加川氏は、黙つて鷹揚に頷き又口述を繰返す。けれども決して不機嫌の色などは少しも顔に現すようなことはない。何故ならば、加川氏自身、自分の早口の癖を知つていて、出来ることなら矯正したいとさえ考へていたからである。が、癖という

ものは、そう簡単に直せるものではない。今度こそは、ゆつくりやろうと思ひながら、途端に又例の調子に乗つてしまふ。

三度目、四度目まではまだいゝが、五度目になると、藤代さんは、一寸泣き出したような表情をする。頬はバラ色に染まる。それ程に藤代さんは氣が弱いのだ。

「あの……もう一度……」

と消え入りそうな聲である。すると、今度は加川氏の方で藤代さん以上に恐縮してしまふ。

「いやあ、すみません。全く僕の早口は、タイピストいじめです。」

と言つて、それからしうのうちにワザと磊落そうに笑ひ方をする。これが毎日繰返されるのである。けれど、藤代さんは、加川氏の人格と手腕を尊敬してゐたし加川氏の方でも、美しく淑やかな藤代さんに、野心のない好意を寄せていたので、とにかく二人は意氣の合つた協力者であつた。

ところが近頃、加川氏は、藤代さんに對して、全然今までにない新しい感情を抱くようになつた。

藤代さんの牙えくとした瞳や、オレンジ色のつや／＼した頬や、白い襟足を眺める加川氏の瞳は、何處かもの惱ましそつた。それは、先週の日曜日以來のことである。

一年程前に奥さんを亡くした加川氏は、子供の照子ちゃんと幸夫君を連れて郊外へ出るつても家を売つたのだが、その途中偶然、省線の驛で藤代さんに出會つたのだつた。

藤代さんは、これから一人で映画を観に行くところだつた。「どうです、映画より、たまには郊外のいゝ空氣を吸つて來ては？」

加川氏の言葉に藤代さんは快よく同意した。そして郊外電車沿線の遊園地で一日を過す内、照子ちゃんと幸夫君はすつかり藤代さんに馴ついてしまつた。

藤代さんの方でも、林檎のやうな頬ツベたをした照子ちゃんと幸夫君に、大へん愛着を感じた様子だつた。そして加川氏も始めて見る藤代さんの和服姿に妙な魅惑を感じたのも事實だつた。

その翌日から、加川氏の藤代さんに對する感情が變つた譯である。それにかえて、照子ちゃんも幸夫君も、藤代さんに會いたがつて、毎日加川氏に駄々をこねるのであつた。

ついに加川氏は、一晩考へ抜いた結果、思い切つて、藤代さんに結婚を申込んでみる決心をした。が、二人の間には、一寸年齢のひらきもあるし、殊に加

川氏は再婚である。

加川氏はいる

／＼と思ひ惱

んだが、勇

を鼓して

或る土

曜日の

午後。

「子

供達が是非一度あなたを連れて來て呉れつて言つてゐるんですが……」

と藤代さんを自宅に誘つてみた。勿論、藤代さんは喜んで従つた。

「僕はあなたに對して、こんな申込みをする資格はないかも知れませんが、でも、あなたが家内になつて下されば、子供達もどんなに喜ぶことでしょう」

加川氏は誠意のこもつた言葉を盡した。藤代さんは余りに唐突なので、最初は面喰つてたが、紅くなつてゐる計りだつたが、

「あたしのような者でよかつたら……」

彼女は羞みながら答へた。

「では承知してくれませんか？」

と藤代さんの手をとつた。そして、いきなり接吻した。それは儼みのような、瞬く間の出来事だつた彼女が驚いて椅子から立ち上つた。

「許して下さい。僕つい夢中になつて……」

加川氏は狼狽して辯解した。すると藤代さんは、顔を火のやうに紅くしながら、

「いゝえ、いゝえどうぞもう一度ゆつくり……」

「おわり」



桃色カンクンヨ

オフィス戀慕調

忘れたハンド・バッグ

此花大助

榮商會の事務所で、一人居残つて仕事をしていた崎山君は、實に思いがけなくも、大變な發見をした。

トイレットの棚の上に、無造作に置き忘れられたハンドバッグ、崎山君は、ハテ誰のだらうと何氣なく手にとつて、そのまゝ保管しておくつもりだつたが、ふと好奇心を起して、中に入つてゐるものを調べて見たくなつた。それがイケナカッタ。

中から出て來たものは、コンバクト、櫻紙、爪切り、小さな櫛、現金百八十四圓也入りの財布、それらは何の變哲もなかつたが、たつた一つ、不可解至極のものが現れた。

外でもない。ハート型の中に美人の繪を画いた包紙に包まれた指でさわつてみると、まわりが一寸高くなつたヤツである。げに合點のゆかぬ代物であるいや、品物はそれ程むづかしいものではない。馬鹿や聖人でない限り、當今の男性ならば、よしんばそれは類稀なる石部金吉でも、風の便りに聞き及んでいたアレである。

誰にも分る代物なのだが、分らないのは、ハンドバッグは言

うまでもなく婦人の持ち物である。今崎山君の發見したものは女性に必要のないものである。何のために、こんなものがこんなところに入つてゐるのか、分りきつたものも、その有り場所によつて、極めて不可解になる。さすがの崎山君も、ハテナ？と首を捻つた。

中に入つてゐた名刺によればこれは女事務員の須藤有磨子嬢の持ち物である。須藤嬢は社内でも、噂に高い美貌の持ち主、獨身の崎山君もひそかにその影を慕つてゐる一人だ。

何か一思案した後、ニヤリと笑つて、自分の名刺を一枚その中へ入れてパチリと閉め元の場所へ置いた。

何くわぬ顔をして崎山君が再び仕事をしている所へ上つて來たのが須藤嬢だつた。

「オヤ、須藤さん。」

「え、一寸、忘れものをしましたものですから」

「あゝ、そうですか」

と、そ知らぬ顔をした崎山君肚の中では十分彼女の狼狽を予想してゐた。

果して、ハンドバッグを取つてトイレットから出て來た彼女

通りすがりさま、崎山君を見て躊躇したが、何と思つたか、つと側へ寄つて來た。

「大變、御精が出ますこと」

崎山君、オヤと思ひながら、

「え、是非今日中に片づけおかなきゃならないことがあつてね」

「まだ中々お済みになりませんか？」

「いや、もう十分もすれば済むんです」

「では、お待ちしていますから御一緒に、お茶でも召上りませんか？」

「結構です」

で、しばらく沈黙が続いたが、やがて須藤嬢、ビタリと寄り添つて

「木下さん」

と呼びかけた。

「あなた、あたしのハンドバッグの中をごらんになりましたわね」

「え」

と崎山君、顔を舉げて

「何氣なく、拜見しました」

「あんまり何氣なくでもございませんわ。で、どうお考えになりました？」

「何が？」

「何が？あの中にあつたもの」

「いや、なか／＼御盛んで結構だと思ひましたよ」

「まあ！」

須藤嬢こゝで改つて

「崎山さん、お願いでございますわ、どうぞどなたにも秘密に遊ばして。」

「え、勿論」

「まあ、それで安心致しましたわ。どうぞ是非ね」

そこで崎山君きつぱりとして

「但し、條件付きにですよ」と言つた須藤嬢きくりとして

「條件とおつしやいますか？」

崎山君、立ち上つて、彼女の手を執つた。

「つまりその、ハンドバッグの中のものを使用する光榮を、僕に與えて戴きたいのです」

「あら！」

と須藤嬢、飛びしまつて、

「あなたは卑怯な方ね」

「卑怯でも何でも構わんです。おイヤならどうぞお構ひなく」

「……………」

須藤嬢はしばらく黙つていたが、やがて蚊の泣くような聲で言つた。

「仕方ありませんわ、では一度だけ、ね」

—おわり—



ラインデズ！きたん



岸 本 俊 次

ひとよ たわむ

一夜の戯れ

少し斜視が、つた美しい眼で、じつと正面からみつめられて
「あなた、川本さんておつしやるのね」

とやられた時には、ボク、ちよつとマゴツイタのだつた。

盛り場裏のボクの行きつけの酒場の女、蘭子といつていた。

ボクの好きなタイプで、いう迄もなボクのいわゆるお眼当ての女だつたのだ。

ボクがキョトンとしたのは、ほんの瞬間だつた。

「はい、あん、そうか」

とばかり、すつかり合点がいつていた。

というのは、丁度その日、ボクは、

ボクの友人で川本という男の戸籍抄本を依頼されてそれを、レインコートの亭ケツトに入れておいた事を思い出したのだ。

川本はボクと違って完全な獨身者だつた。その獨身者の川本なる男の戸籍抄本を脱いでおいたボクのレインコートのボケツトの中に発見したことによつて、蘭子が、それを、ボク自身の戸籍抄本と間違えて、

「あら、この人は川本さんていうのよ、それにまあ、獨り身だわ」

と感嘆したという結果になる。

さあ、それからというものは、俄然この蘭子なる女性のボクに対する眼の色が違つてきた。

「あたし、こんな生活、早く清算したのよ」

びたりと寄り添うようにして彼女は、いと物思わしげなのである。

「あたし、結婚したいのよ」

しんみりと眼を温ませて、

こと心配してたのよ。お前が立派な御亭主を持つまでは死んで、死に切れないつて」

「フーン、……で君のお母さんは？」

ボクとしても大いに調子を合せる。

「死んでしまつたわ、去年の秋……」

「可哀相な女なんだね、君は——」

「そうなの、……あたしと母さんは、あたいの小さい時に、父さんの家から追

い出されたんだわ。それにはとつても複雑な事情があるのよ。あんた、聞いてくれる？」

女が身の上話をするようになれば、もうしめたものだ。

「あんた、レオオールドなんかお止しなさいよ。高いばかりで勿体ないわ、

ブラック・エンド・ホワイトで我慢するの。それも、一杯きりよ。わかつた？」

というわけで万事がひどく安いものにつきはじめる。チツプなどという水臭いものは勿論いらなはいばかりでなく「少し足りないんだがね」

問答娛樂版

○マコトにお恥しいですが、接吻の禮儀を御教示下さい。(神戸・H・M生)

答一、見知らぬ人へ接吻せぬこと(殴られる虞れあり)

二、なるべく唇へすると、(外は不潔です)

三、あまり長時間にわたらぬ事(人間は長く呼吸しないと死ぬ事有)

四、人の前でやらぬこと(お巡りさんの前など特にいけません)

五、草をくわえながらせぬこと(ヤケドする虞れあり)

○臍にはどんな意義がありますか、又その効用を問う。(青森、受験生)

答 臍のある方が前、ない方が身体の後です効用はタイクツな時は、臍のゴミでも取るとヒマツブシによろしい

○一体、老人の顔にはシワが幾本位あるものでしょうか(名古屋・R・K生)

答 若い時のタメイキが齡をとると皺になつて現われるものです。従つて皺の数は、タメイキの数という勘定であります。

○世はまさしく人口過剰、何處へ行つても人、人、人、……世間を憚る僕と彼女にとつて、なんという意味のない群衆でしょう。せめて一時間でも、三十分でも、二人つきりでいられるような所はありませんか、

答 中々ムツカシイお尋ねですが、ボートに乗つて太平洋の真中へでも出られたらどうでしょう。

(京都・厭人生)

「いゝわ、あたしが立て替えとくから……」

お帳面がきく。そういう次第でボクはこの酒場において、暫くの間は、真に恵れた境遇にあつた。

ボクはその居心地よさに感激して、彼女との肝心かなめの話を進めることすら殆んど忘れてしまつていたし、ほんとの事をいうと、なるべく忘れたいと努力した。

というのは、ボクとしては、この酒場に於ける居心地よさを一時も長く引き伸ばしたかつたからに外ならなかつた。

しかし、毎夜お帳面を仰せつかる彼女は、自らボクとは立場が違ふ。

「あたし、今夜は、あなたにちよつとお話があるの」

いよゝおいでなすつたのかとボクは感じた。

「何の話だい？」

「こんなところでお話し出来るような話じやないわ、——帰りに待つてね」

とう／＼、ボクは釘をさされたが、その夜、

「ホテルなんて勿体ないわ、それよかあたしのアパートへ行らつしやいよ。あたし、あなたにあたしの生活を一度観ておいて貰いたいのよ」

ときた時には、少なからず驚いたねそして郊外のさ／＼やかなアパートの部屋へ連れて行かれて、ガスこんろで沸かしたコーヒをつましく一杯宛飲んでから、白粉の匂いのする女用の

バジャマをつんつるてんに着せられて小さなベツトにもぐり込んだボクが、

ふと鎌首を持ち上げてみると、——一枚しかないバジャマをボクにとられて、晒しの襦袢一枚ホーゼに腰巻という寒そうな姿の彼女が、部屋の隅の小さな机の前に、きちんとかしこまつて、何かしきりに拜んでいるではないか。

「何を拜んでやがるのだろう？」首を伸したボクの眼に映じたのは、一葉の寫眞だつた。四十五六とも見える、不幸そうな顔をした女の寫眞——「きつと、あいつの母親だな」

と思つた瞬間、ボクは鉛のような物を胸に感じた。

とたんに、彼女はダリヤのような明るい微笑で一杯になつた美しい顔をボクの方へ向けて、幸福そうな、弾んだ

聲で、

「あたし、あなたと今夜結婚すること、母あさんに話したのよ。……母さん、とても喜んでくれたわ。お前は幸福な女だつて、嬉しいツ」

甘えるような聲とともにボクの胸に飛びついて來られた時には、さすがのボクも參つた。

あやしむ彼女を、靜かに制して、ベツトから出て、モソ／＼と一たん脱いだ洋服を着込んでから、さて、自分は決して独身者川本にあらずして、妻帯者の渡邊であることを語り、平あやまりにあやまつた時のあゝ、彼女の絶望とも、怒りともつかない、呆然たるその瞬間の表情は未だに忘れられない。肩をふるわして泣き入る彼女を後に放々の態で、アパートから飛び出した瞬間、ボクは自分の古ぼけたレインコート

を彼女の部屋へ置き忘れてきたことを思い出したが、しかし引き返す勇氣はなかつた。

彼女、あのレインコートをどうしたかしら、とボクは未だにそれを思つてゐる。

(終)

人生、泪の生涯

なみだ

人の一生はナミダの連続でございます。悲しいにつけ、嬉しいにつけ、憤慨につけ、感激につけ、先立つものはナミダでございます。

ナミダを輕蔑する人は、人にし人にあらずであります。血もナミダもない野郎なのでございます。涙に生れて、涙に死ぬのが人生でございます。

- | | | |
|-------------|----|--------|
| △言葉の代用として | —— | 嬰兒時代、 |
| △お菓子のために | —— | 幼年時代、 |
| △叱られて | —— | 幼年時代後期 |
| △喧嘩して | —— | 少年時代前期 |
| △落第して | —— | 少年時代後期 |
| △なんと異性が慕しくて | —— | 青春時代前期 |
| △月を見て | —— | 青春時代中期 |
| △失戀して | —— | 青春時代末期 |
| △結婚して | —— | 中年前期 |
| △女房の圧迫の下に | —— | 中年時代中期 |
| △失業して | —— | 中年時代末期 |
| △女房に逃げられて | —— | 初老時代、 |
| △息子が不良になつて | —— | 初老時代末期 |
| △不治の病を宣告されて | —— | 老衰時代 |
| △死の間際に | —— | 最終時代。 |

花柳界哀話

岡安子

今里新地の女乞食



は、子供を養う甲斐性がなかつた。

お里は子供の時から美しく、性質も大人しく、里親は吾子以上に可愛がり、つれない実親など現われて来ぬ方が彼女に倖であり、そして今の様な浅ましい病氣にならなくともすんだのに――

七才の時に実父母に引き取られた。やくざな親でも子の情に引かされたのか？、とんでもない。そんな殊勝な人間じやない。彼女の下に妹が二人も出来て、お里が居れば、もう子守りをして呉れるだろう。使い歩きも出来るだろうと、呆れた心掛なのだ。

養育費も拂わずに育ててもらつたお里を、親の権力で取り戻しに行つた。勿論彼女は不意に現われた親を恐がり、里親にしがみついて泣いた。里親も連れて行かないで呉れと哀願したが初めて見る我が子の、子供乍らも珍らしい美ぼうに、大きくなればうんと稼がせる、という慾も出て、無理にも連れて行くと言い張つた。

「七年間も音信不通で、かまひもしなかつたのに、今更連れて帰るなんて、そんなひどい人が、あるのですか」と、泣きわめく里親から、お里をもぎとる様にして、も

がく彼女と二人して連れていつた。電車に乗る時も、幼い乍ら力一ぱいドアにつかまつて入るのを拒んだが、大人の荒々しい力で、中に押し込まれてしまつた。走つて行く電車の窓から身を乗り出して、「お父さん――お母さん――」と聲を限り叫んだが、電車はなつかしい養父母の地を、どん／＼離れ去つていつた。

連れて行かれた実親の家は狭い裏長屋の貧乏露路であり家の中は物置きに、ラン雑に散らかされ、四つと一つの妹が二人意地悪くビイ／＼よく泣いた。

大和の廣い養父母の田舎家豊かな食膳、兄さんや姉さん達の愛撫が、遠い昔の夢になつたお里は、皆の顔色を見乍ら、口数の少い子になつてしまつた。

「掃きだめに鶴が下りた様な娘だよ」

「あれが本当の子だろうか」と近所の人は噂した。子守りや使い歩きばかりさせられていても、お里は日に増し美しく、大人しく、優しい娘に成長していつた。

やくざ揃いで人に増まれてゐる木田一家であつても、彼女の悪口をいう者は誰もなかつたらぬ親や妹を持つたお里を哀れに思ふ人はなかつた

うす暗い二帖の間で、今時の人にはぞらしくくせのない黒髪を、うつむけにして、お里は今日も丹念にすいていた。スウ／＼と櫛の目が通つてうるしの様に光る。いつまでもいつまでも倦く事なくすいていた。蒼白くすいて見えるほおにうなちが、薄幸な昔風の美人と匂わせる。

「氣味の悪い姉さんだね、幽

霊見たいに長い髪の毛を一日なぶつてゐるんだもの、私たまらないわ。」

「本当に嫌な子だね、目障りつたらありやしない。」

母親もあいづちを打つて、いかにもうんざりした様に眉をしかめた。何と云われても知らぬ顔で、お里は尙も髪をすいていた。

細面に細い眉、通つた鼻筋

小さい口許、やつれてはいるが、一寸珍らしく整つた顔立ちで、妹の造作の荒い、太々しい様な顔とは全く異つてゐる。母親のいかい目付き、下品な口許とも似てゐない。酒呑みでバクチ打で怠け者の父と、慾ぼけのこの母を親にしたお里は不幸な女だつた。

お里は生れて直ぐ、里子に

やられた。怠け者の父と母と

お里が年頃になると、待つてましたとばかり、今里新地に賣られたのは十八の時だつた。

藝をしこまれていたわけでもなし、顔より外に取り得のない彼女が、藝者になつて何をやる。体を賣るより外に道はない。

古風な昔型の美人ではあるけれど、一本一本うえた様に揃つた生えぎわ、うるしの様に黒くくせのない髪を、島田に結つたところは誰の目にも美しい事に變りはないので、今里新地で一番の美人だろうと云われて賣れつ妓になつた。

客の寄り好のみにするでもなく金の高によつてサービスを加減する現金さもなく、いやな禿茶びんも、小生意氣な中年男も、差別なく接して、お里は愛された。といつて彼女がこの職業と喜んでいただけではない。自分の運命に従順な古い女にすぎないのだ。

彼女を抱えた富の家は蔵が建つたと言われた位で、誰にもさからう事の出来ない彼女は、女將にも愛され、朋輩達にも憎まれる事なく、辛い稼業乍ら、親の傍に居るよりは

夢であつたと、お里はあきらめていた。彼女のお蔭で木田一家には春が来た。父は毎日好きなお酒が呑めるし、母は

あこがれの、歌舞伎通いが出来、妹達は女学校に――

お里には母性愛を感じないこの母も下の妹二人は可愛がつた。人の心は妙なもので生れて直ぐ人にやつて七年間、見むきもせなかつたお里には

我が子の様な氣がせず、養父母を慕つて泣いていた彼女が面憎くもあつたが、今の様に一家揃つて左團扇となれば、お里様様であり、妹は、

「私も大きくなれば、姉さんの様な素晴らしい賣れつ妓藝者になつてみせるわ。」と云つたが、この妹の御面相では、下の下のお茶引き位が、関の山といつたところ。

この稼業に入つて五年、お里は忠実に抱えた女將や親達に搾取されて来たが、やつと解放される時が来た。

富の家の女將が吹きかけた途方もない身代金を出して、お里を身受けする紳士が現われた。大阪でも名の知れた人で、もとより正妻に迎えられるわけではないが、一軒家を與えられ、女主として住める自由な身になる事になつた。

そうと話がきまつて間もなく、お里の様子が變になつた。窓を開けて大きな聲で歌を唄つたり、なんでもないのでガラ／＼笑つて皆を驚かせた。

「お里さんどうしたの？」と尋ねても、辻褄のあわぬ返事をして普通でない。高價な値で取り引きのきまつたダイヤモンドに傷がついたのかと女將はすつかり慌て、醫師に見せた。

美しくろうたけたお里の顔を、痛ましく見つめ乍ら、「脳梅毒です。治るのは難しいでしょう。」と醫者は告げた。

女將はがっかりしてしまつた、なんて運が悪いんだろう旦那の手に渡つてから、病氣になればよかつたのに――と

思うと儲けそこなつた口惜しさに、女將は齒ざしりして、うつろな目でニヤ／＼して、お里が小憎らしくなつた。

大事なる商賣道具と思えばこそ目を掛けてやつて来たものを――廢物になつてしまえば用はない。

「我が子の様に可愛がつてあげたけれど、こうなつては、私も損だが仕方がない。」と恩にきせて親元に返えしてしまつた。

返えされたお里は、二帖の間の隅で、ニヤ／＼し乍ら、一日中美しい黒髪をなぶつていた。

ポカ／＼と春日の暖い長い屋では、井戸端會議が始まつている。

「お里さんは可哀想じやないの、木田の奴達お里さんに養つてもらつていたくせに、病氣になれば、狭い所へ押しこんだまゝ、御飯も盛り切りのあてがいぶちで、一人別に食べさすんだつて」

「それにあの不細工な顔した妹が、姉さん見たいな氣狂いがいると、私のお嫁入りに差し支えすると、いうんだから呆れるよ、誰のお蔭で学校へ行つたんだ、皆お里さんのお蔭じやないか、あんなお多福、誰がもらつてなんか呉れるものか」

「又その妹のお茶つびーが、学校へ行くの恥しい、姉さんなんかどこかへ行つてしまえつて言つてるよ。」

「お里さんは毎日あのきれいな髪をすいているだろう。あれをうるさいとか目障りだとか氣味が悪いと言つて、丸坊主にしてしまつたんだつて」

「まあ、あの髪を切つて坊主に、ひどい事をするじやないか、お里さんどうしてるの」

「私が誰もいない時、窓から覗いたら、しよぼんと座つてゐるから、お里さん、髪どうしたの、と訊いたら――うち髪あらへん――と坊主頭を押えて、ニヤ／＼してたよ」

「お前達、お里さんを坊主だとか、氣狂いだとか言つて、

からかつたら承知しないよ。」と一人のお内儀さんが大人の話に耳を傾けていた腕白小僧の二三人に目をむいて見せた

「僕何も言わないよ」とてれくさそうに笑い乍ら子供達は大人から離れていつた。

日傭人夫や、屑屋など、その日稼ぎの人ばかりが住む長屋ではあるが、人情に變りはない。芋をふかしてこつそりお里さんに持つて行つたりした。こんな事があつて暫くしてから、お里の姿が、今里新地の公園付近に見られる様になつた。実物の二分の一位の玩具の三味線を抱えて、夕方から立つてゐた。いがくり頭に地味な木綿の着物を裾短かく着て、前齒が二本抜けた姿は、身遠える程ぢぢむさくなつていた。

「まあ――お里さんが――」と彼女を知つてゐる花街の人は、巳の行末を思いやり、一人身につまされて、お里に心づけをやつた。

夜店のある時などは、離れた所からくる人達も、いつか彼女の身の上を知り、殆どの人が施しをした。

頭の狂つたお里は新地のお里さんと言われて、下手な藝者より、人氣があつて、夜店

●八十八頁ヘツツク

俺らは靴みがき

綾 由紀夫

エッヘッヘへへ、そりや、やつぱり何と言ったつて野郎の靴みがくよりや、娘つ子のちっちゃな可愛い靴をみがく方が悪い氣持じやねエやね。磨く手に思わす力が入り過ぎたりしてねヘッヘ……

且那の靴ア失禮だがもう買ひ直す時分だね。あんまりくたびれさしちや、いくら何でも靴が可哀そうだ。それや、こうした商賣やつてるとね、この靴ア凡そ何ヶ月穿いたもんだ位のこたア一見して判らアね。……

それやそうとして、あつしの仇討物語てのがあるんだ、それでも話そうか。ナニ、大丈夫だよ、口早エから兩方の靴磨く間にや、ちやんと話をすますよ。

——その日も例の如く、この街角へ靴磨き台を据えて、いゝチップを呉れる客でも来ねエもんかよボシヤリ日向ぼっこをしていたと思ひねえ。ところがね、そんな事を考えていると不思議なもので、立派なナリの紳士が向うからやつて来た。

こいつカモだなと、そこは商賣だ、あつしにや直ぐ判つたね。磨く奴と磨かねエ奴アみがき屋の前を通る時の眼の色が第一違うよ。

「旦那いかがで？」と誘いかけると、「おゝ」とか何とか鷹揚にうなづきやつてね、そうだね、どう安くふんでも五千円

以下じやねえ豪勢な靴をあつしの鼻ツ先へつき出したもんだ。見るてえと、そいつがちつとも汚れてねエと来らア。いくら金があり余るツたつてピカ／＼光つてる靴を又その上に磨かせるなんてバカ／＼しい無駄をする奴なんぞ、どう考えたつてヘンだよ。

いよ／＼様子が變だ。おやツと思う間に刑事がツカ／＼と紳士の横にビタリと身を寄せるなり「おい静かにしろ」と來たにや驚いたね。

紳士の顔色が急にサツと蒼くなつたのが見えた。どういうわけかあつしや、その紳士の足をしつかり握つていたね。と、いきなり紳士が刑事にメリケンを喰わしたんだ。

で、あつしや夢中で掴まえてた野郎の足をねじつた。ま、早い話がそんなわけでこの野郎は難なく刑事に引立てられて行つ



てエと、この邊を廻つてゐる顔つたのも道理で、此奴ア昔あつた靴問屋を乗取つた詐欺漢だ

猫犬小説

海川映二

一、醜惡なせむし

私は不幸とゆう悪魔を脊負つて來た生れつきのセムシです。魔法使いの爺さんが持つてゐる皮袋のような身体。ガサ／＼とした荒い皮膚、刑務所の土塀のように厚い胸、あ

と、なんと、我れながら醜い姿でしよう。

女

私は壁に向つていつも獨

語してゐます。壁は哲學者です。私はしなびた顔をしながら六角形の柱時計の下でレンズ磨きをしています。失うものとして何一つない哀れな貧乏人なのです。

二、足、足、足

此處は繁華な港の街です。

私はハトバの近くにある小さな蝸牛の家のような仕事場を持つてゐます。私の仕事はさつき言つたように眼鏡のレンズ磨きです。

私は毎日コワレかゝつた椅子に腰かけ、ゴミの一杯たまつた三角形の窓から街の舗道を通る女性の脛ばかり見て暮してゐました。

コンクリートのような固い足、生毛の生えた小麦色の足餅肌の吸いつくような足、三ヶ月も卵巢を病んだ女のような疲／＼きつた足、ペロ／＼と舐めたいような良い足、あしアシ、足……

どうして私は彼女たちの足に、狂いになりそうな魅力を感じるのでしよう。そしてたえず熱帯の乾期の空のような明るい水々しい處女の白い肌が馬鹿に戀しいので。

三、混血兒の少女

私の仕事場の隣には、ホテルと呼ぶには似合わないチツポケなインク壺のようなハリ

肉を

このホテルには透きとおる

つたのさ。
「奇しき街の捕物」なんて、新聞に出てたからこの話にや旦那

あたしや

ダンサー

福永君子

も覚えがあるかも知れねえが、この商賣でなくちや出来ねえ手柄でさね。銀行をゆすつた罪だ

つて話だったよ、何でも……ヘイ。出来やした。



（「へえ、あたしだつてこう見てもレッキとした主人もあれば、子供だつて二人もあるのよ。ガツカリした？」
ダンサー商賣辛からうッて？ 冗談言つちやいけないわ、一日中好きなダンスがやれて愉快な音楽が聞けて男の人達と馬鹿話してヘラヘラ笑つてれや、オマンマになるんてございますわヨ済んませんーだ。
あんた随分血のメグリが悪いわ。……あたしの年？ あつさり言つちやうわよ、驚いちゃいけないよ、當年とつて十三七ツ、そりやウソだけど、四十に二ツ手前というのが正真正銘掛値なし、嘘だと思ふなら、カッラさつちやつて丸坊主を御覽にいれましようか？
氣味が悪いから止せッて？、OK！ とうなりやみんな白狀しちゃうわよ。この真白な奇麗な齒だつて夜寝る時にや痺りながらパクリと外して枕元のコップの水の中へつけとくんだよ。
それにしちや皺がないと言うの？、あんた義眼じゃない？、この頬には大枚三萬金を投じた

精巧なプラスターが貼つてあるのよ、嘘と思つたら觸つてごらんさい、コチンコチンと固い音がするかもしれないわ。
片ッ方の眼は義眼だしね、どうも相済ませんでしたわね、でもね、これで火遊びが大好きと来るから、あたしッて女もまア話せるようなもんでしよう。……
次もあたしと踊つてね、お母さんと踊つてると思えば安心じゃないの。……ラ、ラ、ラ……

わ、只もう正直にお相手をして踊るだけ。なんかこう、でも、今話したような事でなくても人を釣るような術を知つてると得だわね。
あたしみたいなた者には知つても出来ないけど。……あたし淋しいわ、つまらないわ！……アラもうおしまいいね、次の番またあたしと踊つてね……
！なんて術を用いて客を釣つてる娘が此のホールにいるのよ。實に下劣だわ。あたしダンサーを早くやめたいわ……
なんてな事を言つてね、男をだまして娘がこのホールにいたんですつて……

喰

美しい肌をした混血児の少女貿易商と自稱する密輸入専門の四十男、博奕ばかり打つていて肥つた薬剤師とかゆう男。

肺病の癖に新開地のパン助ばかり買つてゐる麻雀好きな男何れも大分変つたメンバーでした。

混血児の彼女は十六です。チューリップのように眞ツ赤の唇、悩ましそうに張り切つた乳房、黒耀石の瞳、女王峰のように膨らんだ尻、腹から脛へかけてのなだらかな線。

人の忌み嫌うセムシということを心臓から置き忘れた私は、コーヒ茶碗を百もブチ割るような素晴らしい戀をしかけました。

生命の一ツや二ツ、エイ捨てるしいますよ。名前ですか、海邊から来た女、オットこれはバリエテでしたネ、波子と言います。

四、失戀

佯

元氣のない犬が長い舌をベロリと出す夏の日の黄昏でした。私は例のゴミの溜つた三角形の窓から茜雲を見ていました。

波子はその時、お客に喰わせるトマトサラダを作っていました。愛欲の炎が地獄の火のように炎々と燃え、唇はドス黒く歪み、目はカメレオンのように変な色がさして來ました。私がいつも愛欲 躍り狂う時の悪い癖です。

私はミシ／＼と音のする危い階段を傳い波子の傍へ蝙蝠のようにコツソリと忍び寄りました。丁度運よく脂肪過多症の彼女の父は留守でした。

「波さん、波子さん」
私は出合頭に彼女の妖艶な目で睨みすえられました。

「何んですつて、此の醜いセムシさん、何んの用で來たの、お馬鹿さん悪魔の奥さんでも貰いなさいよ」
「……私は貴女を心のドン底から愛してゐるんです不具者の戀は」

偶



見知らぬ女性と

忽ち仲よくなる方法

Ⅱ 戀人速成法教授 Ⅱ

一、容貌

（顔は人間の看板である）

モノになり易い娘さんスナワチ人見知りをしな

い娘は、次のような型に属している、本当デスゾ

○肉體——中柄以下である。アマリ大きいのはイケナイ。胸、腕、肩はあまり肥っていないが、下半身は発達している。

○皮膚の色——浅黒い、黄褐色系。

○顔の型——丸顔、ツマリ寸のつまつたやつ。

○眉——薄い。剃つたかヌイタのか、

○眼——細く切長で、瞼が厚い。

○鼻——高くなく、尖端がやゝ

上向きなもの

○頬——頬骨がつき出

ている。

○唇——厚く、紅く、（口紅をモチイテいれば、分らないが）上唇がそりかえついている。

○歯——細くて白い。

○聲——中音（アルト）

○頭——丸く、ユタカである。

○その他の特長——ウブ毛が多く、コミカメの毛が渦を巻いている。毛髪は幾分赤味ががつている。

総合すれば、一見アドケないが、どこかフデブテしい、ヒトクセありげな顔

二、季節

（時季はエラベレし）

都会の獵期は、別に定

つていないが、春から夏にかけては、ヨロシイ、人間は薄着になると、氣持もなんとなく開放的になるものである。カラデアル、エヘン。

三、天候

（天気豫報を見よ）

お友達になるのに、天候は大いに関係する、漁夫や獵師は先づ空をニラ

ンデ思案する。明朗に晴れた日が絶好である。青空が澄んでいても風の日駄目だ、女性は男性よりも、自分の裾と髪を氣にする。例外として利用するに、ニワカ雨の日がある（「実例」の四参照）

四、時間

（時間厳守）

田舎では日中、但し日没時はいけません。都会だと、午後ならよろしい

午後とは正午から夕方迄

五、狀況

（念には念を入れよ）

これは大切である。「あの人、不良少年じゃないかしら？」

「あの人、不良少年じゃないかしら？」

「あの人、不良少年じゃないかしら？」

「オホ、、、、ノオトルダムのせむしでさえ貴男よりは好い男よ、オホ、ぞつとするわよ、向うへトットと行つておくれよ」

彼女は邪見にも私を引ッ張り出し、表のアスファルトの舗道へガツンと突きとばしました。私の大きな福助アタマが運悪く電柱にブツカリ、擧句の果、敷石に鼻をぶつつけ真赤な血をさつと出しました

五、復讐の企

酔つ拂つたようなお月さま

え続けていました。

不具者のくせに、コナン、

ドイルや、アラン、ボオの作

品が馬鹿に好きな私は、一度

シヤロツク・ホルムズのオフ

イスを巴里に尋ねようとさえ

思つてゐる夢遊病者みたいな

男です。

私は此の地上から彼女の一

筋の髪さえ残さず完全に消し

て了う殺人法を工夫したので

す。

それから十日程経つた或る

晩。

私は隣越しになつてゐるホ

テル

の屋根

裏に梯をか

けて、そこを

繰り抜き自分の

家から彼女の家へ

自由自在に忍べるよう

に造りました。

此の秘密の通路をつくるの

に私はドンナ苦勞をしたか、

丑滿刻、人の寢靜まるのを見

澄ましコツ／＼やるのに幾度

か私は汗ビツシヨリとなり乍

ら大きな耳を立てた事でしょう。

此の通路がすっかり完成

した時、私は喜びの余り大聲

にゲラ／＼と空洞のような笑

い聲を出し、ハツとした事が





獲人戀

津村

手がかりで
手を觸れ
てゲム
を開始し
たような
非科学的
手段は、ケイ
ベツに値
する。

堂々と明るい所でヤリ
タマエ。エエですか。人
数は2対2が最も容易と
されている。

その場合、男は片ツ方
がギセイ的に三枚目を演
じる必要がある。

何故二人連れの女子が
よいかを、心理学的に分
析すれば、女は總べてウ
ヌボレと競争意識を強く
おモチアソバしている。

「あの方が見ているのは
あたしよ。えい、あたし
ですとも！」

と、両方共カンガエル。
加えて、多少の冒険心
に伴う危険を感じる裏に
依頼心がヒソソデいるも
のだ。

「二人だから、めつたな
ことはないわ」

実際、もう一人ふえれ
ばカシマシイと古來定義
されている女だから、二
人でも十分氣丈夫に違
ない。——でしよう。

六、場所

(ところをエラベ)

場所としては、淋しい
暗いところは、必ずキン
チョウしているから駄目
である。

明るい賑やかな、心の
ウキ／＼するような所を
舞台とすべきでアル。

七、第一條件

(フアーストインプレ
ッション)

マツ、認めさせること
だ。それも、出来だけ好
意的に、
ニンシキフソクはいけ
ません。

八、感覺

(あら、どうしましょう)

しばしば御自分で意識
しないで、バスや電車の
振動で感覺が非常に鋭敏
になつてゐるのが女であ
る。たゞそれを氣付かな
いでゐる場合が多いので
ある。

形のアラワレとしては
兩脚をきちんと揃えて、
爪立ちになる。そして、
落着きを失う。眼が輝き
を帯びてきて、血色がよ
くなる、これは、多くの
際、たゞ「疲労」と解釋
される。

九、戀愛十戒

(コレダケハ心得オク
ベシ)

1、亂れた服裝をする勿
れ、(アロハシヤツなん
かは大の禁物)

2、不潔である勿れ(肉
体も心も)

3、女性を輕蔑する勿れ
(女性第一主義である
こと、ね)

4、ワイセツである勿れ
(態度はモチロン、話
もそうです)

5、ニンニクを食する勿
れ、(臭いもん)

6、常識以下である勿れ
(タトエバ、その週の
封切映画グライは暗記
していること)

7、他の女を見る勿れ(ハ
ヤキモチは女の天性で
ある。)

8、嘘をつく勿れ(正直
の頭に神宿る)

9、化粧する勿れ(男の
クセに、オカシイヤ)

10、怪異である勿れ(ウ
ラメシゲな顔、オモシ
ロイ顔、オツカナイ顔
などは困る)

十、實用篇

(そんなにあるかい)

① 舗道で——

スレチ
ガウ際

六、嵐の夜

北向きの季節風はひどい嵐
とかわり、アカシヤの街路樹
がヒステリーのように泣いて
いました。いつも来るワンタ
ン賣りも、今宵の嵐には辟易
したと見え、寂しいチャルメ
ラの音も聞えませんが。
オ、大事を決行するチャ
ンスを天は與えたんです。此
の機会を逃しては再び彼女の
息の根を止める事が出来ませ
ん。

嵐はしきりに窓を打つてい
ます。夜は風と共に更けて行
きます。私は凡ての用意を整
えて例の秘密の通路を馬の胴
腹にくつついたダニのように
這いつくばり先づホテルの客
室の上に来ました。

節穴から見ると密輸専門の
四十男は悪性の國際梅毒を脊
負い込んだと見えて、何かし
かめ面をして治療をしていま
した。

私には今の場合そんな事
はどうでもよい、青大
將が棟を遣うような
音を立て、彼女
の寢室の眞上
に新しく
張つた
クモ
の



巢を拂いながら漸くの事たど
りついたので。
幸いにして彼女の部屋は随
分客間より離れて殺人にはも
つてこいの條件を與えていま
す。

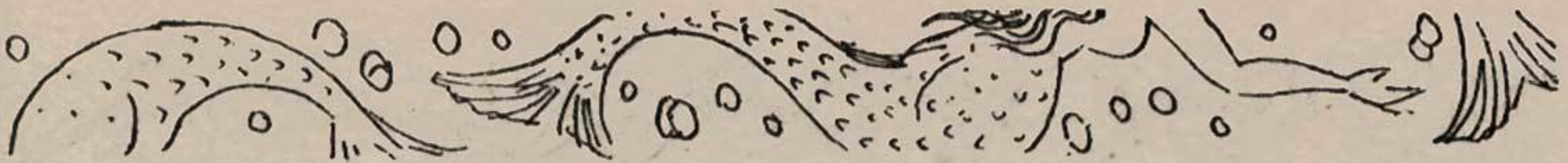
七、波子の最後

彼女は此の怖しい佝僂の侵
入者が、しかも天井裏に潜ん
でいるとは夢にも知らずグッ
スリ眠りこけていました。

嵐は益々ひどい、……

お、第二の接吻から第三の
接吻、戀人のマドロスの爲に
處女というくだらない塔門に
勇敢に歡樂のルツボに一切を
叩き込んだ彼女は、この二三
日とても大人びて骨盤はいよ
／＼男の愛欲をそゝるように
発達して來ました。

「畜生、笑顔さえ浮べてやが
る、マドロスの
夢でも見てや
がるんだな
フ、今に見ろ



に、うつかりみつめ合
う。これで、ヤニワに追
跡するような輕舉はひか
えた方がいい、次の機会
を待つ。もう一度逢つた
時、つんとされたら止め
た方がよろしい。

微笑をしたら、もはや
シメタモノ。見てくれた
だけでも脈はある。三度
出逢えば申し分ないが、
そのへんは要領よく考え
て、さも自然らしく挨拶
するか、後を追う。

これは追い越し、追い
越され、更に追い越し、
更に追い越されながら

「意識の流れ」

を測量しつゝ順次接近す
る。相手がもし暗い横町
などへ折れれば、既にヨ
キである。

この場合、最もムズカ
シイことは、他人に氣付
かれないでやることだ。

「お嬢さん」

「何んですの」

相手はきつと白ぼつ
くれる。

「一緒に散歩して下
さいませんか？」

「だつて、あたし、
あなたを存じ上げ
ないんですもん。」

「だつて、始めは
知らないんです。」

でも、もう……」

②喫茶店のタグイデー

偶然そこで発見したの
でも、「コレハ」と目差
して後から従つたのでも
よい。席は真正面か、前
斜め、じつと凝視。相手
もこちらを見たら、先に
視線をソラス。

「氣の弱い方！」

と若しそうでなくつて
も、ホノカな優越を感じ
る。そこに「隙」が出來
る。

注文するものは、女と
同じものにする効果があ
る。殊にそれが、オレ
ンジエード、とか、グレ
エブジュウスとか、割に
高いものだと、更にい
そんな時、

「あら、眞似してるわ」

相手が笑つたら、眼で
挨拶をする。で女が立つ
たら、同時に席を離れ
る。レジスターでカチ合
つたら、ちよつとシリソ
イテ、女を先にする。そ
して、外へ出たら……

③映画劇場のヨウナト コロで

イトモ惱ましき戀愛
映画の濃厚なのが終つた
あとなどが、フサワシイ
「天然色映画はいゝわ
ね」

と女が、連れ嬢に話した
とすると

「テクニカルカラーはい
ゝわ」とやる。

女はきつと振りむく、こ
の機会を逸せず、板チョコ
か、ガムをどうですか
とすすめる。

次の映画が始ま
る迄にちよつ
と、と言つ
て連れの
うちの一人
人が女
と席を
替れば、



六神丸賣りの婆さんから貰
つた毒の吹矢は私の口から放
れて、小氣味よく彼女の心臓
に突ツ立つたではないです
か。

「おゝ彼女は昇天した、勝利
だアハハ」

見給え、彼女は苦悶し初め
ました。兩の腕で空の半月を
抱くような恰好をしたかと、
思うと、私にとつては最も鬼
門の二ツの足を宙に躍らし何
か叫んだまゝ息絶えたよう
です。

八、女肉を喰う

あゝ彼女は此
の佝僂の手に

依つて倒れ
ました。さ

てどうして
屍体の仕末

をしたらい
か、私はスル

と屋根裏か
ら下りて彼女の重

い屍体を再び屋根裏へ擔ぎ
上げたんです。

豊麗な若い肉体はすつか
り私に預けられて其の重量

に小さな私は幾度躓きよ
ろけたでしょう。

やがて彼女の屍をズル
／＼引き摺り私の部屋迄

持つて來ると靜かに寝台



の上に寝せました。何んだか
死んでゐると思われず細い
寝息を立てゝゐるようです。
私は光を衣服吸つた後、愈
々屍体の始末にとりかかりま
した。最後の接吻を屍に與え
ると黙禱したのちバラ／＼に
手足を心臓を小さな瓶に密封
しました。

彼女のあの伸びやかな若い
牝鹿の如き身体は余すところ
なく此の醜いセムシの腹の中
に尊い寶物のように藏れたの
です。

彼女の肥つた親爺はまさか

仲のよいアベックが二組出来上つて、万事解決というわけである。

④ニワカ雨

晴れていた空が、イッテンニワカニカキクモリ、バラバラツと雨が降つて来た際女性は大抵軒下へかけ込む。
だから、こんな時は、早速、安い傘を買うのである。

「お困りでしょう、これを上げます」
「いゝえよろしいんです」
「いやア、僕はいゝで

さツと渡して、イサマシク雨に濡れて歩き出す。情は人の爲ならず——ですぞ。
広いようでも日本はセマイ。その次に逢えばですな——。

⑤電車バスの中から——

外を見ている女性と、



十二、結論

男は舗道にいて、思わず視線が合う。そんな時、ちらつと笑うか、ちよつと手を振ると、少女ならホトンド應じる。で、少し先で降りて、歩いて来て逢うとする。
面倒でも、又いゝ顔をしてみせる。
その後は腕次第である。

十一、關係法規

刑法第七十四條
公然猥褻ノ行爲ヲ爲シタル者ハ六月以下ノ懲役若クハ二万五千円以下ノ罰金又ハ拘留若クハ科料ニ処ス、

輕犯罪法

二十八、他人ノ進路ニ立チフサガツテ若クハソノ

とにかく、女を拾い、言いかえれば釣るに、「偶然」をオモンジなければならぬ。すべて「偶然」と「成行の」二つに支配される。
計画して「戀愛」は出来ない。その「発展」も又「ワカリマシタカ？」
〔注意〕世の淑女、令嬢達におかれては、以上を熟讀含味されて、十分用心されるよう希望致します。老婆心ながら——エ

九、發覺

娘の波子が隣のセムシに殺されたとは思わず戀人マドロスと何處かへ遊びに行つた位に思つて、毎日ハマの妾の家に入り浸つていました。
とてもうまいですよ、私はもつと食べたいと思つています。そんなに逃げなくともいいですよ。アハハ、

「だが然し、神に見離れた私には暗い闇が襲つて來ました。普請のため小さなガタ／＼ホテルが改築された時、私がウカツに放つておいた秘密の通路が発見されたのです。是れが端緒となつて遂に私は、榮養のよさそうな鼻がトマトみたいのに赤い刑事さんに掴つてしまいました。私は人肉を喰つた殺人犯として重い圧伏してやまない牢獄の壁の中につかれたんです。

黒い法服を着た裁判官は私を絞首台に登るべく宣告したではないですか、私の首に麻綱が掛つて、此の脂切つた猪首を絞められるのはあと三日です。
執拗極まりない私の戀は死んでからでも波子の肉を追うことでしよう。

十、死刑囚

死刑執行の前日の事です。頭丈な鐵の窓の外には黄色い日マワリの花が咲き、青空には白い雲が流れていました。淋しい孤獨の私にも珍しく面会人がありました。それは嘗て私が娼婆にある頃、異色ある雑誌として愛讀していた奇譚クラブの記者ではありませんか。

彼は私のやり方が余りにも常人と交つているとゆうので「女肉を喰つた佝僂」とのイシタビユウを記事として大衆に呼びかける魂膽だつたんです。
止して下さい。哀れむべきセムシの物語りを書くなんて——。

毎日女の足を眺めて暮したあの懐しい三角形の窓には埃が溜つていふことでしょうか。六角形の柱時計も主人公がいす止つていふ事でしよう。あと二十四時間の後には、絞首台の高台の上に風に吹れてグラ／＼動いていふ息のない私の姿を街の人々はハッキリ見ると思ひます。
そうすれば、私の身体の中に生きていふ波子の肉體も、此の世の中から姿を消してしまふのです。

■或る佝僂の幻想より■

(終り)

酒池肉林を誇る

地下組織の
秘密ナイトクラブをえぐる
伊豆 敏夫

一、
御記憶のいい方なら御存知でしよ
う。それ戦争前にやかましく言われた
無医村、淋しい山の中の醫者なし村
へ、いくら時の政府がやかましく言つ
たつて行き手がないところから三ヶ年
の義務年限つきで、醫專の給費生を募
集したことがあつた。

当時中学を卒業した私は上級学校へ
やつて貰えるあてもなく、濫々この試
験に應募して三十何人に一人という激
甚な競争を冒して給費委託生として入
學した。四ヶ年の課程を終えた頃は、
もう山奥の村の診療所へ赴任する必要
などはなかつた。

それは戦争が喰うか喰われるかの凄
い機相を呈していたからだ。卒業を待
つようにして私は、早速、見習軍醫と
して戦地へ驅り立てられた。血腥い戦
地に明け暮れたそれから数年、
そして長いソ連での抑留生活。

醫師という特技を持つ爲に最後迄留
用されて、やつと舞鶴に上陸したのは
終戦後四年もとつくに過ぎ去つた秋だ
つた。

やつと辿りついた大阪郊外の自分の
家はすつかり焼け野原で瓦礫の間に僅
かに秋草が茂つていただけだつた。

失望と疲労にうらぶれ果てた身体で
大阪駅前の廣場を歩いてゐる時、手に
した夕刊新聞の三行廣告に私の目がじ

つと注いだ。「招聘、醫
師」思わず私はあつと喜び
の聲を上げ、急に鼓動が激し
く打つのを感じた。

職だつ、しかも醫師の――

求人先は御堂筋の惠美須商事。

惠美須商事と言へば、ウイスキーで

は大阪で指折りの大きな会社である。

その翌朝、私はいくらか潤色した履

歷書を懷中にして惠美須商事の事務所

を訪れた。一着の背廣さえないのが、

私の心を卑屈にし限らない淋しさに襲

われのだつた。

はやる心を押えて應接室で待つ事暫

し、でつぶり肥つた重役型の支配人が

微笑を浮かべながら現れた。一瞬私の

復員姿に驚きながらも、履歷書を見る

と如才なく

「それは、それは長らく御苦勞様でし

た。中々大変だつたでしょう。幸い私

の方で

急に醫師

が一人必要

になりました

阪

大の方へでも頼も

うかと思いましたが

失業されている方とか、

復員された優秀な方でも来て戴け

ればと思つて新聞廣告したわけなんで



「す」
人をそらさない苦勞人の支配人に應
接されて私はす かり心が和やかにな
つた。

いよ／＼職がきまつた。支度金に貰
つた二万円で私は新しい紺いに身を躍
らせて指定された道頓堀の青玉ダンス
ホールの隣りにある薬局へ出勤した。
久方ぶりに嗅ぐ薬品の匂いは醫師で
ある私に堪らない郷愁の念を起さすの
だつた。

「いらつしやい、何に致しましてよう」
白衣に身を包んだ藥劑師が素早く應
待に出た。

「実は、惠美須商事の支配人の方から
承つて参りましたのですが、私は醫師
の伊豆と申します」

「あゝ、左様でございますか、貴方が
伊豆様で、先程支配人から御電話がこ
さいまして、よく承知しております。
さあ、どうぞ」

主人は私に高級煙草をすゝめながら
奥へ案内した。(然し、此処で働くとし
ても自分は藥劑師でなし、おかしい
なあ)私は不思議に思つてその事を訪
ねてみた。瞬間、彼の眼はきらりと閃
めたようだが、すぐ又前の靜かな調子
に戻つた。

「なあに、此の下の地下には設備の整
つた醫務室がありましてね。時々内へ
来るお客さんの健康診断をしてやれば
いいわけですよ。一日に五六人、多くて
十人位のお客で、月給二万円では、今
時悪くはないでしょう、先生」
店番を女店員に委すと、螺旋型の狹
い階段を先に立つて下りて行つた。下

は木箱が澤山積んであつて倉庫のよう
になつてゐる、右手にある扉を開ける
と、ひんやりとした冷たい空氣を満え
た部屋が二坪程の廣さで靜まり返つて
ゐる。その部屋の床板がバネ仕掛けで
ビンとはね上ると、更に十段ばかりの
階段が地下へ続いていて、その行き止
りには、ほのかに太陽燈の光りが投げ
かけてゐる部屋に隣り合せてゐる。

「此処が醫務室ですよ」

彼は扉を開く。ある、ある、雑多な
大きなガラスコが、試験管が、血沈
管が、冷たい底光りを発しながら、思
い／＼の姿で横わつてゐる。彼が鉗を
押すと、パツと急に明るくなつた。そ
して、あの病院獨特の薬品の臭味がぶ
ーんと鼻をついた。

「いゝ匂いだ、香水よりも」

私は醫師としての職業意識が躍つ
た。顯微鏡、ワッセルマン氏管を樂し
いものの様に撫で廻した。何か異様な
人造人間を思ふすようなトーマス分光
器に見入つた。

いさゝか私の仕草が芝居氣過ぎたの
か、彼は

「伊豆さん、これからいくらでも使え
ますから、どうです。もう此れ位にし
て上りませんか」

私は苦笑して主人に従つて外へ出
た。これが、私をしてこの恐るべき愛
欲の秘境、ナイト、クラブの主治醫と
して幾多の獵奇的生活を経験さす初ま
りであろうとは、神ならぬ身の夢にも
想像しないところであつた。

生れつき清潔好きの私は机の上の少
しの亂れも我慢出来ないものだつた。
試験管やガラスコを一つ／＼丁寧に拭
いて机の上にきちんと並べ立てた。

「コッ、コッ」

とノックする音が聞える。

「患者かな？」流石に私の胸は醫者ら
しい喜びと期待で弾んだ。

「どうぞ」

私は椅子から身体を起して答えた。

防音装置の厚い扉が音もなく開いて
二人の若い女を連れたマネージャーが
入つて來た。

「検査頼む、特に念入りに」

「まあ、ひどい人、念入りにだつて
さ、私達はレッキとした女優ですわ、
パンパンやダンサーとは格が違うの
よ。淑女として取扱つて頂きたいわ」

堅肥りの小柄な女が、おどけた調子
で息を鳴らした。それでいてその言葉
に腹を立てゝいる風でもなさそうに陽
氣であつた。

「これは失禮、しかし今晚の相手は普
通の紳士とは違ふからね」

「ちえッ、そんな事、誰だつて同んな
じよ。例の好色爺に遠くないわ。涎を
垂して目尻を下げせ、おゝ嫌だ」

身体を縮めて盛り上つた胸を押える
と、端麗な整つた鼻をすくめて、ク、
と笑つた。

そして私とばつたり視線が合つた。

「あら、先生交つたのね。いつ？」

「今日からさ」

「いやあ、恥かしい！」

頬を染めて身をくねらす様子は、恥
かしいというよりも、交つた男に肌を

見せる興味に露出的な嗜欲が疼いて
るようだつた。

「何に言つてゐるんだ。早くしないと検
査の結果が今晚の間に合わないじゃな
いか」

マネージャーにせき立てられて、よ
うやく二人はブラウスを脱ぎ初めた。
「貴方は、今日は外へ出てよ。そうで
なければ私達、診て頂かないわ」
シミーズ一枚になつた女が駄々をこ
ねた。

「ちよッ」
いま／＼しように舌打ちして男は出
て行つた。二人の女は抱き合つて、

「ホ、ホ、」と笑いながら
「ゆつくり診て頂戴ね、前の先生、と
つても亂暴だつたのよ」

重々しくカーティンを下した豪華な
診察室の方へ吸い込まれた。そこは快
適な温度と湿度に保れた特別室になつ
ていて、診察や治療をするのに使用さ
れてゐた。

私がゴムの診察手袋をはめた時、女
は診察台の上にシミーズ一枚で横にな
つた。成熟した女の強いむせかえるよ
うな体臭がぶんと鼻をついた。

此の時、何故か私の頭には、戦地で
検診をした数多の慰安婦のことが、く
つきりと浮かび上つた。トリッベルの
心配はなかつた。スピロヘータの検出
の、ワッセルマン氏反應を行うために
血液を採つた。

痛たそうに顔をしかめた女は、よく
脂の乗り切つた腕にくつきりと残つた
針の痕に唾液をつけて揉みながら、
「あゝ、お金儲けも樂じやない。でも

私達はまだいゝわ、別に苦勞もせず楽しみながらの商賣だから」「君達は、何をしているの？」私は大方見当はついていたが、とぼけて聞いてみた。「先生、知らないの？此処は青玉ダンスホールの地下室よ。これからずっと



下の川底を向う岸へかけて、そりや素晴らしいナイト・クラブなの。お客は上流階級のお歴々。先の宮様も、銀行の頭取も、新聞社の社長、電鐵会社のお偉方に、お役人。私達五日に一遍だけ出るの、勿論アルバイトよ。性病なんかあつたら大変でしょう？だから先生に診て頂くのよ」「そうよ。川向うの宗右衛門町の料理屋の地下迄、続いているの。若しもお客さんに性病でも移したつてことになつたら、私達未來のスターや少女歌劇の娘さん達の経済的破滅よ。」私は思わず唖つた。そして我が身の甘さを嘲笑したかつた。勿論私とても

杓子定規の道学者の寝言のようなことは思つていなかったが、この様な秘境が都会のド真中にあるとは想像もしなかつた。漸次冷静になつた頭で、この肉慾地獄のナイト・クラブの全貌をきわめようと決心した。それは若い血のたぎる好奇心の現れでもあつた。それから私は、至極眞面目に自分の職業に精進

した。

元談口一〇叩かない私●眞面目な態度は、そこで働く女たちの評判を勝ち得たし、それにつれて、主腦者の信頼も高くなり、今迄入れなかつた地下の社交室へも自由に出入りを許されて、マネージャーや主人とも親しく口を聞くようになった。

然しこの社交室迄は、ありきたりの地下の喫茶店と変わりなかつたし、若し警察の手が入つたとしても、ここは問題になるような設備はなかつた。私は、その奥の地下十数尺の秘密室のクラブへ入れて欲しいと主人に頼んだ。(まあ、一應支配人の泉さんに相談してからにしましょう)

彼はあつさりそう答えた。二三日経つた或る日。血沈を調べていた私に、主人は笑いながら入つて來た。「この間の話。OKだ、すぐ行こう」

醫務室の隣りの部屋、部屋と思つたが、その部屋全体がエレベーターの箱になつていたので、検診を受けに來た女もこゝ上つて來たに違ひなかつた。丁度、私のいつも居る部屋の眞下であろうか、或はエレベーターになつた部屋が横滑りして、とんでもない所へ行つたのか、それは私に分らなかつたが、扉を開いて出た所は、ウールの絨緞で張り廻された地下道だつた。

十米ばかり歩いた所で再び扉にぶつかつた。何んの感情も現わさない嚴密の温氣もなければ地下特有の抑えつけられるような悪い氣持もない、攝氏十五度位の快適な氣流がそよそよと一

定の速度で流れていた。

右手のボタンを押すと、さつと明るい光線が差し込んで、眩しく感じる私の目に、主人にちらつと会釈をする一人の逞ましいドアー・キーパーが映じた。私が醫務室で検査をしたのが四時半頃だつたから、もうかれこれ五時近いだろう。

「もう舞台では初まつていますよ」その男の聲に私は、次のホールへ入つた。

赤、綠、青とネオンの交錯が踊つてゐる男女の姿を妖しく浮かび上らせてゐる。

八人ばかりの紳士をとりまいて花やかな嬌聲を上げている眞ツ白いドレス桃色のドレス、赤いソレイユに豐滿な肉体を包んだ女達、只それだけを見れば普通のダンスホールと変りないのだが。

紳士達は殆んど五六十一年配の男が多かつた。その脂ぎつた身体つきを見ても素性の知れる遊閑人種の集りだつた。

華やかなネオンに眼が慣れると、私はあつとカタズをのんだ。それもその筈、ホールの周りという周りは、薄絹のカーテンを下した絢爛たる閨房が幾組もの男女の限らない歡樂の哀愁を秘めて並んでいるのだ。

心の奥底を掻きむしるような音楽がフロアーから漂つてくる。ネオンが点滅する。身を焦す強烈な芳香、女の淫らな叫び聲に満された此の世の恍惚境が現出されているのである。私が今迄幾度となく検診した逞まし

い女体が荒れ狂つてゐる。咽せるようなセン情のメロディ。私は口中に溜つた唾液をごくつと飲み下して主人の顔をのぞき込んだ。

ジャズが急に狂つたようにが鳴り立てると、夥しく増えた男女の渦が、音もなく開いた扉の彼方に吸い込まれるように流れ出た。

隣りの部屋には舞台があつてスポット・ライトが明々と舞台の一角を照らし出している。

眞ッ白い薄絹のドレスに全身をさらけ出したエキゾツクな混血児が、はちきれそうな腰の線をあらわに、踊り出した。

野性味に溢れる活潑な手肢の躍動。女は一番流行したドイツの卑猥な淫歌を客に挑みかゝるように歌いながら、ドレスを漸次舞台上に投げた。肩にかけられた眞珠の首飾りがきらりと光つた。

女は汗ばんだ肌で舞台を下りてテールの間を歩き廻ると、皎々たるライトを全身に浴びて男達の前で踊り狂つた。まるで人魚の再来かと危ふまれる程の妖艶さ。

狂燥なジャズの音にのつて美女たちは満顔の媚笑を投げかけて若鮎のように跳躍する。

彫りの深い美女の浮き彫りが、舞台一杯に淫欲の構図を刻み込んで歡樂の修羅場は最高潮に達するのだつた。

踊りは終つた。スポーツ・ライトは消えた。

周りのネオンも徐々に消えて、死の静けさが、人間愛慾の姿を現出した。

た。

一瞬、私の脳裡に、負傷者が呻吟する野戦病院の光景が蘇つた。

次々に運び込まれる重傷者の救いを求める呻き聲、斷末魔の悲鳴、頭を割られた者、腕を飛ばした者。私は血塗磨になつて、應急処置を施していた。「あゝ」

私は歎息してマスターの顔を窺つた。流石中年過ぎた彼の顔にも脂汗がにじみ出ているのか、淡いネオンの光りにテラ／＼と光っている。

「君、驚くのはまだ早いよ。もつともつと凄う場面がこの奥で展開されているのだよ。」

私は主人の後について廊下に出た、丁度放送室のような、ふんわりとした絨緞の感觸が快く足に感じる。壁も部屋の中も、すべて防音装置が完全に施されてあつて、如何に騒いでも外界へ洩れる氣遣いが無いのだ。否この川底の地下であつて見れば尙更その憂いはない筈である。

いくつにも仕切られた部屋、そこには埋れるような大きなダブルベットが横つており、その背後には化粧台と三面鏡が底知れる光りを湛えて妖しい姿態を反射する。

すべての調度は紫檀を用いて一流の高級ホテルの一室にも負けぬものである。

酒池肉林という言葉は、この場面を表現するために作られたかと思われる地下秘密境の有様であつた。

三、



私はその夜から幾日間もの間、中々落ち着かなかつた。レトルトやフラスコのきららかな輝きの中に、あのネオン輝やく地下のクラブで繰り展げられる情痴の数々がスクリーンのクローズアップのように眼前に迫つて来るのだつた。

そんな思いに頭も亂れている私の前には今日も十八ばかりの若い女が、今宵の愛慾の調べを奏でるかのように、検査台の上に肉感的な体臭をふりまいてゆくのだつた。歡樂の果てた帰り際の觸診は最早や私には堪え切れない妖美というより凄惨なものであつた。一週間に一人か二人は性病が発見された。そんな時の女の悲歎は見ておれなかつた。

このクラブで受けたものかそれとも外の仇し男に罹れたものか私の覗いた所ではなかつたが、眞ッ白い臀部にベニシリンの筋注に吸り泣く女の姿は哀れであつた。「先生、何時治るの？一ヶ月もかゝつたら私困つてしまうわ」

「大丈夫、二三日さ、そんなに困るなら、こんな事止めればいゝじやないか」

「ではどうして食べてゆくの、三下女優の月給じや十日しか食べられないわ。此処は澤山お金頂けるけれど、一週間に一度だし、それに競争者も多いわ、どうすればいゝの？」

「まだ若い、恐らく二十才にはなつていないだろう女の思いがけない口調に、私は言う言葉もなかつた。」

四、

「先生！早く来てッ大變よ」

顔色を蒼白にし、女が荒々しく肩で息をしながら警務室へとび込んで来た。もう十時過ぎだつた。

「どうしたのだ？落ち着いて」

私はお客の腦溢血くらいだろうと思ひながら救急箱を肩にして、その女の後から地下へ下りた。

廊下を小走りに例の寢室の前に来た。

「何処の部屋だい？」

「其処と違ふの、もつと奥なの」

女は焦立つて私をせかした。その廊下を突き当つて右へ折れた所に五つばかりの部屋が並んでいた。

「ここよ」

「あッ」

女の指差した部屋のカーテンを押しのけた瞬間、私は思はず目を掩つて、だじくとなつた。

部屋の片隅のベッドには革の帯で後ろ手に縛られた女が背中一面をミミズ張れにされたまゝ氣絶していた。

私はすぐ女に人工呼吸を施してカンフルを射つた。

暫くして女は氣がつくと体温も上昇し出した。

「どうしたのです？」

傍に立つて心配そうに見入つていた先刻の女に訊ねた。

「えゝ、此の人の相手の方、時々こうなんで困りますわ」

あられもない自分の姿に氣がついて氣狂いのように泣きじやくる女を抱えて別室のベッドで安靜にさすと、さつき私を呼びに來た女と共に廊下に出た。

ホールや各個室では、何事もなかつたように、くすぐる様な嬌聲が甲高く洩れてくる。

それ以上は私にはもう正視に堪えなかつた。この情痴の世界に耽溺するのてなければ、如何に神經の太い人間であつても、もう此れ以上こゝに止まる事は出来ないであらう。

この奥には、更に刺戟の強い爛れるような歡樂の秘境があらゆる設備を誇つて対岸の色街迄続いているという女の話にも、私はもう見る氣力も失せて夢遊病者のように、ふらふらと入口の方へ歩いて行つた。

——終——



●七十七頁より
の時には、わざ／＼彼女を見に來る人さえあつた。

鳴りもせぬ三味線を、無雜作に抱えて、ちび下駄はいて一人前以上の騒ぎをした、そして母親に皆とられて犬が猫の様に食べさしてもらうだけだつたこの頃から戦争はだん／＼激しくなり、藝者の裾引き、日本髪が禁止になり、果は花街の女は徵用され、火の消えた様な淋しい街になつてしまつた。燈火管制がきびしくなり、夜店は禁止され、お里は稼げなくなつた。人通りのない公園の角で、ぼつんとたつたまゝお里は動かなくなつた。

悪夢の様な戦争は、終止符を打たれた花街は目覺ましく復興した。お里はどうしたか

十年一昔、まして流れの早い花街なれば、もうお里の事を知っている人はいない。たまたま知つてゐる人があつても多くの人に感動を與える餘裕がもうなかつた、彼女の事を言う人もなく見むきもされなくなつた。

終戦後、鶴橋のヤミ市は一躍名を賣

「誘惑撃退法」

嫌いな男と、例えば社長とか課長とかに無理につれて行かれたときですわねえ。あんなときには實際困つてしま

いますわ。だからわたしあんな時には月のものにしてうの。すると、男は狂的な顔をするわ。そして、

「冷水をのんでおくと一時間はもつものです」

つた。大阪中から人が寄り、賣り込み買ひ込みで賑わつた。煙草賣りや鹽賣りの女子供が、道行く人を呼び止める。

その雜沓の中でお里が坐つていたあのボロ三味線はどうしたのか、前よりうす汚い木綿の着物の八ッ口に両手を入れて、置き物の様に、ちつと坐つていた。相變らずのいがくり頭で

うす汚い乞食になつてまで生きていかねばならないあわれな人、敗戦に荒んだ人達はお里を見返る餘裕すづくまつていた。

黒髪長く美しい女に生れなかつたら、彼女はこんなにならなかつたのに、古い女と言ひ捨ててには、あまりに悲しい人だつた。

彼女がヤミ市のガード下に坐つてゐるのを見たのは、その日一日だけで、再び見られなかつた。そして彼女は、世間の視野から記憶から消えて行こうとしてゐる。

——完——

とこうなの。そういう時には、わたしは仕方がないからキリスト信者なるの。すると大概大丈夫だわ。

× × ×



息溜の會都

白話譚奇

信士寒郎

三平



第五十二話

マネキンガールの猛攻

或る美男の話

店の前で行列をして品物を買つたな

どというのは昔の夢。統制の大幅解除でダブつき出した品物の投げ賣りで俄然、宣傳戦は活潑になり出した。とりわけ百貨店の宣傳ぶり、そこで脚光を浴びてマネキン嬢の活躍は一段と凄まじくなるのだ。まあ、このデパートでもいゝから入つて見給え、田舎者ならビックリするよ。



ウロ／＼と歩いている君の鼻先に、ブーンと香料のなやましい匂い——。突然！いとも麗わしき娘が、サーツと電光石火の早業で、君の手を握つてくれる。若しその娘が心臓型なら、握つた君の手を絶対に離さないから。——君の胸がドキリ、ドキリ、——「如何でございます。アレ止めの舶來のクリームでございます。こうしてホンの少し塗つて寝んで頂きますと、朝お起きになると見違える様にツヤ／＼と滑らかになつておりますのよ——」そして君の手に塗るその拍手に、グツと一ツ、力を籠めて握つてくれるに違いない。君が逃走のチャンスを見逃したる良きカモと見られるや、横手から又一人の麗人が飛んでくる。「舶來ものに負けぬ乳液でございます。こうして殿方の御顔に塗つて頂きます

と、匂いもよく、お顔は見違える様に若さを増して参ります」彼女が必ずや、君のニキビ顔に頬を近づけて、優しい白い指で、ソツと君のヒゲ面の顎を快く撫で、くれるに違いない。

「まあ、いやらしい、失禮な、えッ？、今日手を握つて笑つてウインクして呉れたからだつて？、御冗談でしょ商賣と一緒にされた日にや、いくつ身体があつても堪らないわよ。さあ、さ、どいて頂戴、家で坊やが待つてゐるんだから——。それとも、明日、又クリームを買つてくれるんだつたら、そのかわりお負けに一つ余計に手を握つてあげるからね」そして彼女は君に見向きもせずさつさと黄昏の歩道を横切つて行く。えらい詳しいねつて、いやボクもね実はそれでフラれたのさ。

のボマードは此の度新発売の、一度使つて頂きましたら永久に忘れることの出来ないいい匂いの上、おグシの榮養になるのでございます。どうぞお試し下さいませ」

第五十二話
エロ・サービスの世の中
M君の話

彼女はいきなり君のフケだらけの頭髮にベツトリとボマードを塗りつけて、ニツコリ笑つてくれるだろう。



「唯今、五百人の麗嬢大増員——」僅か三百円で身も心もとろけさせる超サービス振りに、こんな地下鐵の廣告に、この御時世に三百円は安いと、ついフラ／＼

と出掛けた。

扉を開けて入つて見ると、たつた十二三人。それが揃いも揃つて、くたびれた可笑しい御面相の連中ばかり。仄明かい電氣の下で、鳥肌立て、人待顔に坐つている。

何にしる表を通つただけでは、ジャンジャン甘いスイングが鳴り響いて、さも景氣よさそうで、看板には

「麗人のハートは震えて、貴方のお越しを切なく待ちかねて居ります」

「まあ、お久し振り、いらつしやい」

「始めての筈だがと考へたが、野暮な事、それが向うの術らしい。忽ち、帽子とり、外套を奪ひ、手とり足とり、命までもと、クツシヨンへ連れ込むと半裸の女、全裸に近い娘がグルリとボクを取り巻く。テヘツ、三百円のつもりなんだがなあ——」

と心細くなつてオゾオゾ例の三百円の口を切り出すと、持つて来たのが、薄いコーヒーと干乾らびた生菓子で二片。

「ねエ、おビールにしないさいよ。私ものみしたいの、じやあお通しして来るわね——」



何も言わない先ビルが、ジャンク栓を抜かれて人の氣も知らないで、泡を吹いている。泡を喰つたのはボク——「ト、トンデモないッ、」

ゲソツとしたとたんに乳バンドだけの黒いドレスの女が膝ののりかゝつてくる。肉体は蔽れてこそ魅力を感じるものとつくづく知つたね。

三四人の女の子が寄つてたかつてグリグリ皿の様な乳房を胸に押しつける。トホッ、「五百人はどうなつたの？」

「唯今、増員中なの……」イカレタ。やがて勇猛果敢なのが盛んに、ボクにタツクルを挑んでくる。辛うじて勘定を頼んだらしめて三千八百円也。若し二階のスペシャルルームへでも連れ込まれたら、ボクの一ヶ月分の給料は軽く飛んでしまふところだつた。三百円の筈が三千いくら、一桁ぐらゐ間違えて、ボクは身も心もとろけるどころか、シヤチコバツテ飛び出した次第さ。

とんだ死亡廣告

あいつ程、女にモチなかつた奴も珍しいよ。なまじ文學かぶれをして、小才を鼻にかける癖と、女の腐つた様な男娼顔負けのヘナ／＼した物腰は、いかなる女も一度でアイソをつかしてしまつたらしい。

したから一緒にしてくれと申しよりました。が、アンタ阿呆らしい。まさかパンパンのそれも撰りに撰つた醜女を何んぼ何んでも嫁に出來ますかいな。その學句がアドルム錠を三百錠も飲みよりまして——成程、それなら藥石効有るわけ！。正直なおヤジさんだ。それにしても春夫の奴、女のような所作神經が相手に男勝りの女を見出した時、色情倒錯の果、無我夢中になつたものらしい。

春雨のビショ／＼と降りつゞく家戀しい黄昏。——、満員電車に揉み苦茶にされながら先刻買つた夕刊新聞をやつとの思いで抜けてフト廣告欄を見た途端ボクは思わすハツとして目を凝らした。

「愚息春夫儀、此度藥石効有り三月二十六日死去致しました。平生の御厚誼云々……」



第五十五話

娘大いにアワてる

或る男の話

奈良唯一のメインストリート三條通りの郵便局の前の横丁を少し許り入り込むと、傳香寺という古めかしいお寺がある。

裸地藏で名高いのだが、今度この裸地藏さんが子供を産んだ。さすれば女性に違いないと、途端に人氣があがつたが、裸女地藏さんなんて、アプレ派も一寸顔負けのていだ。

第五十四話

小川君の話

無毛症は文明人の證據

門 好 太 郎

いや本当に産んだのだよ。もとく安産の地藏尊で、子實のない奥様連は遙々やつて来ては、勿体なくも地藏尊の下腹部を撫でるもんだから、彼女の下半身はすつかり痛んでしまつた。で、修理をしようと思つた彼女の内開腹手術をしたところ、なんと大小とりどりの子佛像が昔のまゝの姿で現れ出たのだから、流石その名に背かぬ子實地藏尊だと噂とりくんだが、安産の神様についても、もう一つ面白い話があるのだ。

櫻井から櫻井線に乗つて奈良へ帰る途中、長柄(ナガラ)という小駅から、主食の買い出しらしく三人の若い娘が手提袋を一杯にふくらませて乗り込んて来た。ベチャラ／＼喋べるのを聞く、どうやらこの土地は初めてらしい様子の大坂ツ子だ。丹波市を過ぎ、機本(イチノモト)も過ぎて次の驛に差しかゝる汽車が止ると同時に、「帯解けえ——、帯解けえ——」という聲、ギョツとして腰を浮かした彼女達、口々に、

「まあ、どうしましょう。私お腹に二升巻いてあるのに、帯解けたつて——。恥しいわ、帯解けたつて云うから、裸になるのかしら」としきりに慌てゝのひそ／＼聲。しかし汽車は何事もなく発車した。彼女達一様にホツとした顔付きで窓を見た途端、急に照れ臭さそうに、「なんだ。オビトケつて駅の名じやないのバカにしてるわ」しかしだね。この帯解駅を降りると右と左にある二つの寺の名が、片や

「帯解子安地藏尊」片や「帯解子安地藏尊奥の院」とて互に己れこそ本物顔に、安産祈禱を賣物にしてゐるんだが……。帯解けと妊娠——。何かしらそこには、いわく因縁がありそうじやないか、お詣りして子宝を授る由、女殺延命院々「妊娠湯」の正体じやないが、底には底のありそうなお寺だと、君思わないかい、古都、奈良はそんなところなんだ、

電車やバスに乗つていて、よく気がつくことなのだが、顔だけは惚れ惚れする美人でも、吊皮を握つて腕に、もやもやと濃い生毛がはえてゐるのを見ると、一ぺんに興ざめがするね。

まえ。ゴリラと變りないほど、身体中に毛を生やしてゐるからね。レビエーの踊り子が、腋毛をすつかり剃つてゐるのは、誰でも知つてゐるだろう。

邪魔になると言つても、過言ではないものだ。無毛症の女を妻にすると、不運を抱く等といったものは、凡そ舊時代の遺物である迷信以外何物でもありやしないんだ。

「往來のはげしい道には、雑草は生えない」といふしやれた諺があるからね。もしも君の彼女が無毛症だつたら言つてやり給え。

それから、もう一つは襟足に生えてゐるむだ毛もいやだなあ。男の頭髪やヒゲだつてそうだ。散髪屋へ行つてきちんとして髪を刈りヒゲを剃り、そのあとが冴えて白い皮膚を見せていけば、いわゆる男性美を感じさせるが、ふけたらけの長髪に、ぶしようヒゲの伸びたのなんかいやなものだよ。

いさつぱり取つてしまふことだよ。ところが、世の中には、あるべきところに毛なき憐れみとか言うのがあつて、お嫁入り前の娘さんを困らすことが多いらしいね。

考えてみれば馬鹿な話だよ。熊やゴリラじやあるまいし、着物を着て、身体中を包んでゐる人間がむだ毛なんて、あつても、なくつても、性生活には何のさしさわりもないんだよ。

「あなたは一歩進んだ文明人の素質を生れながらに持つてゐるんです。おゝ、わが太陽よ」とね。

アメリカの紳士は毎朝きれいにヒゲを剃るのが身だしなみらしいが、とにかく人間は文化が進むほど毛が少くなるらしい。その証拠に文化のおくれた北海道のアイヌや、台湾の生蕃を見た

妊娠にもお産にも何の關係もないし、又、盲腸炎の手術をやるときには、看護婦がぞりぞり遠慮なく剃つてしまふ位だから、むしろ



|| 有るべきところに毛無き悩みに答ふ ||

梅田の女怪たち

肉体リンチと情痴

黒江潮
と比呂玲子(絵)



1 ポン引の娘の純情

「ね、三度目だ。さあ、これで別れよう。」

私はそういつてすべつこいアゴをあけ、彼女の唇を離した。澄んだ眼の色、ぼろりと頬をあからめて、まるい頬を、火のようにほてらしていることも、月のないガード下の

眞ッ暗がりの中ではあつたが、私にはよくわかつた。まだ十代の新鮮な感觸得難い寶玉のような貴ささを感じて、私の腕に力がこもつた。サツと通り魔のように周囲に人の氣配を感じたか、その時、音のかたまりを叩きつけるように、頭上を省線電車が走り過ぎ星の光りが、何かに反射して彼女の濡れた唇がチカリと光つた。

彼女は、胸から上をそらすようにして、首をまげ、人の氣配に、警戒の眼をくばつた。

私も、そのままの姿勢でヤミをすかすようにしてガード下から北へのびる街路の方をながめて息を殺した。人が立つている。たしかに数人のものが、私たちをとりまくように監視している。彼女はギョツとしたのか、ケイレ

腰巻と猿又

(四景)

一景

アパートの屋上洗濯物干場の一部、藤原の干場と川村の干場。藤原の干場には、こしまきとさるま、たが乾してある。隣りあつて、川村の物干には、こしまきとシャツがほしてある。

春の空は朧ろに霞んで、西風が強く吹いて洗濯物がひら／＼と翻つてい

……(間)……

【藤原の妻、綾子(肉感的な女眞白にお化粧して簡單服を着ている)が屋上に上つてくる】

綾子(空を見上げて)強い風だこと(干物に目をやつて)あらッ、(川村の干物に干してある妻の松子の赤い腰巻が、風の爲にづれて、藤原の洗濯物の上に重つてハタハタと靡いている)

綾子、まあ、ケがらわしい。馬鹿にしてるわ、隣りの奥さん。うちの人の物の側に、自分のコシマキを干すなんて。

(ちよつと首をひねつて)この頃馬鹿に、いつでもお化粧しているし、それに此の間も、「お宅の御主人は親切ですわ」なんて、お愛想を言うし、……藤原だつて

ンがビリビリと全身を走るのが、私のからだにも感じられた。

「ふふん、もうすんだのかい。」

鼻を鳴らして、そうはきすてるように暗がりの中から女の聲がした。

どぎついその口紅が、人喰い人種のような。それが暗がりの中に立つ相手の女の手によつて、パチンとつけられたライター火で、はつきりわかつた。パンパンだ、これはちよつと面倒なことになったと思ひながら、ヤミに動く相手のタバコの火を、注意深くみつめながら、ポケットから幾枚かの百円札を、そつと彼女のスエーターのポケットにしのばせた。

実は、その夜、凍るような星空を眺めて、櫻橋の青のシグナルを待つてゐる間に、ちよつと飲みたくなり、久平のれんを押して、コップ酒をいきなり二、三杯あふり、ふらふらと驛前までくると、彼女に呼びとめられたのであつた。

「遊んで行かない。いい娘、世話しましょう。」

「おツとツとツツ。」

と私は、リンゴの皮かなんかとたんに踏んじやつて、ツルリと滑りながら身を泳がせて彼女に、どすんとたれかかり助けられて、やつと姿勢をとれどした。そんなキツかけで妙に親しさがよいかつたのかもしれないけれど、夜目に光る彼女のヒタイが静かで美しい。

大阪驛の赤いネオンの灯に映える唇が、ルビーのようにうるんで見える。お白粉けはないが、素肌の美しさが清

潔で匂うばかりであつた。こんな少女が、ボン引するなんて、私は不思議に思つた。

「キミならね。」

私は、ふとそういつて、彼女の顔をのぞきこんだ。

「わたしどころじゃない。とてもサーヴィスのよい、きれいな娘がいるわ」ませたいいかただった。いつも口グセになつてゐるコトバに違いなからうが、でも、彼女のなにかひきつけるような魅力に、私はついていつて見る氣になつた。

「ホテルかい。」

「いいえ、違うわ。」

「素人宿かい。」

「ノー。」

「じゃ、どんなところだい。まさかリソタホテルじゃあるまいな。」

「うん違うわ。」

彼女は、私の腕をかかえて、さつさつと足早やに、歩いて行く。共同便所のところを廻つて、まづすぐ路次に入つていつた。ひとところは、ちよつとさびれたドブ街だつたのに、近ごろは、再三再四の奇襲取締りにもかかわらず、さすがに雨後のタケノコのような生活力だ。いやドブコク紳士のいかな多きことよ。

「なあんだい。ドブ屋じゃないか。」

梅田迷路の一つ、ドブ街に入つたら裏か、表か、側面か、てんで見当がつかなくなる。ドブかどぶか知らないが、腐敗したような妙な悪臭と小便くさい路次から路次を抜け廻つて、とあるドブ屋に続く裏座敷。えらいぐるぐ

るとまわり道をしたけれど、ここなら、この路次をまづすぐ抜けりや、もう道路じゃないか。ウフウフウフと笑いがこみあげてきた。このあたりならどんな裏の裏まで知りつくしてゐる私なんである。三疊ほどの部屋が、いくつもあつて、ちいぢやなチャブ台を出して、焼ブタか湯豆腐なんかで、ドブを飲む仕掛けになつてゐる。

彼女は、張りたての障子をガラリとあけた。

そして私の顔をみつめて、

「どう、氣にいらぬの。」

という顔つきをして見せた。女が寝てゐるのである。長じゆばんからむつちりした肩がはみ出している。

私はじつと顔を近づけて見た。二枚重ねの眞赤な敷ぶとんに、ふじ絹かなんかの眞新しいかけぶとん、疊も安物の表だ、ど新しい。

寝てゐる女は、島根縣の田舎から家出してきたといふかつて私と飲んだことのある酌婦であつた。

まるぼちやで、べたべた厚化粧してゐるけど、口の臭い下品な娘だつた。

ノドにホータイを巻いてゐる。女は天井を向いて、眼をつぶつたままでふりむきもしない。

「いやだよ。」

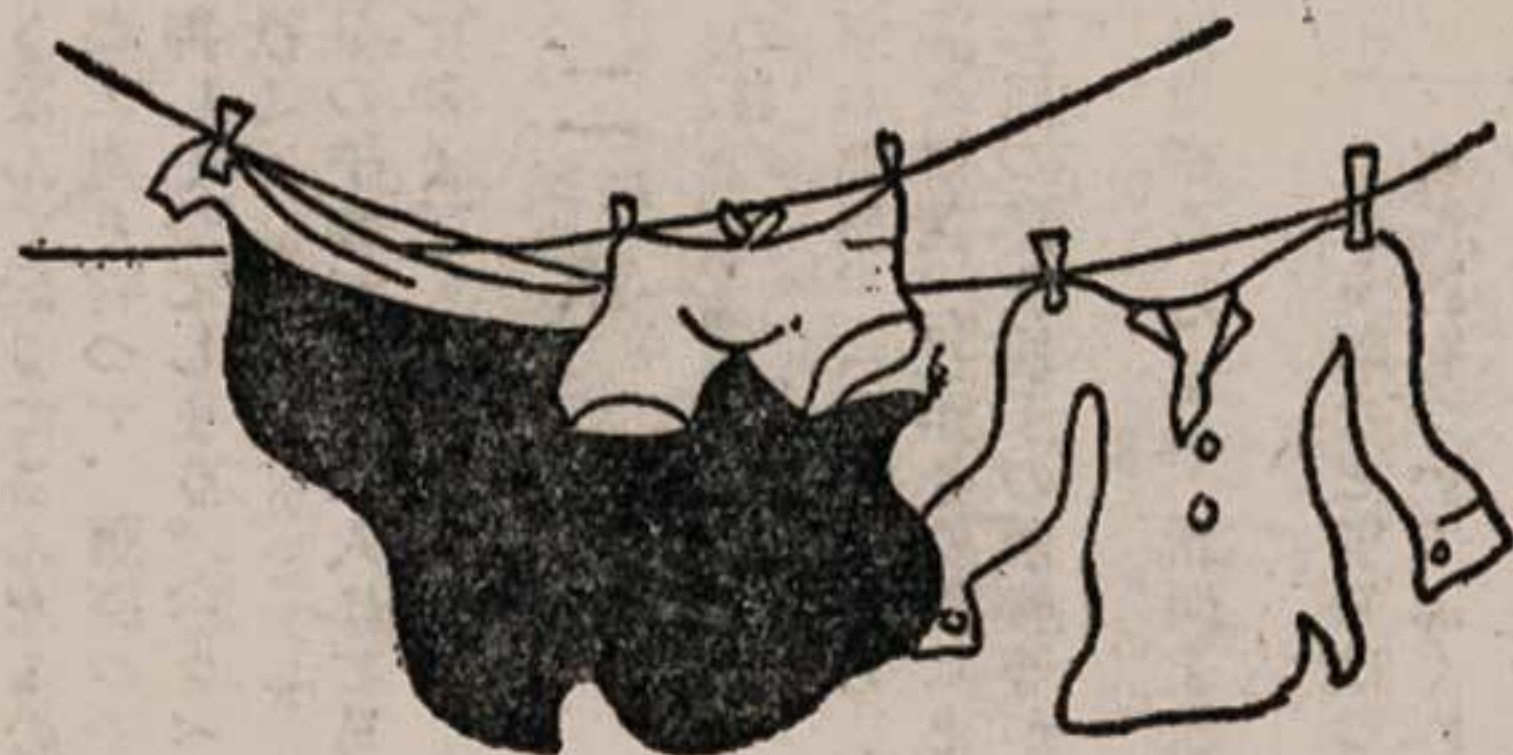
私は、彼女の耳たぶに、熱い息をふきかけた。彼女は、そつと障子をしめ私の手をとつてさらに奥へ、引つぱつて行つた。女の泣き聲が聞えてきた。

「コキユウのような哀れなうぼいしのび泣き。障子が立てきつてあつて、中はのぞけない。無理なことをして女をい

何んだか此の頃着かないようだし……若しや……

ええ、くやしい。

(地段駄ふんで物干竿にかけより、川



村の干物を片方につきやつて勝手に洗濯物の位置をかえる)

綾子、ほんとに人を馬鹿にしてるわとプリプリ怒りながら降りてゆく

……(間)……

(風向きが変つて東風になる)

【川村の妻松子(丸雷に結つて、壁のようになく塗つてゐる)上つてくる】

松子(空を眺めて)花曇りだわ(目を物干におとして)まあ、ケがらわし

じめているお客か。ビシリ、ビシリ肉をうつつ音。きしむ音。何か殺氣のようなものを感じたが、ほどよく酔いがまわつてきている私には、むしろ獵奇的な慾望の方が、頭をもたげてくるのであつた。

私は、つきあたりの部屋の障子をあけて、腰をかけ、彼女は私の前に立つて溜息をついた。

「部屋はあいてるけど、ほかに女はいないじゃないか。」

「しばらく、まつていてよ。誰にしよるか、いま考えているのよ。」

「待てるもんか。キミはどうだい。」

「わたしはダメよ。」

彼女は急に聲を落した。

「内しよ、ね。」

そういつて、彼女は、つばきのつぼみのような唇を、そつともつてきた。甘つたるい匂い、私はぐつと抱きしめて、それをゆつくり受けてやつた。もうこれでよいと思つた。これ以上は、駄足だつた。

「帰るよ。」

私は、百円札を二枚、彼女の手に、にぎらせた。彼女は、私の耳に唇を持つてきて、コマクをくすぐるのだつた。火のように燃えている彼女の肉体を意識した。

「ううん、よいとも。」

私が立ちかけると、いきなり彼女は、はげしく憤りながら、私の肩をおちはじめた。

「あんた、なんだい。こんなところまできてひやかしかい。さつさと帰りやがれ、さあまごまごしないで早く出て

行け。」

金切聲を出して、果ては私を突き出すのだ。ボン引きである彼女と私のヤミ取引は、絶対に許されない戒律の一つだつた。そうして、彼女にこすかれ押されて道路へ出た。彼女は、そこではじめてクスリと笑つた。

「すみません。悪く思わないでね。」

そうささやいた。彼女の良心であつた。私は妙に愉快になつた。私はひとりの味方を得たような氣がして、そのまま別れてしまふには、おいしい夜であると思つた。もつと突込んで見るかな。私は、彼女の手をそつとつてにぎりしめた。

「ねえ、もう少しつきあわないかい。」

「そうサボつてばかりいられないわ。」

見つかつたらやかましいの。」

「だつたらね、ガードの下でもう一度新しいお客として、会うことにしようじゃないか。」

彼女はうなずいた。舗道が凍てついて、カツカツと鳴つた。彼女はズボンのポケットに手を入れたまま、走り出した。白タビに下駄が印象的であつた。

「どうでツしやろ、いい娘いまッせ。」

目白押しに路上に立つてゐるのは、これぞ大阪の大玄關情痴梅田の関をあずかるボン引ばかりであつたが、私はそれをふり切つて、見事關所破りに成功、まつすぐガード下に行つて彼女を待つていた。すぐ彼女は現れた。私は彼女のゴムまりのような腰を抱くようにしてガードを抜け、ガード横の暗い

い。風が強いから若しや飛んでやーないかと思つて來たら、お隣りの奥さんもあんまりだわ。

（風向きが變つた爲に、川村のシャツの直ぐ側に綾子のコシマキがひら／＼翻つてゐる）

松子、あゝ、悔しいツ、自分のコシマキを人の主人のシャツにすれ／＼に干すなんて、

あの奥さんには用心せなけりや、ならんわ、宅だつて隣りの奥さんの洋装似合うなんて云つてゐるんだもの、（干場に走り寄つて、藤原の干物を片方へ押しやつてしまふ。ベツベツと唾をかける）

（自分の干物だけを取入れて足早やに降りてゆく）

二 景

その日の夜、

藤原の部屋、（アパートらしく部屋の片隅に書棚、机がその横にある片方には藤原の洋服綾子の着物等が掛つてある。）

藤原は寝ころんで新聞を読んでゐる）

（妻綾子まだ食器など散らばつたまゝのチャブ台に肘をついてふくれた顔をしている）

綾子、ね、あなた、私、今日あなたに話があるの。

藤原（黙つてゐる）

綾子 あなた、ほんとに今日は聞きたいことがあるの。

路次に入つたのであつた。
私たちは、すぐに取りかこまれてい
るとすれば、パンパン宿を出るときか
ら尾行されたのであろう。取りかこむ
がごとくジリジリ迫ってくる夜の女た
ちの群れのひとりのタバコの火がボー
とすてられ、踏み消された。
五、六名はいるかな。でも相手は女
たちばかりのようである。あきらかに
挑戦の氣配が感じられた。監視の輪が
ジリジリとせばめられてきたからであ
る。女たちのほげしい息づかいを感じ
た。

2 夜の女群と格闘す

「ベニ子じやないかい。こちらへおい
で。」

彼女は、ベニ子という名らしい。私
のうしろにかくれるようにして、ふる
えている。

「こつちへ出ておいで。その男は、わ
たしらがつちめるから。」

彼女は、黙つて、小さくなつたまま
である。

「せわをやかせる娘だね。こいつ、に
くらしいこと、しやがるじやないか」

女の一人はいきなりぐつと腕をのば
して、ベニ子をひき倒そうとした。

「待て、ちよつと待て。」

私は、ボーイと女の腕を軽くはたいた。

「あいたツ、いたいわよ。」

女は、悲鳴に似た金切聲をあげた。
軽くさわつただけでも、唐手術の修行
がものをいつた。

「君たちは、みんな女かい」

「それがどうしたの。女だと思つてな

めると
承知しな
いよ。」

「ベニ子を
どうするとい
うのかい」

「ベニ子は、こち
らのもの。おまえこ
そ、いらぬ干渉する
と、めんどろなことに
なるよ。」

そのときだつた。再び

頭上を叩きつけるように、

電車が通つた。私はくらく

らと目まいを感じて、何か非

常に憎悪に燃え立たないではい

られなかつた。私は頭を左右に

ふりながら、正氣であることに自

信をもとうとした。

自信はぐらぐらと足もとから、くす

れはじめた。もはや意識をささえるこ

とは出来なかつたが、その境目で私の

ありつたけの狂暴性が爆発した。手と

足を同時に躍らせて群りつく獲物に立

ちむかつていた。

ふれるものは、かならず傷ついたで

あろう。キヤーツキヤーツというベニ

子のしぼるような叫びを最後に、私は

完全に意識のけん外にノック、アウト

されていた。

私は最初強烈な刺激物で鼻を打たれ

唇がしびれるのを感じ、多くの腕や足

がからみついて、私のからだを倒そう

とするのをはつきりと意識している。

麻薬だ。それはたしかに麻薬の匂いだ

つた。私は決して、相手を女だともく



びつたのではない。二、三人を突き倒

して、ベニ子を安全なところへ逃がし

てやろうと思つただけであつた。

しかし、彼女たちは、單にからいば

りではなかつた。それぞれ背後に強い

力をもたなければ、自分以上の何かの

武器をもつてゐるものだ。麻薬もその

一つであつた。

相手の男を強引に自分の客として、

つれ込む最後の手段に用いられること

もあつた。この客は手こわい。しかし

金をもつてゐる。または金めになるも

の、たとえば時計とか、寫眞機とか指

輪とか、何かを身につけてゐると思つ

たら、強引に、それを獲得するため

に、肉体の押し賣りをするのであつ

た。

わたしがこれと見込んだら、絶対に

ものにして見せるわよ。彼女たちは、

藤原、何んだ、今日に限つて話があ
るなんて。えーと、明日は實くじのチ
ュウセン日か、(新聞をひつくりかえ
す)

綾子(藤原の側へにじり寄つて、腰

ゆすりながら)ねえ、あなたつたら。

藤原(びつくりして)何んだい。

綾子、私、悔しいわ。

藤原(綾子の方を向いて)いつた

い、どうしたつて言うんだい。わけが

さつぱりわからないじゃないか。

綾子(すねて)ね、あなた。隣りの

奥さんどう思う。

藤原、いつも奇麗にしてるじゃない

か。

綾子、きれいだけじゃないでしょ

う。あなたお隣りの奥さんとどこかへ

行きやしない。

藤原(馬鹿言え(どなる))

綾子、そんならよいんだけれど、今

日物干へあなたの洗たく物を干してお

いたら、知らぬ間に隣りの奥さんの腰

巻が、干してあるじやないの、穢しい

つたら。

それに此の間だけけど「お宅の御主

人は親切ですわ」なんて言うんですも

の、私、今日一日は、何んだか、悔し

くて、くやくして仕方がなかつたわ。

藤原、馬鹿も休み休みに言え、お隣

りの奥さんには、此の間、たつた一遍

逢つたきりだよ。階段で何か大きな買

物を、重たそうに提げていたから、一

寸手傳つてあげただけなんだ。

綾子、でも、今日の物干、わからな

いわ。

藤原、風が強かつたから、干物がづ

そういつてその体験を語つたことがあつた私はうわの空でいきのがしていたが、私がその実験になつて見て、はじめにははんとその意欲の猛々しさに圧倒させられないわけにはいかなかつた。

「梅田娘」は凄いだぜとまた、私は彼女らの生活力のたくましさをたたえねばならない。しかし私は、被害者のひとりである。内心、彼女たちを殴り倒してやりたいような気持ちで、まだ残つてゐるのである。思慮分別や法律がこわくて殴らないのではない。ひとたび、機会を失つたら殴れるものではないけれど、何かキツかけをつかもうとしてゐる気持ちも少くとも私の心の半分は占めていた。

「と、うまいこといつて、君もさんざん殴つたひとりじゃないかい。」
「ううーん、わたしは、ただ見ていたのよ。でも、あんまりだわ。いくらお酒によつていても、あんなに、女たちを、いじめるものではありせんよ。」
「いじめるつて、ボクのことかい。じよ、冗談じゃないよ、それは反対じゃないか。ボクをいきなり昏倒させたのは、一体誰なんだ。あれはきつと麻薬だよ。三時間あまりも、意識がとぎれてしまつてゐるんだ。」

意識が回復したとき、私は、素ツ裸にされたまま、一人で寝かされていたのである。からだの節々に、鈍痛を感じる。安普請のベニヤ板の天井が、風もないのにミシミシと鳴つた。床もなければ何一つ調度品もない殺風景な部屋だつた。例のドブ屋の奥座敷のよう

であつた。

「あれから、どうしてここへ連れてきたんだい。」

「あなたは泥酔して、わたしたちの仲間を、殴り倒したわ。危なくてしかたがないので、わたしらが、よつてたかつて、手をとり、足をとつてリントクに乗せ、運んできたのよ。よつぽど強い酒を召しあがつたのね。まるで昏倒したように意識不明だつたわ。それでヒロポン打つたのよ。そしたら、やつと眼が覺めたつてわけよ。ねえ、あなた、酔いが覺めたらとても見違えるように、やさしい方ね。」

「さんざん殴つたらうえ、こんどはどうしようてゐるのかい。」
「いやよ。そんなに疑つちや。大事なわたしの彼氏を殴つたりなんかしめんわ。」

彼女は、私の意識不明の間に、勝手に私を自分のものにしてゐるのであつた。チエツ、この心臓娘が……と思つたが、えいままよ、勝手にしやがれという氣になつてゐた。

「ねえ、もう遅いわ。お風呂にお入りになりませんか？」

「ああ、入れてもらおうか。」

彼女は寢床の中から出て、その亂れを直した。素足のカガトが櫻色をしてピカピカ光つた。牛乳のように白くなめらかな足、薄桃色の銘仙の袷が、彼女をすつかり素人らしくして、いやな感じではなかつた。

「ちよつと、お風呂みてくるわ。」

彼女は、コトコトと狭い階段を降りていつたが、またすぐ上つてきて、踊

り場に上半身をのぞかせながら、
「ちようどいい湯加減よ。さあ、早くそのままいらつしやい。」

というのである、私は起きあがろうとして、ううーん、腰のあたりのウズキにうならざるを得なかつた。私のしかめツ顔を見た、彼女はすぐやつてきて、私の脊中へ手を回し支えるように起き上がる手傳いをするのであつた。

「痛むの。」

「さんざんな目にあわせやがつたな」私は齒を食いしばつて、起きあがつた。腰から下にかけて、動脈が浮きあがつたかと思われるほど、無数に、何か細いムチのようなものでしばいたあとかあるではないか。無意識三時間という恐ろしい不安がいまさらながら私の頭を支配しはじめた。

彼女は帯をときはじめた。そしてくるりとぬいで寝衣に着更え、私の崩れそうなかからだを支えて湯殿へ案内してくれた。何の装飾もない、だが眞新しい木製の風呂であつた。私がザブリと先に入つて、ヒリヒリとヤケ火ばしをあてられるような全身の痛みにたえしのんでゐると、どつしりと大がらの彼女の裸身があらわれた。

娼婦とは思われないほどの均整のとれた肢態を、スルスルとすべらすごとくに、私の傍に沈めるのであつた。湯はたつぷりあふれるほどあつて、明るい電燈に、底まで透いて見えた。

「今晚、ゆつくりマツサージしてあげましようね。」

甘つたるくからみつくような彼女の言葉を、私は目をつぶつたまま、聞き

れたんだらう。

綾子、そうかしらへ藤原の膝へ寄りかゝつて、あなた、怒つて？

藤原、別段怒つてないよ。綾子をおいて浮氣なんか出来るものか。綾子、あゝ嬉しい。安心したわ（藤原の膝から、よじ登るようにして、流し目をくれる）

三 景

二景と同じ日の夜。

川村の部屋（藤原の部屋と同じ、だが調度など幾分変つてゐる）

川村楊子を使いながら、コーヒーを飲んでゐる。

川村、ぬるいね。

松子（食後の器物など炊事場へ押しやりながら）勝手に沸したらよいわ。

川村、どうしたんだい。今日は帰つたときからぶりぶりして、

松子、話せというのなら話すわ

川村、何か僕がお前に氣に入らないことでもしたと言ふのかい。

松子、そうかも知れないわ。

川村、おかしい奴だな。今日に限つて。

松子、だつてあなた、お隣りの奥さん、何かあなたを迷惑したんでしよ

う。

川村、なぜ隣りの奥さんなんて、別に話したこともないじゃないか。

松子、でもあなた、此の間、隣りの奥さんの洋装よく似合うと言つたでし

ながしていた。

口をあけて白い歯をのぞかせ、笑うたびに、貝の足のような舌が、敏感に動いた。

私は反抗しているのであつた。白獸たちの挑戦に、私はすでに昏倒し、無意識のうちに、いかなるリンチを加えられたかは、はつきりその事実こそつかめないけれども、無数にムチを加えられた傷痕を歴然とつけられているではないか。畜生ッ！私は、カツと兩眼を開いた。笑っている彼女が赤い口の奥までのぞかせて、私のアゴの下から眼を細めてうつとりと、何かを求めてもだえている。

「畜生ッ、白獸め！」

彼女は、荒くれ男や特攻隊くすれにまじつて、敗戦後すつヤミ米の買出しをしていた。野越え山越え、あるいはトンネルや河を渡り検問所を破つて困難な米運びをしていたくらいだから強いのは無理もない。列車の屋根にはいつくばつて走つたこともあつた。それがいまはやさしい絹のような手に返っている。

「この力で、意識を失つた俺を、よくもさんざんなぶりやがつたな。」

私たちは、湯からあがつてから、妙に明るい電燈が氣になつた。

「キミ、何ていう名だい。」

「お新というの。曾根崎のお新、梅田のお新、カミソリのお新いくらもあるの。」

彼女は、いきなり、そう早口にいつたかと思うと、からだを躍らせて電燈の真下に立つた。私は、はつと思つた



合うと言つただけだよ。

松子、それに今日私が洗濯物を干しておいたら勝手に位置を変えて、あなたのシャツにすれすれに自分の腰巻を干しておくんですもの、私、くやしくつて、今日は胸が一ぱいな（泣聲になる）

川村、（松子の肩に手をやつて）おい、おい、そりや邪推だよ。僕は一遍だつて、まだ隣りの奥さんと口をきいた事なんてないよ。

松子、（顔を上げて）ほんと、でも、人の干場を占領するなんて、馬鹿にしてるわ。

川村、今日は風が強かつたから、きつとづれたんだよ。

松子、そうかしら、そんならいゝんだけど、

川村（松子を抱えるようにして）つまらない邪推なんかで、お前とボクの戀愛生活をこわされてたまるものか。

松子、あなたごめんなさいね。（川村の首にからみつく）

四景

翌日の朝。

アパートの屋上物干場（一景と同じ）まん中のきりをを相当に隔て、各々赤いコシマキと白いサルマタが、ヒラヒラと風に靡いている。

—おわり—

スイッチをひねろうとして、ふと寝ている私の顔を見下したからであつた。そこに彼女は、しげしげとながめ入っている私の眼をカチリと目つかまえた。彼女はニンマリとつて、ブイとそりかえり、靜かに消燈した。向うの窓から赤い阪神の電飾がチカリと見えた。空には、かわらぬ星くすが、ばらまかれて、青くまたたいていた。

3 賣れ残りの醜女

「梅田のお新とかいつたな。私の尻の傷は一体誰れがつけたのかね。それをいつておくれ。ね、意識不明の三時間のことのはつきりすれば、一と晩でも二と晩でも、いつづけで遊んであげよ。さあ、いつてごらん。いえないのかい。なぜそんなに、だまつているの。お新、誰れなのか。まさかお前じやないだろうねえ。お前かい。お前ならお前と、はつきりいつておくれ。」

私は、もう蛇のような執拗さで、昨夜の私の行動が知りたかつた。しかし肝心のお新は、熔鉄の火焰のような肉体を蒲團にからませていただけで、追求する私の口を閉じてしまおうとするのだつた。

彼女の返事はなかつた。

「畜生ッ、お前だな。」

私は、そう思うと、お新という女が百倍も憎くなつて、彼女の首をしめている手に力がもつた。

このまましめ殺してやろう。いやーと思ひに、息の根をとめるのでは、おもしろくない。チクリチクリと刺して

刺して、刺し殺してやるんだ。エッヘッヘッ……。彼女の指が私のワキの下をくすぐつたので、ふと私は悪魔のような笑聲を出した。

「何ということをしやるんだ。こら焼け火鉢で殴つたのは、このお新だろう。この手、この手でジリッ、ジリッと焼きを入れたんだらう。パーマネントをよくも尻へかけやがつたな。」

私がいくら責めても。彼女は、おしのようにだまつてゐる。

それはかなり長い時間であつたろう。目がさめて見ると意外にも、私のかたわらに、ゴロンゴロンといびきを立てて寝ている女は、お新ではなく、色の黒い、齒のきたない、カボチャ見たいな醜女であつた。

それは、消燈してあつても、明けそめる空の光りが、明り通りのガラス窓から流れ込んできていたので、はつきりとわかつた。

「お新じやなかつたのかい。お新はどこへいつたのだい。」

私は、その女をゆり起してたずねた。

「お新ないて、いるものですか。いれはいまごろ、いい男を抱いているでしょうよ。」

破れた太鼓のような、調子はすれのガサガサ聲であつた。ああ、こんな女と寝ていたのかお新、曾根崎のお新、梅田のお新、カミソリのお新といつたわけ。

たしかに、私はそれを肌でさへ感じている。あまりにもコクメイに刻みつけられた、生々しい印象であつただけ。

けに、お新とは似てもつかぬ醜女をそこに見て、まるでキツネにつままれたような氣持ちになるのだつた。

お新は、きつと私が寝しずまると、姿をそつと消したものに違いない。私のウカツさというよりも、むしろ梅田娘たちのすばやさ、功利的なサーピスぶりに、またしても脊負投げを食つた私であつた。

「もう帰るの。」

彼女は、まだ寝たまま、洋服をつけている私を見上げる。

「うん、さんざんな目にあつたからな。これ以上、つかまつていたら、どんなひどい目にあうかも知れないよ」

「エヘエヘエ……」

実はケタケタケタとも聞えた。ちよどその中間調かな。まさにそのくすれた醜面から、私はバケモノをはつきり意識して、ぞつと脊筋をはしるものがあつた。

「あんた、だまつて歸えるのかい。サーピス料くらいおいていくものよ。お新さんでなくて悪かつたけどねえ。」

ああ、私は泣きたくなつた。それでは消燈と同時にお新は消えうせたのか古い言葉だけど可愛さあまつて憎さが百倍という。ちようどお新こそは、私にとつて憎さあまつて可愛さ百倍という逆な対象であつた。

私は、うちボケットの札入れを出して見た。昨夜一万円借出したばかりなのに、半分以上減つていた。なるほどなあ、すつかりカラッポになつていないところが、まあ、よかつた。実は助かつたと思つたのだ。

そのうちから数枚を抜いて、醜女の顔の上からバラバラと札吹雪をふかせてやつた。

市電が動き出してゐた。梅田界わいは、まだ眠つてゐたがサラリーマンや労働者の群れが、もう舗道にいそがしい足を波うたせてゐた。

私は、眠りたりない眼をこすりながら阪急へ入ると、入口に立つてゐるタバコ娘が近寄つてきた。

「タバコはどうです」

あッ、と聲を立てんばかりに、私はそのタバコ娘の顔をのぞきこんだ。赤いスエーター、豊かな胸のよりあがり、こげ茶色のズボンに白足袋、下駄であつた。

ルビーのように新鮮で甘い娘こそは、昨夜、私がガード下の暗がりでもとめ楽しんだベニ子と同じものではないか。

「キ、キ、キミだらう。昨夜、ね。ベニ子さんだらう。」

私は、ピースを三つ買つてやつた。金を渡すとき、その手をにぎりしめたら、彼女は、鼻に小じわをよせて笑ひながら、

「ちがうわよ、ちがうわよ……。」

といつた。その聲が、動作の一つ一つがベニ子であつた。たしかにベニ子であつた。

—おわり—

第一集好評！

興安嶺 第二集

近日發賣

敗走關東軍其の後の實相

第二集豫告

- 一、血涙の避難行
- 二、反亂せる滿洲第五軍
- 三、狂亂の紅槍会匪
- 四、伊勢順之助北進か？
- 五、日系娘子軍哀歌
- 六、松嶺山脈
- 七、虐殺か！肅正か？
- 八、蠢めく死体
- 九、ウランバートルへの道
- 十、興安嶺よりの密使

世に盡く悲劇の紀

崩れゆく地平線

(續最後の關東軍)

目下発売中

“津愴苛烈を極むるその内容
絶讃の嵐を浴びて續篇登場”

大阪市南区
生玉町十番地

近畿圖書株式會社

振替大阪122631番
奈良縣八木町

原稿募集

奇譚クラブの名にふさわしい珍奇な内容のもの、特に世に秘められた記録物。眞實に立脚した暴露記事實査による探訪記事。等特に歓迎。

- 一、枚數 十枚乃至五十枚
- 二、内容 前記以外の如何なるものにも結構です
- 三、締切 昭和二十五年七月三十一日
- 四、稿料 採用篇には、相當稿料御支拂いします
- 五、送り先 堺局區内菅原通曙書房編集部宛
- 六、開封 第四種便にてお送り下さい
- 七、原稿は一切御返却致しませんが採否の御返事は致します



奇譚クラブ

第二十二集
定價七拾圓

珍談と奇聞特集號

昭和二十五年六月三十日
昭和二十五年七月一日

發行所 曙書
編集印刷 吉田
兼發行人 枝房